聖魔の軌跡

銀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
聖魔の軌跡

【Ｎコード】
Ｎ６２７９Ｒ

【作者名】
銀

【あらすじ】
半分世捨て人を自称する無愛想な貧乏傭兵――鳳仙は賊の討伐依頼を受けて向かった隠れ家で『天の御遣い』である女神と邂逅する。
※天の御遣いは女性。オリジナル設定の傭兵があることを最初に御理解ください。

第一話　女神降臨（前書き）

あらすじにも書きましたが、天の御遣いは女性。オリジナル設定の傭兵があることを最初に御理解ください。

第一話　女神降臨

天高く聳え立つ日輪の輪を遮るものは何もない。

遥か彼方まで――曲線まで伺えそうな――広がる地平線。その上にどっしりと構えた粗相な山脈。

見渡す限りそれしか、草木すらも見受けられない、人の造りし影の無い平原は小動物の姿さえ無い。天を仰げは突き抜けるような果てのない空を飛翔する雉が二羽。その背に陽光を受けながら我が物顔で舞い続ける雉の鳴き声だけが生気の無い地上を照らしているように思える。

幽州啄群。五台山の麓。

霊山と称されし地を歩く一つの騎影。

馬上の若者はくせっ毛のある黒髪を渇いた風に靡かせている。精悍な顔立ちから輝く鋭い瞳が二つ。血のような、しかしそれでいてルビーのような色をした瞳は人を惑わす妖艶な魔力を彷彿させた。

胸元の開いたゆったりとした着物の腰に差した白刃の剣。しかしその剣は刀身が柄と同等の刃渡りしか持っておらず既に剣としての役割は失っていた。そう、叩き折れていた。その代用品とばかりに長槍も携えているのだが穂は刃毀れており、頼りない鈍い光を発していた。

男の名は鳳仙。字は奏明。

漢王朝が腐敗し、重税から盗賊まで、廃れに廃れ回ったこの弱肉強食の時代。彼は傭兵として各地を放浪しつつ生計を立てていた。

現在も近場の都から依頼された盗賊の討伐を受注して、隠れ家を目指しているのだ。

「……いい加減、貧乏傭兵から脱出したいんだが」

無理だろうな、と鳳仙は折れた剣に触れた。

言い方は何だが盗賊の出現率が増えたことによって傭兵の価値は高まったと言えよう。それは僥倖だった、と。

しかし鳳仙は一人で行動している為、どうしても民から信頼は中々得られない。一人では不可能だろうと高を括られて雇ってもらえないのだ。

今回の依頼。達成したとしても剣の修理費に全てを持っていかれそうだ。この世知辛い世の中、単独行動の傭兵に次々と仕事が舞い込んでくるはずはなく安々と金を消費するなど愚行以外の何にでもなかった。

「結局、剣の修理もままならぬまま、数日の生活費に全て消えるのか」

いい加減自分も傭兵団の仲間に、もしくは結成するべきだろうか、と鳳仙は呻いた。

剣に人生を注いだ自分が協調性に欠けることなどは自負している。だから今まで各所からの誘いを蹴って来たのだが、剣を握らなくなってもう数週間は経過した。

剣の勘が無くなるのだけは避けたい。

今後の身の振り方はもう少し社交的になるべきかと呟きつつ手綱を強く握った。

「何処かに金でも落ちてないものか」

藁にも縋る思いだった。

速度を上げつつ大した期待はしないまま周囲を見渡してみる。

乾燥し、ひび割れた大地に横たわるものと言えば白骨化して無造作に朽ち果てた人間だった。

「笑えんな」

◇◆◇◆◇◆◇

連なる山脈を途中下山し、鬱蒼とした森を越えた山の中に盗賊の隠れ家はあった。

鳳仙は憐れみの瞳を一先ず隠れ家から離し、呆れた声で吐き捨てる。

「連中の思惑が外れたな」

警戒心が薄れる。鳳仙は愛馬から降りて長槍を握ると愛馬の頭をポンポンと軽く叩いた。

飼い馴らした愛馬はしつけた通り、その場から離れた。側に置いておくと逃げる分には都合がいいが殺されやすい。この森なら姿は容易に隠せるだろう。

愛馬が茂みへと姿を消したのを確認して鳳仙は再び視線を隠れ家へと向けた。

山を掘って造り上げた隠れ家というのは大群が押し寄せた際に絶大な威力を発揮するが、少数が押し寄せた際はこれ以上ないほどに不便なのだ。

盗賊は大群が押し寄せればこの狭い通路を利用して一対一に持ち込むことを想定していたのだろうが、今回の盗賊の敵は鳳仙一人。だから盗賊の思惑は外れた。

「数が減るまで広間にはいかないようにせんといかんな」

いつも通りの渋面を二割ほど更に引き締めて洞窟へと侵入を開始する。

長槍の具合は毎度の如く最低だが、盗賊風情に敗北をきするつもりはない。そして戦利品として良質な武器があれば掻っ攫うつもりである。

灯籠に照らされた薄暗い通路を歩きつつ、鳳仙は眉を顰める。

（ポッと出の盗賊がこしらえたにしては整っているな。元々何者かが使っていたのか）

数回、強弱を付けて地面を踏む。荒れ地よりもしっかりと踏ん張りが利く足元を確認した。

素早い対応が取れるよう、しっかり地に足を付けて先を進んだ。狭い通路が開ける手前の壁に寄り掛かり、先の様子を伺う。

（何だ……）

姿を隠しつつ伺う為、全体を捉えることは不可能だが広間の半面は鳳仙の瞳にある。

それはいい。

五人の盗賊が下卑た笑みを浮かべて輪を作っている。

それはいい。

盗賊の討伐。それこそが都の長から受注した依頼であり最優先事項。鳳仙は長い時間を修業に費やす為に、同時に生計を建てられる傭兵を選んだ。その過程の中で傭兵という職業に愛着を抱いたし、誇りすらも感じている。ゆえに自分がこれからすべきことを何よりも理解している。この狭い通路で戦闘に持ち込み、一対一を繰り返して敵を討つ。

そうあるべき。それが依頼達成の一番の確率。

しかし、それすらも凌駕する事象に鳳仙は自分が何をするべきかを不意に見失ってしまった。

輪を作る討伐の中心に寝かされた少女。

遠くから見ても分かる。その少女の異質な雰囲気が、空気と視界を通してヒシヒシと伝わって来た。

「ん……」

地面の硬さに寝苦しさを感じて呻いたその声は風が音楽を奏でるように透き通っており、下卑た笑みを浮かべた盗賊さえも息を呑んで呼吸を忘れた。

腰まで真っ直ぐ伸びた水色の髪は薄暗い洞窟でさえも陽光を受けて煌めいているようだった。呻くと同時に捩る身体の動きに合わせて緩やかに波打つ。

神さえも魅了させたような光り輝く美少女だった。少女の呻き声たった一つで盗賊達は己の行いの浅ましさ、罪深さを思い知らされたように身体を硬直させていた。

今ならば瞬殺できる。

足音を消して背後から一閃で全員とは言えないものの数人の首を両断できる。

しかし、肝心の鳳仙でさえもその少女に全ての思考を奪われていた。

魔性？　違う。あれはあらゆる穢れの接触を許さない神々しい異彩を放っているのだ。その存在を万人に知らしめるようなオーラは絶世の美少女と称してさえ物足りないようだ。

この心が枯渇した時代。絶世の美少女の評価さえ物足りない存在に誰もが彼女から神を、いや、女神を見出だしそうだった。

「こ、この女。もしかして今噂になっている『天の御遣い』なんじゃねぇのか」

盗賊の一人が震えた声で鳳仙はハッと離れていた意識を取り戻した。

この乱世に平和を誘う天の使者――『天の御遣い』。

発信源は知らないが鳳仙も小耳にくらいは挟んだことはある。だが、鳳仙が現在憂いているのは折れた剣の修理費に集中しており、元々この乱世は何処か他人事のように突き放した気持ちで見ていた。剣一筋だった鳳仙はそれに気取られてばかりで世の中への関心は皆無に等しかったからだ。

そんな鳳仙でさえ、あの少女には『天の御遣い』だと言う言葉がしっくり来ると思った。悪く言えば箱庭だが、あの少女はこの穢れた世界は不相応なのだ。

「そういや五台山の麓に不自然に倒れてやがったしな」

「ど、どうすんですかい」

「そりゃお前、大人しく元の場所に戻した方が……」

「でも、もし本物じゃなかったら勿体ねーよ。こんな上玉の女、今まで見たことないぜ」

「本物だったらどうすんだ！　俺ら、神の裁きとか受けるんじゃ……！」

戦慄した表情で盗賊達は顔を突き合わせる。自分達が手を出したものが一体どれ程のものか思い知り、天罰に恐怖しているのだ。ただ一人を除いては。

「待て」

その男。リーダー格と思わしき体格に恵まれた男は唯一、連中の会話の中で狂喜を見出だした。

視線が男に集まる。

「この女を掲げれば、俺らは盗賊から英雄に一変するぜ？　『天の御遣い』に従う者達として名を上げれば酒も食糧も女も権力も、何もかもが手に入るんだ」

『……』

連中の表情が硬直した。

「神の裁き？　俺らはこの女を助けてやったんだぜ。感謝こそされど、裁かれる筋合いなんて何処にもない。そうだろ？」

硬直した表情が、徐々に穢れし喜色に変わって行く。

「もう一つ言っておけば、この女を孕ませておけば立場は一層確立するだろうよ。御遣いの子――そう、神の子の夫としてな！」

そして遂に、少女の声一つで浄化されていた負の感情が蘇る。最早見慣れた、下衆の笑み。

迷うことはない。

鳳仙は広間であることなど構いなく飛び出した。

あの少女が盗賊に触れることに激しい嫌悪感を抱いたのだ。

正義の味方を掲げるつもりはない。下衆相手に正々堂々たる精神を掲げるつもりはない。

気配を消し、背後から長槍を横に薙いだ。

スパン……。

いっそ心地好いと思える閃光に三人の首が宙を待った。男達はこれから女神への凌辱劇に思いを馳せた下卑た笑みのまま、自身の死すら感じ取ることのできぬまま絶命した。ボトッと醜い音を立てて転がる顔はやはりそのままだった。

『――え？』

男達は唐突に起こった事象を認識できず、三人の姿を凝視する。

たった今まで『天の御遣い』に怯え、『天の御遣い』の利用価値に狂喜した仲間の首が無くなっているのだから瞬時に反応など出来るはずがなかった。凍り付いたように、瞬きもせずに見つめている。

姿勢を落として薙いだ鳳仙の姿などあくまで片隅程度にしか映っていないのか、それとも本能で拒絶しているのか、鳳仙すらも認識できずにいた。

それもそうだろう。首の無い男達は今の生を主張するようにごく自然に立っているのだ。

無くなった首の変わりに血飛沫が上がった。顔が、服が、地面が、赤に染まってようやく凍り付いた意識が鮮明になっていく。男達は現実を認識して表情を恐怖に染めた。

しかし、その恐怖に纏わり付かれるあまり鳳仙の姿だけは唯一認識出来ていなかった。

『ヒ――』

絶叫。

それすらも許されないままに全ての盗賊は先の三人の後を追った。

それはまさしく罰であった。

群れを為し、武器を握り、弱者に矛先を向けて快楽に陥った愚者達の結末。

女神という表現こそが相応しい『天の御遣い』と思わしき少女を

醜い歯牙に掛けようとした愚者達の結末。

これは人誅なのか、それとも天誅なのか、判断は誰にも下せない。

ボトッと再び醜い音が立て続けに足元から聞こえたが、鳳仙は一瞥すらもくれてやらずに、穂にこびりつく血を振り払う為に手先を使って長槍をS字に振った。

「さて……」

壁に無造作に立て掛けてあった武器を発見するなり鳳仙は少女よりもまず武器の選別に移った。剣が無いことに溜め息を着き、その中からもっとも質が良かった槍を手に取るなり、無駄な行為だったか、と血を振り払ったばかりの長槍を捨てた。元々死者から頂戴したものだ。愛着などカケラも無い。

任務完了。武器調達完了。問題無し。

そのはずだったが……。

「この娘は一体どうするべきか」

鳳仙は行く町々で聞いた噂を思い出す。

この乱世に平和を誘う天の使者――『天の御遣い』。

枯渇し、疲弊した民の唯一の寄り所とされていた――しかも本物っぽい――存在が今この場にいる。

民が知れば天にも登る想いで狂喜乱舞するだろう。もしかすると老い先短い老人などショック死してしまうかもしれない。

乱世に雷を走らせる革命の切り札。

変わりなど何処にも存在しないこの世で最も純粋無垢で尊き命。

それが今、この場にいる。

自分の眼前で眠っている。薄い水色の髪と遜色無いドレスを身に纏い、不思議な紋章の彫られ、赤い宝石が埋め込まれた金の装飾品を首と手首に嵌めている。

それよりも気を引いたのはほんのりと輝く羽衣だ。羽衣自身が神威の輝きを放っている。

（決定打だろうな、これは）

もしかすると自分は動乱の星の元に生まれてしまったのだろうか。ここが洞窟でなければ天を仰いでいた。

もし彼女と関われば否応無くこれから起こる激動に飲み込まれてしまうのではないか。戦いも戦争も別に良い。傭兵として参加するなら別に良い。

問題は戦争に、人殺しに、自分達に正義を掲げることを強要させられることだ。

正しい戦争なんて無い。

乱世を突き放した気持ちで見据えた鳳仙の感情だ。いや、同じように半分世捨て人となった人間なら同じ感情を持っているだろう。

しかし世を憂いる者は違う。

己の目指すものに絶対の正義を見出だしているから行動を起こすのだ。この醜き世界に新たなる風を吹き込んで変革を起こしたい強き信念と優しさを兼ね備えた猛者達は。

しかし鳳仙はそこまで殊勝な感性は持ち合わせていなかった。

束縛を嫌っているからこそ傭兵として各地を巡り歩いているというのに、その輪に自分から飛び入るのは良いとしても巻き込まれるのは御免なのだ。

「とりあえずここから離れてから考えるか」

鳳仙は触れていいものかと逡巡し、意を決して少女を抱き上げた。

煌めく羽衣を邪魔に思い一瞬眉を顰めたが、剥ぎ取ることなく洞窟から出ていく。

厄介事に巻き込まれる怪しい匂いを経験から感じ取ったが、あのまま少女を置き去りにするのはさすがに気が引けた。一応ながら、偶然ながらに助けた身であるのだから最低限のことはしておこう。それが鳳仙の出した結論である。

洞窟から抜けると視界が焼けたように赤く広がり、鳳仙は目を閉じた。洞窟の闇に慣れた目に突き抜けるような青空に聳え立つ日輪

の輝きは毒だった。

少し時が経ち、閉じた瞳から赤が薄くなったと同時にうっすらと目を開いていく。

そして理解した。

歎きたくなった。

どうやら自分は本当に動乱の星の元に生まれてしまったらしい。今日という日々は老後を迎えても尚脳膜にしっかり焼き付いて離れないだろう。

「低俗な賊め！　今すぐその汚い手から女子を解放せよ！　さもなくばこの青龍偃月刀の錆にしてくれようぞ！！」

（解放しても間違いなく錆にするつもりだろうな）

深い溜め息を吐きたかったのだが、鳳仙は諦めてただ真っ直ぐと前を見据える。

そこには三人の少女達。その内二人は自身の獲物を構えて剣呑な目付きで鳳仙を睨んでいた。

第二話　聖域（前書き）

ｈｔｔｐ：／／ｈｐ４３．０ｚｅｒｏ．ｊｐ／ｄａｔａ／９４５／ｍｂｉｄｅｘｔｒｏｕｓ／ｐｕｂ／１．ｊｐｇこのＵＲＬか月光蝶・桜華というサイトに主人公の画像があります。

第二話　聖域

対峙する二人の少女は険しい顔付きで威圧感を放っていようとも美しいものだった。敵と対峙しつつ、後ろに控える女性を守護するように立つ姿は凛々しい騎士を彷彿させた。

空気を振動させる覇気。隙の無い佇まい。突き抜ける炯眼。一流すらも凌駕した武芸者であることは一目瞭然である。

白梅のような手に握る獲物は鏡に負けない煌めきを刃に宿して猛々しい。盗賊の長が使っていたであろう――一番まともだった――槍も彼女達の槍と比べるとみすぼらしい。ボロ雑巾のようだ。

（この状況でだけは会いたくなかったな）

稀に見る英傑との対峙は是非とのものだったが、どうやら彼女達は鳳仙を盗賊の一味だと勘違いしているようだ。そんな誤解が生じたままで戦いに熱中するなどできるはずもない。

そもそも鳳仙は両腕で気絶した女性を抱いているので戦うことは不可能だが。

「俺は盗賊じゃないんだが」

「白々しい！　ならばその腕に抱いた女子はなんだ！？」

「拾った」

（ヤバい。言葉足らずだった）

即答する自分に内心で舌を打った。

先程から怒り心頭で叫ぶ黒髪サイドテールの女性の顔が更に赤く染まり、眉根に深い皺が入る。

「拾った……だと？　貴様らは人攫いすらも、まるで物を拾ったかのような感覚なのか！？」

「勘違いだ。お前は根本的なところから間違っている」

俺は盗賊の討伐依頼を受けて、此処に来た。そして討伐後、隠れ家に囚われたいたこの女性を助けたんだ。

言葉に変換すると１０秒にも満たない文章だ。しかしこちらの事情を察してくれるほど冷静な感情は持ち合わせていない様子。

「勘違いだと！？　この期に及んで何を」

「とりあえず落ち着け。そして俺の話を聞け」

「賊の見苦しい言い訳など聞くものかッ！」

ではどうすればいい！？　あまりの濡れ衣っぷりに鳳仙はいっそ怒鳴り付けてやりたかった。

しかし彼女達は相当の手練れ。下手な返答は無意味な死へと変貌してしまう。

こんな油断大敵は初めてであった。

斬り掛かって来るかと思ったが、彼女達は攻めあぐねていた。一刀の元に斬り捨てる姿勢を取っていたが、忌ま忌ましげに表情を歪めて停止していた。

（ああ、なるほど）

鳳仙は視線を落とす。

両腕で抱いた女性の存在が抑止力になっていたのだ。助けに来た、しかし誤って傷付けた。これでは本末転倒である。

まるで人質を取っているかのような現状に心底嫌悪感を抱いた鳳仙であるが、彼女達（特に黒髪サイドテールの猪っぷり）を鑑みると話し合いに持ち込める雰囲気ではなかった。

（ならさっさと逃げるか）

戦闘狂とまではいかないものの、それに近い感性を持つ鳳仙だが、しかし何もかもが意に反する状況で戦闘に興じるほどではない。

ここが潮時である。

鳳仙は壊れ物を扱うように優しく片手を離して指を口にくわえると息を吹き込んだ。

ピー！　と高音が反響するように森へ広がっていく。

咄嗟に身構える女性達を横目に捉えつつ僅かに膝を曲げる。

すぐさま指笛に導かれるように、右手の茂みから地を蹴る蹄の音が近付いて来る。

反応したのは、ずっと鳳仙と会話をした黒髪サイドテールの女性。しかし駿馬より早く行動に転じることは物理的に不可能であり、

「貴様！」

と叫んだ間に鳳仙は茂みを突き抜けて来た愛馬の手綱をしっかりと掴み、片腕に抱いた少女を膝に乗せて乗り込んだ。

騎馬は速度を緩めることを知らず――まさに刹那の出来事であった。

背後から「待て！」と叫び声が聞こえる辺り、彼女達は徒歩なのだろう。ならば追い付けるはずもない。

（あいつらからすれば、完全に悪役だな）

やれやれと鳳仙は肩を竦めて小さく呟いた。

「すまんな」

◇◆◇◆◇◆

「クッ！」

まんまと賊（鳳仙）に逃走を許してしまった黒髪サイドテールの女性――関羽は手に持った槍を思わず叩き付けそうになった。賊を、世を乱す者を打ち倒す為の力。今回はそれがまるで役に立たなかったのだから。

しかし寸前のところで思い留める。込み上げる敗北感と怒りを、歯を食いしばり、深呼吸にて吐き出していく。

（取り乱してどうする。状況が変わるわけでもあるまい）

震える吐息が整うまで静止して、踵を返す。

「鈴々。まずはこの洞窟を根城にしている賊を叩いてから、先の奴を追うぞ」

「了解なのだー」

無邪気な笑顔で返したのは十代前半の（それも手前側）の少女。背丈に似合わない槍を肩に担ぎ、揚々としている。

状況を理解していないのか、それとも理解して尚かつ振る舞っているのか、せっかく平坦になった関羽の眉が再びひくついた。

「鈴々。たった今、女子を人質に取った下衆な賊を取り逃がしてしまったばかりなのだぞ。もう少し緊迫感というのを持て」

「にゃー。でもあのお兄ちゃんからは悪意なんて感じられなかったのだ」

鈴々と呼ばれた少女は無邪気ゆえか有りのままの空気を読み取り、鳳仙を賊ではないと判断していた。しかし敵愾心を敷き詰めるように抱いている関羽には理解されなかった。

「何を言う。あの妖のような朱い眼。もしかすると賊以上の悪党かもしれぬ」

それどころか鳳仙の位置付けは更に酷いものへ変わった。

的外れな推理に鈴々は「にゃー……」と呆れたように呻き、隣に立つ女性の袖を引いた。

「お姉ちゃんはどう思うのだ？」

「う～ん。私も鈴々ちゃんと同じ意見かな。それにあの人、何か言おうとしてたけど」

姉と慕う女性は鈴々の頭を撫でながら言った。心底心地好さそうな蕩けた笑顔を浮かべる鈴々を見下ろしてクスクスと笑う。

「何を言うのですか、桃香様まで」

「だってあの人、あの女の子のことをまるで壊れ物を扱うみたいにソッと触れてたんだよ。ただの賊がそんな丁寧に女の子に触れるなんて思えないもん」

鈴々から姉と呼ばれる女性――桃香は二人に護られながら鳳仙の一挙手一投足に注目していた。二人のように戦闘の動作として見ていなかったからこそ、気遣いと言うものを見抜けたのかもしれない。

桃香は続けて言う。

「もしかすると都で言ってた傭兵さんかもしれないよ。たった一人で向かって行ったって都庁さんも言ってたし」

こちらはしっかり的を射ていた。頭を回転させたわけでも思考したわけでもなく、ポッと思い出したような言い方だったが見事に的中していた。

「ではなぜ逃げたのですか。傭兵なら傭兵とはっきり述べれば」

「愛紗が聞く耳を持たなかったのだ」

「うっ」

そう言われると何も言い返せない。関羽――愛紗は小さく呻いて顔を赤くした。

「全く。愛紗は猪なのだ♪」

「んなぁ！？」

まさか、まさか、まさか鈴々に「猪」と呼ばれる日が来ようとは、と関羽は全身に雷に似た衝撃が走るのを感じた。即座に否定してやりたかった。「猪はお前であろう！」と声が枯れてしまいそうなボリュームで叫びたかった。

だが今回ばかりは全面的に非は関羽にある為、反論などただ見苦しいだけである。ギリギリと歯を食いしばって八つ当たり気味に洞

窟を睨んだ。

「例えあの男が傭兵だったとしても、もしかすると討ち漏らしがあるかもしれません！　私が先行して様子を見て来ますから桃香様は鈴々と行動を共にしてください！」

言うなり関羽は（まさに猪の如く）洞窟へと突撃した。ズドドドと猛進する足からは土煙がコミカルに上がっている。

「え？　ちょ――愛紗ちゃん！？」と背後から叫ぶ桃香さえ無視をして慰み者でしかなくなった賊を探す。その姿は妖すらも尻尾を巻いて逃げ出しそうな程恐ろしい形相だ。

しかし結局討ち漏らしなど存在せず、行き止まりである広間に転がる肉塊を視界に入れた。鳳仙が跳ね飛ばした首を足元に、八つ当たりの対象を無くした関羽は行き場の無い怒りの矛先を鳳仙へと向けた。

（クッ。この屈辱……忘れんぞ朱目の男ォオォオオーーーーッッ！！）

しかしその怒りも冷静な本来の関羽の姿に戻って、八つ当たりの行いだったと反省することになる。

◇◆◇◆◇◆◇

小枝関係無しに獣道を突き進んで開けた先は異界を思わせ、鳳仙の思考を麻痺させた。瞬時に手綱を引いて騎馬を停止させる。

神託とばかりに陽光を目一杯受けて鮮明に移るはずの一帯は優しい霞みが掛かっており、まるで純白の天蓋を見ているようだ。その天蓋の先には色取り取りの花が絢爛と咲き誇るアクアマリンの透き通った小さな泉。

まさにこの少女に相応しい神聖な景色であった。しかしハッと麻痺した思考を取り戻した鳳仙は見えざる意思に導かれた感覚に囚われ、それが不快だったのか片眉が吊り上がる。しかし喉の渇きを感じつつあったので丁度良いとも思った。

「一度ここで目覚めを待つか」

直接都まで持ち帰るには少女はあまりにも目立ちすぎる。神聖な雰囲気と人並み外れた美しい容姿、煌めく羽衣。少し聡い人間なら天の御遣いと結び付けるのは容易である。瞬く間に少女は何も知らぬまま神と崇められ、都合の良い道具のように担がれるだろう。

先の賊のように、ずる賢い人間の手に渡れば被害者面して少女を味方に付け、甘い蜜を吸おうと舌鼓を打つに違いない。事実となればこれほど後味の悪いものはない。せめて優良な人間に預けて再び放浪の旅に出たいのが本音である。

（曹操……は駄目だな。奴に渡せば別の意味で穢れ兼ねん）

騎馬から降り、片腕に抱えた少女を両腕に持ち替えて抱き上げる。

血色が悪くないのを確認して木陰にソッと寝かせた。

（ならば他に誰かいるか？）

記憶を探りつつ泉の水を手に掬って口を付ける。渇いていた喉に流れ込んだ冷水は溜まったストレスを解消してくれた。

隣で同じく泉の水を喉を鳴らせて飲む愛馬の頭を撫でると、いつも通りの渋面に少しの笑みが灯った。

（こういう時は自分の無愛想っぷりを呪うな）

結局思い浮かんだ人物と言えば以前一度だけ鳳仙を雇った曹操ただ一人であった。名実ある武将はもちろん他にもいるのだが所詮一介の傭兵でしかない鳳仙を知る者はいない。実力はあっても彼に名声は殆ど無いのが現実だ。

（さっきの連中は……）

名を知る機会は無かったが、賊に深い敵愾心を抱き、尚かつ実力も相当な様子だったから、彼女達になら任せていいのではないか。

黒髪サイドテールの女性の猪突猛進ぶりを思い出して即座に断念する。

（駄目だな。あの猪女、出会えば間違いなく斬り掛かって来兼ねん）

遭遇すれば如何なる場所でも戦闘開始になることを鳳仙は本能で感じた。

つまり、

（当面は俺が面倒を見ないといけないのか）

頼れる者がいない以上、そうするしかなかった。緩んだ頬がまたいつも通りの渋面に戻り、鳳仙は溜め息をつく。

「仕方ない。なるようになるか」

濡れた手を振って雫を払い、腹を括った鳳仙は緑陰に寝かせた少女の隣に腰を降ろした。

ただ何をするわけでもなくボーッと、泉につかって嬉々として水浴びをする愛馬を眺める。水と戯れるその姿は騎馬とはほど遠く無邪気な子供にすら見える。そんな中で鳳仙は轡や鞍を外しておくのをすっかり忘れており、泉の中に入り込んでいた。

一瞬目を見開き、身体を動かそうとしたが諦めた。今更だった。幸い濡れて困るようなものは鞍に入ってないし、日当たりも抜群なので数刻の内に乾くだろう。

鳳仙は愛馬が水浴びに満足して泉から上がってくれば外すつもりだ。その間の無駄に空いた時間は鍛練に費やさなかった。この神聖な聖地のような場所を汗臭い闘気で汚すことは到底出来なかったのだ。愛馬はともかく。

というわけで鳳仙はまじまじと少女の顔を眺めることにした。

(基準はよく分からんが、多分俺が出会った中の女にこれほどの容姿をした者はいなかったな)

透き通るような白い肌。

陽光というよりは月光のような輝きを浴びて煌めく艶やかな水色

の髪。

そよ風に揺らめく長い睫毛。

筋の通った形の良い小さな鼻と肝斑一つ無い綺麗な曲線を描いた薄く色付いた頬。

触れれば柔らかく弾みそうなふっくらとした桜色の唇。僅かな隙間からは白い歯と規則正しい呼吸が聞こえて来る。

そして華奢でありながらメリハリの利いた肢体を覆う髪より少し濃い水色のドレスは清楚な雰囲気を、腕に二、三絡み付いて広がる淡い光を帯びる羽衣は神聖な雰囲気を醸し出していた。

この大陸に無い顔立ちはどうしても天界を思わせる。それは乱世の有無に関わらず誰もがそう評価するだろう。少女はそれほどに美しかった。

少女を眺めているだけで時間が過ぎて行くことに不思議がる鳳仙は、おそらく自分が少女に魅入っていることに気付いていない。

１０分、２０分……と時間が過ぎて空が黄昏れに染まりつつあった時、長い睫毛は震え、閉じられていた瞼が強弱を付けてゆっくりと開いた。

蒼穹の瞳が、鳳仙を捉える。

第三話　聖と魔

水面を凪ぐような澄み渡る蒼穹の瞳は鳳仙の紅蓮の瞳と対を為すようだった。神聖の蒼と魔性の紅。

引き込まれそうになった。魔を浄化する眼は宝石よりも遥かに輝きを帯びた純粋無垢の結晶体。しかし触れたいとは思えなかった。喉から手が出るほどの至宝だと言うのにそんな醜い感情は沸かなかった。

少女の神聖な雰囲気が負の感情を浄化させたのだ。

「お前は……一体何だ？」

眉根を寄せた鳳仙は警戒心を抱きつつ少女を起こした。今更ながらに、この少女の危険性と重要性を深く理解する。

少女は表情を読ませない眼差しを向けたままふっくらとした唇を動かす。

「私を……知らないのですか？」

（どういう意味だ）

天の御遣いであることを理解しての発言だったのか、それとも天界でも少女は有名だったのか、鳳仙は訝しげに片眉を上げた。最早この世界の人間であるというカードは無い。

「知らん。知っていればただの無用な質問だろ」

「そう……でしたね」

少女は身体ごと鳳仙と向き合って丁寧に頭を下げた。

「私は月詠（ツクヨ）と申します」

「俺は鳳仙だ。で、もう一度問う。お前は何だ？」

「何だ――とは一体何を示しているのでしょうか。抽象的過ぎて何と答えれば良いか分かりません」

少女――月詠は平坦に言った。

言われてみればその通りだな、と鳳仙は納得して回りくどい問い掛けはやめて一気に確信を突くことにした。

「お前は天の御遣いか？」

「違います。私は巫女です」

「巫女？」

聞き慣れない言葉に鳳仙が首を傾げると、月詠はやはり平淡な声で説明する。

「神託――神のお告げを聞くことのできる唯一の存在を巫女と呼びます。我が家の秘宝であるこの天女より授かりし羽衣が何よりの証

です」

「なら、今すぐそのお告げとやらを聞くことは出来るのか？」

「いえ。年に一度だけこの神殿で――――え？」

初めて月詠の顔に動揺が走った。僅かに目を見開いて周囲の景色を噛み付く勢いで凝視する。

風に靡いて自然の息吹を奏でる生い茂る木を、草を、絢爛と咲き誇る花を、アクアマリンの透き通った泉を、水浴びを満足して草に身体を預けて眠りこける騎馬を、そして何処までも突き抜ける青空を、天高く聳える日輪の輪を。

――一字一句とて見逃さない学者のような熱さで、眼前に広がる生命の在り方を目に焼き付けていた。

「あの……」

震えた声で月詠は恐る恐る鳳仙に視線を戻した。まるで人形っぽく淡々と平淡な声で質問を返していく月詠の瞳と表情が初めて人間となった。

「あれは――森ですか？」

月詠は無造作に生い茂る木々を指して言った。

「あれは花ですか？」

返答を待たずして色取り取りの花を指差す。

「あれは泉ですか？　あれは馬ですか？　あれは空ですか？　あれは太陽ですか？」

「落ち着け」

矢継ぎ早にそれぞれを指して問い掛けて来る月詠に、鳳仙は呆れた声で一先ず静止を呼び掛けた。

「とりあえずお前が指差したものはしっかり合っているが――見たことないのか？」

低レベル。いや、それ以前の問い掛けに鳳仙は表情にまでは出さないものの内心驚いていた。まさか十代後半らしき少女にそのような質問をされるとは露にも思ってなかった。

興奮に頬を赤らめていた月詠は「ぁ」と呻き、表情を消して俯く。

「物心着いた頃より私は神殿の中から出ることを許されませんでした。神官が事務的に持って来る食事と娯楽の書物。それだけが私の世界です」

そう言って達観した眼差しで周囲を見渡す。

「皆様が当たり前に見ている光景――書物でしか知らない私には全てが初めて見る光景です」

達観した眼差しの中に羨望が混じっていた。

「そうか」

と、しか言えない鳳仙は自身の語彙（ボキャブラリー）の無さを恨んだ。『だが今、お前の眼前にはちゃんと世界が広がっているじゃないか』とフラグ1を立てることは出来なかった。そんな言葉は思い付かなかった。

「ところで――」

「ん？」

月詠は平淡な声で話を変える。

「ここは何処でしょう？」

「……」

まぁ……そうなるわな、と鳳仙は頭を掻いた。

「ここはな――」

言いかけて口を噤んだ。

ここは……何処だ？　幽州と言えばいいのか？

乱世？　具体的にはどんな風に乱れている？　弱肉強食とでも言えばいいのか？

鳳仙という人物は一時山篭もりで修業した時期があり、その後も傭兵として気の向くまま各地を転々として、深い人付き合いを極力拒んで来た。世を憂いる心境はカケラあるかないかの他人事。半世捨て人と自称するだけあって情報収集能力は下の下以下の味噌っ滓である。

そんな男が説明出来るものなどあるか？

否。

「よく知らん」

「……」

目に見えて月詠の好感度が下がって行く。大きく開かれた二重の瞼が半分ほど閉じられている。

「悪いな。弱肉強食の世界ということしか言えん。それにここはアンタの住んでいる世界じゃないんだから大雑把な説明しか無理なんだ」

「私の住んでいる世界じゃ……ない？　ここは■■■ではないのですか？」

「？　すまない。よく聞き取れなかった」

「■■■です」

理解不能な語調。鳳仙はもう一度聞き返すことはせず訝しげに眉を顰めた。

理解したところでその世界に行くわけでもあるまい。知ったところで何かが変わるわけでもあるまい。結論付けた鳳仙は無意味な質問はやめて返答する。

「聞いたこと無いな。こっちの世界ではアンタは多分天界と呼ばれている世界の住人だ。で、アンタはこの世界で天の御遣いなんて呼ばれる救世主様だ」

「天の御遣い？　救世主……？」

胡散臭そうに顰っ面で鸚鵡返しする月詠に、鳳仙は確信めいて頷く。

「さっきも言った通りこの世界は弱肉強食なんだ。王朝は腐敗して盗賊は害虫のように犇めいている。金と力の無い連中は日々を怯えて過ごし無意味な死を迎えて散り、力と金のある連中はその上に胡座をかいて私腹を肥やす者が多い。尊厳などあったものではないな」

自嘲気味に鳳仙は口角を上げた。しかしその表情には憂いも悔しさも滲んでいない。

白銀の霞みが掛かるほど陽光の当たる場所では鮮明にその様子が伝わった。その笑みが世界に向けた嘲笑であることに。

「そんな負の連鎖が輪となって繋がる世界で人々は神を見出だした――それがアンタだ」

月詠は何とも言えない表情で息を呑み「私……？」と呟くことしか出来なかった。地震の上に立つように状況は飲み込めずグラグラと思考回路は揺れていた。

そんな少女の容態を顧みず、朴念仁は目に掛かった黒髪を鬱陶しそうに掻き上げる。

「何処から噂が広まったかは知らないが、その外見と雰囲気は人目どころか心すらも惹かせる。心を病んだ人間なら誰もがアンタを天の御遣いと崇め、奉るだろうな。その光り輝く羽衣は決定打だ」

鳳仙は既に（状況を知らない限り、ただ巻き込まれただけの）少女を壁の向こう側にいるような気持ちで見据えていた。

月詠はただの被害者だ。彼女は何も悪く無い。同情すらも覚えるし、無関係と泣き叫ぶ権利すら存在する。

「私は何も関係無い！　貴方達の世界の事情に巻き込まないで！私を元の世界に返してよ！」そう叫んだっていい立場にあるのだ。鳳仙はそれを想像したから親身ではなく他人事と突き放した。不用意な刺激が致命的な破綻を齎すことも察していたからである。

しかし月詠は鳳仙の想像を、やはり平淡な声で裏切る。

「そうですか」

「……それだけか？」

「はい。崇められるのも、奉られるのも、それが私の日常ですから」

そうだった。一瞬、深い理解を持てなかったのではと疑ったが、月詠は神殿でまるで牢獄の時を生まれた時から過ごして来た巫女である。

崇拝しか求められなかった哀れな少女。

ソレだけが唯一の存在意義だった少女はソレ以外の生き方を知ら

ない。誰でもいい。世界の因果関係など知らない。そう、誰にでも何にでもいいから求められないと少女は生きていけないのだ。

何と哀れで滑稽なことか。

感情を見せない平淡な声も納得出来る。愛でる、飾るだけが存在意義の人形と何ら変わらない。目の前にいるのは天の御遣いという名の人形ではないかと錯覚しそうになった。

（だが――）

書物でしか見たことの無いといった景色を見たその瞬間だけは欲しい玩具を見付けた子供のような瞳をしていた。あの瞬間だけは純粋無垢な人間だった。

それだけが気掛かりである。目を閉じればその姿が瞼に焼き付いたように思い出す。

「……」

鳳仙はサッサと立ち上がり、強引に月詠の手を引いて歩き出す。

「あの……？」

「神那」

月詠を無視して言葉を発すると身体を休めていた騎馬が立ち上がる。

神那。鳳仙の騎馬の名前である。

「――他人に預けるな」

「え？」

「自分を見ず知らずの他人に預けるなと言ったんだ」

引き攣るように引いた手を離して向き合う。

鳳仙の自分でも首を傾げたくなるくらいに苛々していた。

「巫女だからどうした？　天の御遣いだからどうした？

救う救わないを決めるのは他人ではなくて自分であるべきだ。お前は何だ。人間だろう。

存在意義を他人に委ねるな。考えることを放棄するな。望めば与えるだけの物になるな。都合の良い道具になるな。

まずはこの世界を見ろ。醜い部分も美しい部分も自分の目をしっかり見開いて自分の頭を働かせてこの認識しろ。

その上で判断するんだ。天の御遣いとして乱世を正すべく戦うもよし。俺のようにほぼ世捨て人となって世界から関心を無くすのもよし。民のように苦痛を味わいながら必死に生きるのもよし。いっそ私腹を肥やしたっていいんだ。それが自分自身の意思ならば俺は否定しない。

善悪どちらでもどっちつかずでもいい」

いっそ射抜くような眼差しで月詠を見据えて言い、月詠を抱き上げて神那に乗せる。自分は月詠の前に座り、手綱を握る。

書物からの知識の一つか月詠は言われる前に、振り落とされないために細い腕で鳳仙に抱き着いた。華奢な腕がしっかり絡んでいる

のを確認して足で軽く神那を蹴る。

今度はしっかり草木が纏わり付かないルートを慎重に操る。

そして呟いた。絞り込むような、懇願するような、消え入りそうな声で。

「頼むから――人間であることを諦めないでくれ」

理性を無視して飛び出た言葉に、ようやく気付いた。

なぜこんなにも苛々していたのか。釈然としない気持ちが込み上げて仕方なかったのか。

（似ているんだ。こいつと昔の俺は）

ただ違うのは――月詠は天の御遣いという神聖のもの。鳳仙は悪魔という妖のもの。

鳳仙は自嘲を浮かべるとそれ以上は何も言わなかった。

月詠は不思議なものを見る瞳で、父の広い背中を眺めるような表情で、鳳仙を眺めていた。

そしてその背中に顔を埋めるて、ギュッと更に強く抱き着いた。

第四話　再会

夕刻に泉を出立した鳳仙と月詠の二人が依頼を受けた街に辿り着いた頃、既に日は落ちていた。

時を経ると徐々に色合いを変える空、今は夜空へと姿を変えた天を月詠は興味津々と見上げている。その透き通った華奢な肌は現在外套を羽織って姿を潜めている。

煌々と輝く数多の星が懸け橋を繋げている光景は珍しい。初めての夜空は存分な思い出となって生涯彼女の記憶に根強く残ることだろう。

「月詠。衛兵に目をつけられると厄介だ。視界が狭まるだろうが外套を被ってくれ」

「はい」

月詠は大人しく従って背中に垂れ下がっていた帽子で頭部を隠した。鳳仙のように鞍に跨がってはおらず、足を揃えて片側へ降ろしている体勢になっている。鳳仙が鞍上から地に降りて馬を引くと、これで従者一人を伴って旅を続ける名家の令嬢に様変わりだ。

「ここには人が一杯いるのですか？　鳳仙様」

「……様？」

思わず身を捩りたくなるような寒気に襲われる。苦虫を噛んだように顰っ面になる。

「やめてくれないか、その様付けは」

「すみません。私はこれで定着してしまっているので……」

なら仕方ないか、と肩を竦めた鳳仙は手綱を引いて入口へと近付く。

幸いこの街は城市ほどの規模は有していない宿場街に過ぎないので街の入口に見張りが二人いる程度。

月詠の類い稀なる容貌が原因となって一悶着起きる可能性を読んだ鳳仙は帽子まで被らせた。外套が無ければドレスと羽衣で一悶着どころか大騒動である。その読みは正しく、特に警戒されずに街へ入ることができた。

「……ふわぁ」

街に入った月詠の第一声がそれだった。

「初めて……なんだろうな」

「はい。神殿では世話役の神官一人だけでしたから」

「よく孤独死しなかったな」

「書物で知って私も不安になっていました」

地に降りて神那を引いていた鳳仙は、生命の息吹が吹き込んだよ

うにキョロキョロと街中を見渡し、行き交う人々を眺める月詠を見上げて小さく笑った。

「ここにいる方々は皆、この街に住んでいるのでしょうか？　それとも書物で読んだ行事というものでも開かれるのですか？」

「そういうわけじゃないさ。俺達のような旅人だって中にはいるし、傭兵だって存在する」

「鳳仙様は傭兵ですよね？　どういうものなのですか？」

視線が絡み合うと鳳仙は手綱を指で遊びつつ腕を組んだ。両手を別の両肘に当てた少し変わった組み方だ。

「基本こういった中規模の街や大規模の城市には仲介屋という建物がある。傭兵はそこを通して日々町民から募る依頼を受注するんだ。賊の討伐や期間限定の街の護衛、中には皿洗いや薪割り、雑草刈りなんて小さい仕事もある」

「モンスターの討伐とかじゃないんですね」

「もんすたー？」

聞いたことない語彙に鳳仙は首を傾げる。

「魔物や妖のことです」

「与太話だろう、そんなの。そんなことよりこの程度で驚いていたら城市に着いたら突然死するんじゃないのか？　この数十倍は人も建物もあるぞ」

軽く一蹴して鳳仙は脱線した話を戻す。

「……想像できません」

その表情には疲労が現れていた。次々と経験する初めての世界に込み上げた感情が綺麗に回転せず思考に不具合が生じているのかもしれない。

「もう少し我慢してくれ。依頼達成の報告を済ませば後は宿屋へ行くだけだ。そこで夕食を取ってゆっくりと休めばいい」

「……はい」

少し気怠げな返事。

深く被った帽子の下から覗く顔色はよろしくない月詠を一瞥して、歩幅を広くして早歩きをして仲介屋へ向かった。

鳳仙は馬止めの柵に手綱を掛け、もう一度月詠の顔色を伺ってから仲介屋の入り口の隣に配置された机上の筆を取った。硯に墨汁を垂らし、筆を黒く染めると重しの石を退けて紙を一枚取り出す。『盗賊討伐完了　鳳奏明』と殴り書きして最後に印鑑を押すと入り口に立て掛けられた小箱に投函すると再び手綱を握って歩き出す。

「報告はよろしかったのですか？」

「あの箱は本来、依頼人が投函するものなんだが、中に入って報告するのも億劫な傭兵がたまにあれで達成を報告するんだ」

「でもそれでは報酬が」

「明日行けば貰えるさ。依頼が重複することは規則違反だから、そこは仲介屋がしっかり管理してくれている。」

偽造の報告や依頼の横取りは規則違反であり仲介屋は事細かに取り調べをしている。軽い違反なら報酬の減額程度で済むが、敵前逃亡くらいになると傭兵という職業を剥奪される上に内容次第によっては投獄や死刑にすらなる。

厳しい制限が敷かれている通り、傭兵になるためには都尉以上の立場ある者に認められるだけの実力が必要になるゆえに傭兵の数は案外少ない。

鳳仙は今夜寝泊まりする予約を入れていた宿の馬止めの柵近くにいた従童に手綱を渡すと、手を差し延べて月詠を抱くように降ろす。

「歩けるか？」

「……はい。申し訳ございません」

足元の覚束ない月詠はそれでも一人で歩こうとしていたので、鳳仙は溜め息をついて抱き上げた。

「謝らんでいいから辛いと思った時は頼ってくれ。無理して倒れられた方が迷惑だ」

「……はい。ありがとうございます、鳳仙様」

下手な遠慮をされなかったことに安堵しつつ、揺らさないように

宿屋の門戸をゆっくりと開いた。

赤い支柱を支えに、壁は漆喰で塗り固められた屋は年季が入っており、古くからこの街に住んで来た中年層から支持を経ている。鳳仙がなぜこの宿屋を選んだかと言うと、宿泊費がただ単に一番低価格だったからで貧乏傭兵には丁度良かった。

門戸を抜けると鳳仙は目を限りなく細めて俯いた。こうでもしなければ朱目が目立ってしまい思うように動けなくなる。視界がかなり狭まったが最早慣れた一環である。

「いらっしゃっい」

気前のいい声で出迎えたのは昼に一度会った店番の主人だった。年を経ようとも屈託の無い笑顔で客を出迎える懐の良さが古くから愛される由縁だろう。

「昼間の傭兵さんか。どうだい依頼の方は？　確か最近田畑を荒らしていく盗賊の討伐だったよな。一人で大丈夫なのかい？」

「なぜ亭主が知っているんだ？」

「結構噂になってるぜ。最近浮上した盗賊の討伐依頼を受けた一人の傭兵のことは酒のツマミになっていたからな」

鳳仙は眉根を寄せた。仲介屋が情報漏洩を自らするほど破廉恥な職業でないことは明らかだが――もしかすると仲介屋の息子が聞き耳を立てていたのかもしれない。

「ど、どうしたんだ？」

心当たりのない剣呑な眼差しに亭主はうろたえた。ただでさえ目付きは優しいと言えない形をしているのに朱目を隠す為細めているので眼力は一層強くなる。

「いや、すまない。つい仲介屋の怠慢に苛立って睨み付けてしまった」

「そ、そうかい。ところで本当に一人で盗賊を倒しに行くのか？いくら傭兵でも無謀だろ。お前さんはまだ若いんだから」

なるほど、と鳳仙は改めて亭主の人の良さと人気の秘訣に感嘆した。今一歩儲かっているように見えないのは金を払えない者にすら無料で食事を提供しているのだと確信した。

（この亭主なら月詠に好印象を齎せてくれるかもしれんな）

そして、おそらくこの朱目すらも受け入れてくれるだろう。

だが鳳仙が顔を上げることはなかった。

「盗賊なら既に倒した。明日仲介屋が後始末をすれば報酬を貰って正式に任務完了だ」

「なんと！」

亭主はギョッと目を見開いた。つい数時間前まで話題になった話があっさり決着したのだから当然とも言えよう。

「ちなみに隠れ家で拾って来た」

視線を落としていつの間にか夢の世界に旅立って甘い寝息を吐く月詠を見せる。もちろん帽子は被ったままだがそこから覗く白く柔らかな肌は男の時を止めるには充分過ぎた。

「さっきから気にはなっていたんだが……えらく別嬪さんだなぁ。若い頃の妻を思い出すぜ」

勝手に妄想の世界に入る白髪を交えた中年の亭主は黒い頬をしまりなく緩ませて赤くしている。

そんな亭主を白い目で眺めていると亭主は唐突に鳳仙の両肩をしっかりと掴み、安堵の息を漏らした。

「まあともかくお前さんが生きていてよかったよ。このご時世だろ。お前さんくらいの年頃の男はよく勇気と無謀を履き違えて戦いに行っちまうんだ。俺の息子が履いちまったのは無謀だったらしくてなぁ……」

「死んだのか？」

オブラートに包むことなく薄情者は平淡に言った。

「ああ。傭兵になるだけの実力は無かったから義勇兵に参加して帰って来なかったよ」

よくあることだ。いっそ日常茶飯事過ぎて同情も哀れみすらも感じなかった。

鳳仙は今度こそ黙った。この亭主は今の世の節理をしっかりと理

解して捉えていることを達観した眼差しが雄弁と語っている。

弱肉強食。強い者が生きて、弱い者が死ぬ。単純で善悪を他所に置いた感情論も精神論も法律も役に立たない『力の理論』だけが成り立つ世界。

お互い力を振りかざして弱かった亭主の息子は死に、強かった盗賊は生き残った。”それだけのこと”。

今回もお互い力の理論を振りかざし、鳳仙が生き残った。ただそれだけのこと。そこに正しさなんて何処にも無い。

「だからかなぁ。息子と同い年くらいの奴が戦っているとどうも他人事のように思えないんだよ。息子の陰を見ちまう。それが今日会っただけの奴でもな」

「……そうか」

感情が波打つことはなかった。だが場の空気に合わせて声を沈めて頷きはした。

「息子はお前さんに負けないくらい男前だったぜ」

「……そうか」

重くなった空気を振り払う強がりな発言に、今度は呆れたような声で、笑みを零した。

◇◆◇◆◇◆◇

「酒でも飲むかい？」

「それと肉だ。手軽なものでいいから肉料理を作ってくれ」

食堂へ場を移した鳳仙はカウンターに腰掛けた鳳仙はメニューを開くことなく要求した。ついでに一番安いもの、と付け足しておく。傭兵と言っても所詮は貧乏である。

「お嬢さんは起こさなくていいのかい？」

「色々あって精神的にも肉体的にも疲労が限界に達しているんだ。暫くは起きないさ」

月詠は既に一夜を過ごす部屋の寝所にいる。空腹を訴えた鳳仙が一旦、宛行われた部屋に運んでおいたのだ。

「……そうかい、可哀相に」

亭主は声を落として忌ま忌ましげに表情を歪めたがそれも一瞬、咄嗟に鳳仙に背を向けて引き戸から酒を取り出してカウンターに置いた。客に負の感情を吐き出さない気遣いための配慮である。

夜ももう遅い為、食堂には鳳仙と亭主の二人しかいない。本来こんな時間まで営業はしていなかったのだが息子の陰を見たと発言した通り、気を利かしてくれたのだ。黄昏時に訪れていれば静寂の卓は農業で鍛えた太い筋肉を袖口から見せる武張った男どもが酒宴で賑わいを見せたに違いない。

カウンター越し。まな板で鶏肉を下ろす優れた手捌きを呆然と眺めつつ鳳仙は酒杯で唇を濡らしていると、

「だったら尚更側にいてやるべきじゃないか？　傷心した若い娘が欲するのは暖かい人の優しさだ。例え眠っていたとしてもその瞬間でさえも手を握って上げていれば多少は和らぐもんさ。一人にしておくのは男として失格だぜ」

軽やかに裁いていた手が止まり、亭主は非難染みた視線を向けて来る。その瞳は武芸者に勝るとも劣らない迫力を秘めていた。

しかし鳳仙はあっけらかんと空になった酒杯を新たに満たしながら「何を勘違いしている」と言って再び酒杯を一口飲んだ。

「勘違い？」

「あれは別に凌辱されたわけではないぞ。下衆が卑猥に触れる前に救出したからな」

「へ？　そうなのか？」

あんぐりと呆ける様は随分間抜けなものだった。

「あの女は箱入りも箱入りらしく、滅多に見る機会の無かった外の世界にお転婆の如くはしゃぎ回ってたんだ。疲れたと言うのはその為だ」

「そうだったのか。すまねぇ、危うく良からぬ誤解を招くところだった」

「本当にな」

詫びのつもりか亭主は酒をもう一本無料で追加してくれた。酒も確かに好きな部類だが一番は肉だ、とは言わなかった。流石に失礼である。

「お前さんこれからどうするつもりだい？」

「どうするとは？」

「盗賊をたった一人で討伐する実力者さんだから俺等としては長らく滞在してもらいたいんだがな。あ～、だが娘さんのこともあったな」

盗賊とは名ばかりの連中――正直農民が十と数人居れば難無く打ち倒せる雑兵に過ぎないのだが、鳳仙の実力がそこら辺の衛兵を軽く蹴散らす武将クラスにあることも確かである。ゆえに亭主が言っていることは中心とは言えないが確かに的は射ている。

亭主は月詠を何処かの名家の御令嬢と勘違いしているから鳳仙が故郷まで護衛を務めるんじゃないかと思っていた。

鳳仙は酒杯で波打つ酒を眺めつつ逡巡した結果、

「明日朝食を取りながら一緒に考えるつもりだ」

「妥当な判断だな。箱入り娘や御令嬢は基本我が儘だから勝手に方針を決めたりしたら初対面でも堪忍袋の緒を切らしそうだ。『私の意見無しに、しかも指図するなんて良い度胸ですわね！　お父様に

言い付けてやりますわ〜！』とか？」

クネクネ身を捩り裏声で下手な真似をする亭主が妖に見えたのは鳳仙だけではないはずだ。しかも最後の決め顔はイラッと来る。

「アンタが面白いってことは充分伝わったから、サッサと飯を作ってくれ」

「りょーかい」

ヘラヘラ笑って亭主が下ろした肉に火を通していると門戸が開く音が聞こえた。

「おや、こんな時間に客かな」

「盗っ人だったらいかんから俺が見て来よう。だからアンタは肉を焼いててくれ」

もちろん大事なのは後者である。側に立て掛けていた槍を掴み、鳳仙は徐に立ち上がる。

「任せていいかい？　客だったら爽やかな笑み――」

「無理だ」

「うん、そうだな。そうだろうと思ってたよ。お前さん無愛想だもんな。でも最後まで言わせて欲しかったな。俺みたいなおしゃべりにとって言葉を遮られるってのは苦痛以外の何物でもなくて――」

「黙れ」

「ごめんなさいでした。お客さんだった場合、もう無愛想でも何でもいいのでここに案内してください」

「分かった」

半泣きの亭主を無視して鳳仙は小さな灯火を頼りに歩く。夜更けでも最低限の明かりは常に着いているのでコソコソする必要はなかった。

廊下を進むと先が玄関だけあって明かりは増していく。

本当に盗っ人だった場合、宿を血に染めるのは気が引けるから鳳仙は槍を反転させて石突きを先端に持つ。

そうして玄関にて出迎えをすると門戸を抜けた先に三人の少女が突っ立っていた。

「ん？」

「あれ？」

「あ！」

「んなっ！」

各々が別の表情と声を上げた。

鳳仙は眉根を寄せて三人の少女を見詰めた。

大きく開いた二重の瞳のおっとりした少女、八重歯を覗かせる少年のように無邪気な少女――そして黒髪サイドテールの猪女（鳳仙の印象）。

間違いなく昼間盗賊の隠れ家にて邂逅を果たした者達である。たった今この街に到着したのか表情には疲労が現れている。

盗っ人ではない。ただの、と判断していいかは分からないが客であることに変わりなさそうだと鳳仙は頭を掻きつつ面倒臭そうに口を開いた。

「ここで暴れることだけはするなよ。亭主と客に迷惑だ」

その視線は主に黒髪サイドテールの女性、関羽に注がれていた。とりあえず機先を制した鳳仙は槍を置いて交戦の意志が無いことを示す。

隠れ家では烈火の如く怒り狂っていた関羽だったが、様子がおかしい。交戦の意志が無いことを示しても飛び掛かって来るんじゃないかと背に冷や汗をかいていたのだが、関羽は何処か煮えたぎらない表情で視線を右往左往させて立ちすくんでいた。

逆に困惑だ。

「愛紗ちゃん」

親が子を諭すようなおっとり気味の少女の落ち着いた声に関羽は呻き声を上げて頭を下げた。

「昼は賊と勘違い刃を向けてしまい済まなかった。」

「……」

唖然である。

偶然、摩訶不思議なる現象に立ち会ってしまった感覚に酔い、眼前にある光景がハッキリと認識出来ずにいた。空いた口が塞がらず、居心地の悪い時間が流れる。

鳳仙はこの雰囲気を打開する言葉を探しているのではなく、猪女と認識していた関羽の潔さに思考が停止していた。

そんな鳳仙の心情を取り違えたのか関羽は表情を悲しげに顰める。

「やはり許してはくれぬか……」

と、言われてようやくハッとした鳳仙は軽く頭を横に振った。

「いや、そういうわけじゃないし元々気にもしてないから負い目を感じる必要はないさ。少し意外だったのでな」

「意外？」

顔を上げた関羽は上目遣いに頭一個分高い鳳仙を見上げた。

「ちゃんと謝れるやつだったんだな、とな」

「な――――！」

言葉を無くした関羽はパクパクと口を動かし、顔を真っ赤にさせて鳳仙を睨んだ。

「怒らないでくれ。あの聞く耳を持たない暴れっぷりを終始披露していたのはアンタだろ」

そう言われると弱い関羽は再度顔を俯かせて悔しげに呻いた。桃色だった頬は椿のごとく耳まで色を濃くしている。

鳳仙は槍を拾って自分の役割を思い出す。

「そう言えば、アンタ達は客なのか？」

関羽は対応出来る状態ではないので鳳仙が視線を向けたのは関羽を窘めたおっとり気味のほんわかした雰囲気の少女だ。

「うん。こんな時間に訪れちゃったけど大丈夫かな？」

「さぁ？　とりあえず亭主の元まで案内するから付いて来てくれ」

鳳仙は美少女一行を引き連れて食堂へ歩き出した。

第五話　貧乏の理由？

軽い自己紹介を交わして食堂に戻ると、カウンターには肉料理が置かれていた。

鼻に届いた濃厚な香と出来立てを主張するホカホカの湯気は空腹ですらない人間すらもゴクリと喉を鳴らし、食欲を誘惑する魔性の力を秘めていた。

「おう、どうだった？」

亭主の問いに言葉は使わず、首をクイッと動かして背後の少女達を認識させる。

詳しい話は聞いてないし、聞いていたとしても眼前の餌を前に我慢出来ることは不可能である。手招きされているような感覚に逆らわず鳳仙が席に着こうとすると、

「ご飯なのだ！」

「俺のな」

横からすり抜けて飛び掛かろうとした小柄で元気印な少女――張飛の突撃をマフラーを掴んで阻止をした。

「ぐえっ」

勢いが勢いだった為、唐突に首が絞まった張飛は女の子らしからぬ、蛙が潰れたような声を上げて噎せる。それをまるで気にも止めず、寧ろ今のうちにと席に着いて箸を握った鳳仙は思ったよりも小物である。

「食いきゃ自分で注文しろ」

「うぅ……お兄ちゃん酷いのだ」

「明日さえ見えない貧乏人の飯を勝手に食おうとした罰だ。俺は朝から何も食ってないんだからな」

そう言うなり空腹の限界だった鳳仙は少女達から興味を無くして己の食欲を満たし始めた。

「お嬢ちゃん達も何か食べるかい？」

「た、食べるのだ！　鈴々達も最近、禄な食事にありつけないからお腹ペコペコなのだ！」

張飛という人物は食欲に忠実なのだろう。未だ噎せながらも大声で返事をした。

細い腹を撫でつつ鳳仙の隣に座った張飛は隣から匂う香に涎を垂らしている。

その高いテンションに苦笑しつつ亭主が何が食べたいか聞こうとするが、それを関羽が遮ぎった。

「駄目だぞ鈴々。私達は今日寝泊まりする分のお金しか持ってない

んだ。空腹なのは私も桃香様も同じだが、食欲を満たそうとすれば野宿をするしかなくなってしまう」

「えーっ！」

鳳仙に負けないほど空腹も限界に達していた鈴々は不満げな声を上げて反抗した。隣で我関せずに肉をガツガツ食う輩がいるせいか今にも泣き出しそうに瞳が潤んでいる。

その瞳に罪悪感を覚えた関羽は一瞬「うっ」と後退り掛けたが、自制心の強い彼女は息を吐いて鈴々の頭に手を置いた。

「分かってくれ鈴々。もう冬は越えたといっても幽州の風は随分と冷たいんだ。風邪を引いてしまえば薬代は払えず行動範囲は限られる。そうなってしまえば助けられたであろう民を助けられなくなる可能性だって低くはないんだ」

空腹と風邪。どちらも今の時代にとって辛いものだ。飢餓や風邪に倒れ、呆気なく生涯を終える者は最早珍しいものではない。路地を覗けば肋骨を浮き彫りにして倒れ込む者でさえも見慣れた一つの光景の内なのだ。

とても選べたものじゃない。

だが、風邪を引いた場合のリスクが高いと判断した関羽は苦渋の上に選んだ。

「食事は明日、狩りをして確保しよう。せめて今日だけは我慢してくれ」

「うぅ……」

それでも納得のいかない呻きを上げる張飛。最近金欠のあまりまともな食事にありつけていないのがストレスを溜めているのだろう。溜め込んだものがいつ爆発してもおかしくない、そんな状態だった。

関羽と劉備も似通った状態にある。

三人とも顔色は決して良いといえず、肌の潤いも乾ききって荒れていた。せっかく整った容姿も自慢出来るものでは無くなっている。精神的にも肉体的にも衰弱しており些細な原因で倒れ伏してしまいそうだ。

「おいで、鈴々ちゃん」

関羽の隣にいた劉備が腕を広げる。その腕は酷く細く見えた。

張飛は席を立って劉備の豊満な胸に顔を埋める。数拍、間が空けば嗚咽が静寂の食堂を反響させた。

関羽は悔しげに拳を握り締め、劉備は張飛を抱きしめて、子をあやすように頭を撫でている。

（酷い時代だな。俺には関係の無い話だが）

無情にも皿に乗った肉を一欠けら残さず食べ終えた鳳仙は横目でその様子を、やはり他人事の眼差しで眺めると深い溜め息を着いて席を立った。

「亭主、ご馳走になった」

重い空気を切り裂いた鳳仙は帯に括り付けていた巾着を亭主に放り投げた。

「え？　おっと」

空気に呑まれていた亭主は投げられた巾着を一旦掴み損ねたが、地面に落ちる直前で両手で掴んだ。

「危ねー危ねー」

冷や汗を拭って亭主は巾着を開くと「ん？」と眉根を寄せた。

「釣はいらん」

鳳仙は吐き捨てるなりサッサ身を翻して食堂から姿を消した。最後に劉備達を一瞥して。

「お前さん……」

亭主は呆けた声を上げたが、瞬時に意図を理解したように口角を吊り上げた。

「お嬢ちゃん達、ちょっと待ってな。今から美味しいもんを作ってやるからよ」

『え――？』

三人共が顔を上げて、いきなりの発言を理解出来ず、そのまま硬直した。

その間にも亭主は材料を取り出して上機嫌に鼻歌を口ずさみながら調理を勝手に開始している。

「あの、どうして……」

「さっきも言った通り、私達は宿泊費と食事代を払えるようなお金など」

劉備が戸惑いの眼差しを向けて怖ず怖ずとか細い声を出し、それを拾ってハッとなった関羽が慌てた。

しかし亭主は見越していたらしく、ニカッと屈託の無い笑顔を浮かべた。

「お金なら貰っているさ」

そう言って見せたのは鳳仙の放り投げた巾着。

「そ、それは鳳仙殿のものではありませんか」

「さっき平らげた肉料理の分を差し引いてもまだまだ残っているんだよ。もし、こんなことを繰り返していたんなら、そりゃあ貧乏傭兵ってのも頷けるぜ」

傭兵は資格を取る試験が必要なだけあって人数は少なく希少価値は思いの外高い。便利屋と扱われることもあるが、それがかえって依頼の幅を広げており、気軽な依頼をちょくちょくこなしていれば充分安定した一つの職なのだ。

雑用係から討伐依頼はもちろん、将来を見据えた親が子に剣術、槍術指南を申し出ることもある。亭主は月詠を名家の御令嬢と認識しているが、本物の名家の御令嬢から依頼が来れば（親馬鹿な両親や金の価値観が分からない令嬢が出す）その報酬金は破格なのだ。城塞都市のみを行動範囲にすれば競争率は高いものの傭兵が兵士より富裕層になるのは容易なのだ。

だから亭主は鳳仙が貧乏を自称する意味を読み取れていなかった。そんな時に先の行動を起こせば亭主の結論に行き着くことは当然ともいえよう。

「しかし」

とんでもない失態を演じてしまい、更にこんな気遣いをされてはそれこそ立つ瀬の無い関羽は反論しようとして――やめた。

面目を気にして善意を断ってそれで死にましたでは情けないにもほどがある。誇りが引っ掛からないといえば嘘になるが、自分達の立たされた状況はそれほど酷いものであり、自分の誇りを振りかざして仲間に迷惑を掛けるのは低俗な行為だ。

それに目指しているものもある。

こんなところで無駄死にするなどありえなかった。

「御相伴に預からせてもらう」

「おう、感謝ならあいつにしとけよ」

亭主は自慢げに笑ってそれきり作業に集中した。

「良かったね、鈴々ちゃん！　ご飯食べれるんだって！」

劉備は抱きしめていた張飛の手を取ってきゃっきゃとはしゃぎ、喜色満面の笑顔を浮かべている。

炒めものの音と芳しい香りにますます表情に明るみが差した。

未だ呆けていたのか会話内容を理解してなかったのか張飛は劉備の発言を受けて首が捩切れん勢いで関羽を見上げた。

「本当なのか愛紗！？　本当にご飯がお腹一杯食べられるのか！？」

「いや、鈴々の胃袋を鑑みるとさすがに腹一杯は難しいだろう。だが食事が出るのは確かだぞ」

喜色満面どころか、寧ろ危機迫る表情で声を張り上げる獰猛な張飛に若干引いた声で関羽は答えた。

するとどうだろう。張飛は顔を俯かせて身体をプルプル震わせて拳を強く握っている。

知り合ったばかりの男からの施しに対する怒り？　いや、張飛にそんな感情回路は存在しない。敵からの恵みすらも疑いを知らず嬉々として飛び付きそうだ。そもそも張飛は鳳仙を敵視していない。

ならばこの震えは何か？

関羽の背中に冷たいものが走った。

答えなど一つしかあるまい。

妹分の悩内など手に取るように分かるのだ。

食。

　食食食食食食食食食食
食食食食食食食食食食食
食食食食食眠食食食食食
食食食遊遊遊遊遊食食食
食食食遊武武武遊食食食
食食眠遊武武武遊眠食食
食食食遊武武武遊食食食
食食食遊遊遊遊遊食食食
食食食食食眠食食食食食
食食食食食食食食食食食
食食食食食食食食食食食

弱肉強食。

否。

焼肉定食である。

そんな張飛が食事と聞いて震え出す感情と言えば喜び以外に何があろうか。

これから何をしようとするかも手に取るように分かる。

「り、鈴々！　落ち着――」

時、既に遅し。

「やったぁあああなのだぁあああぁあああーーーーっ！！」

凄まじい叫び声は肉声とは信じられず、いっそ暴風と評価した方が納得できるほどの声量だった。壁が、卓が、椅子がビリビリと振動している。もしガラスが近くにあった声の衝撃波で粉砕しても何ら不思議じゃない。そう思わせるだけの叫び声だった。

『～～～～っ！』

食堂にいた関羽、劉備、亭主の被害は尋常ではない。全身どころか骨にまで響く振動を感じさせたほどの大音量である。もはやただの衝撃波である。三半規管は一瞬で麻痺して強烈な波動が脳を揺さぶった。

それほどの大音量だ。宿泊中の客どころか外からも苦情が殺到し、張飛が復活した関羽から激しい説教を受けたのは言うまでもない。

第六話　起床

鳳仙と月詠にあてがわれた部屋は二階の宿の最南端。向かって右側に太股ほどの高さがある木の段があり、その上には布が敷かれ寝所も兼ねている。左側には卓と床机が二つ。

鳳仙は槍と折れた剣を並べて壁に立て掛けるとその隣に腰を下ろした。右膝を立て、右肘を乗せて左腕はだらんと床に接している。特に意味も無く天井を見上げながら寝所から聞こえる月詠の寝息に耳を傾けていた。

（そういえば、他人と同室で寝るのは初めてだったな）

たった一度だけ鳳仙は過去に賊の討伐部隊からの依頼を受けたことがあった。まだ傭兵になりたてであり信頼関係に亀裂を入れるわけにいかなかった鳳仙は仕方なしと受注したのだが、まさに最悪だった。この朱い瞳ゆえに畏怖の対象となり、敬遠されて、そんな状況の野営地で落ち着いて睡眠を取るなんて出来るわけもなく、一人木に凭れ掛かって夜を明かしていた。そんなことがあってか鳳仙は以降、数日単位の団体戦の依頼は避けるようにしていた。

余談だが、その依頼主が洛陽北部尉の県令に着任していた頃の曹操であり、以降唯一の交流が続いている友と呼んでもおかしくない存在である。

（そういえば月詠は俺の瞳を見ても何も言わなかったな）

だからだろうか。

しかも身を預けるほど信頼を得ているから、妙に落ち着いた気分でいられるのか。心を虜にする妖艶な手招きをする淫らな吐息とは違う、新鮮な空気を踊る風の精霊のような清廉潔白の涼やかな呼吸が穢れた身体を浄めてくれる感覚が心地好いのだ。

まるで子守唄。

志半ばに無念と倒れし者への安らかな眠りを誘う声も歌詞すらもない子守唄。『良く頑張ったね』と慈愛に満ちた表情で傷付きし者に光を届ける聖母の奏でる子守唄。

（天の御遣いだからか。それとも元々月詠の持っていた力か……）

自然と表情が柔らかくなる。

本当はただの寝息の他ならないのだが、鳳仙は他人の寝息を聞いたことがない。純粋な温もりも信頼も授かったことは一度足りともない。下品な寝言の無い安らかな寝息が耳朶に触れたのは今日が初めてだった。だからこれが月詠の力だと思い込んだ。

それで良かった。違うと否定されてもどうでもよかった。

今はこの澄み切った感情をありのままに堪能したい。この流れに身を委ねて心に住み着いた魔を静めたかった。

篭手の紐を緩めて外し、静かに目を閉じる。

傭兵として、武人として気配を察知できないほど深い眠りに入る

のはあるまじき行為だが、その愚行さえも溶かしてしまうまどろみに鳳仙は敢えて身を委ねた。

全身に浸透する睡魔の思うまま意識は落ちていく。

鳳仙が爆睡というほど深い眠りに着いたのは今日が初めてであった。

◇◆◇◆◇◆◇

眩しい何かが瞼を突き抜けて眼球を焼こうとする刺激によって月詠は目を覚ました。

重たい瞼を白鷺のような指で擦りつつ眩しい何かを馴染ませるとソレを確認した。

「……朝日」

まだ眩しさは抜け切らない内に目を見開いて、呆然と呟いた。

五台山の頂きから舞い降りた仄かに冷たい風が水色の髪を優しく撫でて吹き抜けて月詠の身体を包み込む。窓から差し込む光は丑三つ時に血と怨念を吸った大地から跳梁する魔を浄化する神聖な輝き。

書物の描写でしか知る由の無かった月詠はほんのりと頬を赤くして登り始めた朝日を眺める。

窓から大地を見下ろせば既に疎らに人がいる。

農民の朝は早い。

鶏の鳴き声に促されるように、街の住民がそれぞれの朝の始まりを告げる。

薪を割って火の用意をする者、畑を耕しに農具を担いでいる者、食物の売買をする者、盗賊の襲撃に備えて鍛練をする者――そんな様子を新鮮味に満ちた眼差しですっかり魅入った月詠はカシャンと金属を打ったような音が背後から響いて身体を跳ねらせた。

「……鳳仙様？」

振り向くと壁に身を寄せて鳳仙が眠っており、隣には折れた剣が倒れている。

数秒時を置いて月詠はハッとなる。

（私……殿方と同じお部屋で寝てしまいました……！）

羞恥に頬を染めて月詠は両手で頬を抑えて悶える。巫女といえど、神殿の中で生活したといえど、月詠だって少女に位置する年齢にある。神官にも気を利かせてくれる者はいたらしく恋愛の書物も神殿の本棚に納められていた。叶わないと理解していても恋情に対する憧れは神殿にいた頃からどうしても拭い取れない。

だが今は神殿の外。しかも別世界にいる。

叶わないと諦めていた色恋沙汰に、書物のみでしか関われなかった異世界のような存在に、今は手を伸ばせる。

「……」

沈黙の後、小さく深呼吸をして未だ眠り続ける鳳仙の傍に怖ず怖ずと寄った。

両手両膝を床に着いて月詠は林檎一つ分上にある鳳仙の顔を観察する。

少し固めの猫っ毛である黒髪。今は閉じられているルビーとも血とも見受けられる朱目は畏怖の象徴である魔を彷彿させる。全体的に掘りの深い二枚目の顔はいつも渋面で取っ付き難い雰囲気を醸し出しているが、今はそんな雰囲気は感じない。ゆったりと着装した焦げ茶色の着物から覗く鍛えられた胸元は危険な香りを放っている。篭手を外したことによって覗く手の平は何度も豆が潰れて皮はすっかり硬くなりごつごつとしていた。女性を抱くような指ではない。年不相応の、農業にひたすら打ち込んだ壮年期のような手だ（鳳仙の場合握ったのはクワじゃなく剣なのだが）。

名家の御令嬢なら侮蔑され嫌悪感一杯の罵声を浴びせられても仕方ないほどだが月詠は案外この手が気に入っていた。

何てことはない。この手が月詠に最も永く触れた人肌だからだ。

元の世界ではまさしく神として君臨”させられて”いた月詠は神聖視されるあまり神官より人との接触を禁じられていた。何らかの事情があって接触したとしても、それが如何なるものとしても神官の手によって処刑される。神の裁きと酔いしれて。だから月詠は人

肌に触れることは出来なかった。

ゆえにまだ出会って一日も経過してないというのに鳳仙が一番月詠に触れていたのだ。

「……ぁぅ」

今更になって照れ臭くなった月詠は顔を赤くして俯いた。

(私ったらなんて破廉恥なことを)

一歩引いて小さく呻く。

見るもの、聞くもの、感じるもの、全てが新鮮で夢にまで見た光景が感情の起伏の促進剤となっていた。巫女として生きて来た彼女の無表情の仮面は自ずと知らず徐々に剥がれていたのだ。

しかしすぐに首を小さく振って表情は平淡となった。

「鳳仙様、起きてください。鳳仙様」

やはりまだ巫女である自分を抜け出すことは出来ず平淡な声で起床を催促し、鳳仙の肩を揺さ振る。鍛えられた逞しい肩だった。

「ん……。朝か」

深い眠りにいても外敵からの襲撃の対応が身体に染み付いていたのか、即座に朱目が開く。

朝の眩しい日差しに顔を顰めつつ大きな欠伸をかいた。

「……鳳仙様、欠伸する時は手で口を隠しましょう。下品ですよ」
「気にするな。俺は気にせん」
傭兵だからな、と鳳仙は付け足して軽い柔軟体操を始める。
「……品格は上の方々と出会った際に必要でしょうに。せっかく得られた高額報酬の依頼も一つの粗相で白紙になるかもしれませんよ」
「その時はその時だ。俺は他人に対して一々言葉を取り繕ったり敬語は使わん。結果小さな仕事しか回って来なくなろうともそれでもいいさ」
「……もったいない。貴方の力と優しさは、貴方自身の視野の狭さで殺されています」
「俺の何が分かる」
柔軟体操を終えたと同時に鳳仙は鋭い朱目が突き刺した。
月詠はハッと息を呑む。殺意は無い。だが負の感情に囚われていることは悟った。ルビーのような輝きは色褪せ、ドロドロに濁った血の色だけが瞳に宿っている。
この瞳はまるで――
（……悪魔）
「俺とアンタは似ている。他者に”人”として扱われなかった哀れ

な存在だ。だが寄せられた感情は違う」

淡々と述べつつ篭手を嵌める鳳仙の手つきは荒く、呼気も若干荒い。長らく溜め込んでいた感情が垂れ流れになっていた。

そんな自分に気付いて苛立つ鳳仙は舌打ちして目を閉じる。深呼吸を繰り返して肺に溜まった空気と共に感情を全て吐き出す。震える吐息を数泊置いて整えたあと開いた瞳は濁りを退けていた。

「すまない、ただの八つ当たりだ。見損なってくれ」

「……いえ、私も軽率でした。貴方のことを何も知らないのに、勝手なことを言って」

「気にしないでくれ。事実だったから反発してしまったんだ。アンタは何も悪くない」

悪いのは――鳳仙は自嘲気味に呟いて目元を手で覆った。

これ以上触れるべきではない。鳳仙のことを何も知らない自分が触れるべきではない。そう考えた月詠は下唇をキュッと噛み締めて別の話題を模索する。

しかしだ。

（……私には話せるようなものなど）

神殿の中、神託と書物を読む日常だけを送って来た月詠に人様を惹き付ける話題は何も無かった。

（読んだ書物を語るのはどうでしょう？）

これしか無い。だが刹那の内に泡となって消えた。相手は強大である。剣一筋に生きて来た朴念仁の薄情者の世捨て人の興味を引く書物なんて剣術指南書くらいだ。

お伽話、童話、現代、恋愛、ファンタジー、ＳＦ、哲学。

どれも駄目だ。唯一惹き付けそうなファンタジーも、月詠が現れた時点でファンタジーな出来事だというのにまるで興味を示さなかった。街に来るまでの間も会話を交えたのだが一度足りとも元の世界について触れなかった。

（……そもそもコミュニケーションを交わしたことの無い私が話せるような技術を持っているわけないではありませんか）

おそらく紆余曲折の果てにグダグダになって終わるか聞き流されるかの二択だ。

絶望です、と打ちひしがれる月詠に思わぬ救いが舞い降りる。

月詠はこの世界に来てから睡眠時間があまりにも多く、食事を取る機会にとことん恵まれなかった。盗賊に捕まっていた時間も考慮すると飲まず食わずが最低でも一日は続いている。

月詠だって巫女と呼ばれても人間であることに変わりない。届けられる食事を一日三食きっちりとバランス良く取っていた。

そんな彼女が生理現象に逆らうことは出来ず『くぅ』と小さな、しかし鳳仙の耳に届くには充分な音が鳴った。

「……」

「……」

沈黙。

鳳仙は目を丸くして呆然としている。

（さ……最悪です！）

月詠は薔薇色のように顔を真っ赤にさせて俯いた。

状況を打破するに至ったが月詠はお気に召さなかったようだ。強く握り締めた拳がプルプル震えている。

そんな様子に鳳仙は小さく、しかし満足げな笑みを浮かべた。

「朝食を取りに行くか」

「……はい」

第七話　襲撃

早朝に訪れたからか、はたまた客入りが少ないからか食堂の卓に着く客は疎らである。

朝の涼風を肌に感じつつ鳳仙は片隅の卓に腰を降ろした。その後ろを物静かに着いて回る月詠も対面の席に座る。月詠はその美しさを引き立てるドレス以外衣類は何も持ってないのでこの世界では非常に浮いた存在だ。誰しもが彼女に神を見出だしても不思議ではない、鳳仙はそう考えている。それだけの存在なのだ。

だから月詠には外套を被ってもらいその姿を隠させた。

（天の御遣いを隠蔽……。やっていることはまさに悪魔の所業だな）

薄汚い外套を身に纏う月詠に見てクッと笑った鳳仙は卓上の端に置かれた呼び鈴を鳴らした。

音を聞いた近場の給仕が反応する。手に持っていた料理を注文した客の卓に並べ一礼すると、人当たりの良い笑みを浮かべたまま駆け寄って来る。

派手な紫の装束に身を包んだ給仕は月詠よりも幼く見える。外套に姿を隠した月詠と目元を隠したことにより陰気臭い外見となった鳳仙を前に給仕は怪しいと表情を引き攣らせたが、長いこと務めていて経験豊富なのかそれも僅か一瞬だった。

「おはようございます、お客様。昨夜は良くお眠りになられたでしょうか？」

「そうだな。久々にゆっくりと眠れた気がした」

「それはよろしゅうございます。ではご注文をお伺いします」

ニコッと爛漫な笑顔を咲かせる給仕を一瞥すると懐から小銭を数枚取り出した。亭主に投げ付けた巾着から予め抜き取っていたのだ。

「これで足りるあっさりとしたものを頼む」

「この額だと握り飯お二つが限界ですがよろしいでしょうか？」

「充分だ。お冷やも一緒に持って来てくれ」

「畏まりました」

一礼してそそくさとカウンターに駆ける給仕を見送って視線を月詠えと戻す。

「さて、これからどうするかだが」

漸く月詠とゆっくり話し合う時間が訪れた。期待と不安の板挟みに合って疲労困憊であった昨日とは違って月詠の顔色は悪くなく倦怠感も見られない。空腹を身体が訴えてくれたのが何よりの証拠である。

月詠も僅かに真剣味を帯びた鳳仙の眼差しに機敏な反応を見せて

表情を引き締めた。元々良かった背筋をわざわざ座り直して更にピンと伸ばす。外套から覗く蒼穹の眼差しが紅蓮の眼差しを捉える。

鳳仙は数秒間視線を外して逡巡し、指を二つ立てた。

「一つはここで生活すること」

「え？」

思いも寄らぬ発言に月詠は目を見開いた。

「落ち着け。あくまで一つ目の案だ。

この宿の亭主は理解ある人物だ。人の目を見て生きて来たから分かる。詳しい事情を端折ったりしても住み込みの給仕として雇ってくれるだろう」

当然であるが、何が原因で騒ぎが起こるか不明な以上大声で話せる内容では無いので声は潜ませている。人が疎らな為、食器を突く金属音が妙に反響していたが防音性は期待出来ない。

「二つ目は俺と一緒に旅をするか。良い点は大陸を放浪するから様々なものが見れるし触れることも出来る。悪い点は俺が傭兵である以上、死地に赴く。だから危険とは隣合わせだ。俺が死ねばアンタは宛てがなく最悪野垂れ死んでしまうかもしれん。だからこちらはあまりお勧め――」

「二つ目でお願いします」

月詠は鳳仙の言葉に重ねて即決を下した。

迷いなき瞳と風鈴が音を奏でるような凛とした声に鳳仙は虚を突かれた。

「……書物でしか知ることの出来なかったものたちをもっと見てみたいのです。思い切りただの私事ですし、私には戦う力もないのですが――もし迷惑ではなければご一緒させて下さい」

何の抵抗もなく耳に入り込む月詠の言葉と決意に鳳仙は安堵の息を漏らし、壁に身を預けた。

『似ている』そう自らが述べたように鳳仙には奇異な存在同士で繋がる月詠が気掛かりで仕方ないのだ。一つ目の案は彼女の安全性と生活面を考慮して出したものだが、あまり乗り気ではなかった。気前の良い亭主に預けたと言っても心配は拭い取れないのだ。しかもよくよく考えればここは盗賊が押し寄せた際の対抗力が低い。

だったらやはり月詠は傍に置いておくべきである。今回のように、せめて自分で発言できる意志を持つまでは。

「そうか」

たったそれだけしか返事をしない鳳仙であるがしっかりと納得していた。

「ならこの話は終わりだ。朝食を取り、報酬を受け取ったら街を出よう」

「はい。鳳仙様」

鳳仙と月詠。お互い表情の変化に乏しいという残念な繋がりも持

ち合わせる二人は小さく笑った。

――そんな時。

「お兄ちゃぁああーーーんっ！！」

食堂のあらゆる音を跳ね飛ばす大声。誰もが耳を抑えて声のした方角に顔を向けるが、そこには同じく被害者となり耳を抑えた美少女二人。

元凶は既に行動を起こしていた。

例えるなら赤い魔弾。

赤い魔弾が卓と卓の間を擦り抜けて鳳仙へと放たれた。

その速度、まさに閃光。弓兵の射る矢よりも早く疾走するソレに反応など出来るはずもなく――

無情にも鳳仙の顎を捉えた……。

「――――ッ！？」

「鳳仙様！？」

月詠の悲鳴すら遮る鈍い音が響き、アッパーカットを喰らったかのように鳳仙の顔は無理矢理天を仰がされた。

人体の構成上、下から上への攻撃は大きなダメージを与えやすい。

例え反応出来たとしても身体の中心部はガードが難しい為、ダメージを免れることは不可能だろう。

辛うじて意識は保ったが脳が揺らされたのでそれとは別に身体は思うように動かない。

（お、俺に、なんの恨みがある……）

口を閉じていたのは不幸中の幸いと呼ぶべきか。もし月詠と会話していようものなら歯は欠け、自ら舌を噛み切っていた。

「脳が壊れそうだ……」

視界、思考ともに霧掛かったように鈍くなり、まともな機能を果たせなくなったがそれを根性で押し切る。

「何の真似だ、張飛」

平静を装って飛び付いて来た赤い魔弾――張飛を引きはがす。意識を保つだけでも一苦労なのだが、行動まで起こすのは至難の技だ。

そんな鳳仙の事情を鑑みない（というか気付いてない）張飛は天真爛漫な笑みを浮かべた。

「昨日はありがとうなのだ！　おかげで鈴々達はご飯を食べることが出来たのだ！　本っ当にありがとうなのだ！」

喜色満面。そうとしか表現しようのない表情でもう一度鳳仙に抱き着いた。今度はダメージを受けなかった。

「何を言っているのかさっぱり分からん」

破壊力に長けた長槍を振り回すくせに小柄な身体をした物理学無視の張飛をもう一度引きはがす。

照れているのではない。ちなみに性愛の対象に幼女を求める異常性癖（ロリコン）でもない。この無邪気な子供への対象法が鳳仙には分からなかった。

無邪気な子供＝苦手の方式が鳳仙の中で瞬時に組み立てられた。

しかも未だに張飛は抱き着くことはしなくなったがちょこんと眼前に座ってご機嫌な様子。

既に張飛を苦手意識として悩内へ刷り込んだ鳳仙の困惑は増す一方である。

（俺にどうしろと？）

泳いだ視線を月詠に止めた。

助けを求めたつもりだったが月詠は逡巡の後「犯罪は、めっ、ですよ」と冷めた瞳で平淡に言うだけで何も理解はしてなかった。もしかすると鳳仙の視線を「襲っていい？」と勘違いしたのかもしれない。最悪である。

困り果てた鳳仙に今度こそ救いの手が舞い降りる。張飛の背後からにょきっと現れた両拳が張飛のこめかみを挟んだ。

そして、

「鈴々！　お前は、あれほど騒ぐなと昨日注意されたと言うのに！」

ぐりぐりぐり。

「痛い痛い痛い痛い！　痛いのだ愛紗ーッ！！」

左右のこめかみをしっかりと拳で固定されて強く回された張飛の悲痛な叫びが轟く。身を必死に捩らせるが背後を取った関羽の折檻から逃れる術は無い。

幼女の悲鳴が響くというのに鳳仙は無視して安堵の息を着いていた。

「……残念でしたか？」

月詠が白眼視する。

「アンタ、案外むかつくな。これが安堵の息以外の何に見えた？」

「……幼女を襲えなくて溜め息」

「連れて行かんぞ」

「……男に二言は無いのでは？」

「俺は言ってない。敵として対峙するのなら女とて容赦はせん」

「……私は貴方の味方です」

「この女」

思ったより数倍は失礼な部分を持っていた。相手の感情や仕種を読み取るなど対人経験がまるで無い月詠には高等技術過ぎるから仕方ないとも言えるのだが、ありもしない罪を着せられた鳳仙の腸が煮え繰り返るのも仕方ないと言えよう。

お互い様である。

これ以上不毛な会話を繰り広げても無駄な時間を過ごすだけなので鳳仙は月詠から視線を外す。

「いい加減許してやったらどうだ、関羽」

悲鳴がいつまで経っても収まらないかと思えば、まだ折檻は続いていた。

「しかし、鈴々は昨日も宿の者達に迷惑を掛けてしまったのです。厳重注意をしたにも関わらずまた――しかも鳳仙殿にまで被害を齎せてしまって」

「非常に申し訳なさそうな表情をしているが、現在進行形で迷惑を掛けているぞ」

「え――？」

鳳仙は関羽の後ろに目を向けた。促されて関羽も折檻をやめて初めて周囲を見渡した。

『……』

突き刺さる視線。

冷たい視線。

怒りの視線。

黙れの視線。

「……ぁ……」

あまりにも遅い発覚。関羽が羞恥に顔を桃色に染めた。

「当然だろうな。そして俺達まで巻き込まれた」

「……巻き込み事故というものですね」

「現段階でアンタは事態を悪化させるだけのスパイスだから黙っていろ」月詠にそう言ってやりたかったがまた余計な舌戦（というにはあまりにお粗末な）を繰り広げてしまう結論に至った鳳仙は黙殺を決めた。

「とりあえず座れ。給仕が困っているぞ。後、鳳仙でいいし敬語も使わんでいい」

厨房から出された食器の上には握り飯が二つ乗っている。こんな貧相な朝食を注文する客なんて鳳仙以外にいるはずがない。しかし食器を受け取った給仕はこちらをキョロキョロと見てその場から動こうとしてなかった。

原因は言うまでも無い。

「す、すまぬ。鈴々、もう騒いでは駄目だぞ」

「……」

「……返事がありません。ただの屍のようです」

「月詠。アンタは物静かなのか？　お笑い担当なのか？」

「……求められれば私はいくつもの顔を披露しましょう」

「分かった。黙っててくれ」

返事は聞かなかった。正直どうでもよかったのだ。

鳳仙が席を三つずれて奥に進むと今まで一度も会話に入って来なかった劉備が隣に座った。

ようやく落ち着いた頃に給仕が握り飯とお冷やを持って来て卓上に置いた。同時に劉備が口を開く。

「すみません、亭主さんからお話が通っていると思うのですが」

それだけ言うと給仕は納得した。

「劉備さん、関羽さん、張飛さんですね？」

「はい」

「お話は伺っております。すぐに朝食をお持ちして来ますね」

「よろしくお願いします」

おそらく亭主が昨日渡した小銭で食出来る分量を昨日の夜食と今日の朝食分に分けてくれたのだろう。給仕が一礼して離れると劉備は身体ごと鳳仙に向けた。

「鳳仙さん。昨日は本当にありがとうございました」

律儀に頭を下げる劉備の顔色は昨夜に比べて随分良くなっていた。

「何のことで礼を言われているのか分からないんだが」

視線を外し、あくまで知らぬふりを突き通す鳳仙に劉備は暫しキョトンとすると、

「じゃあそういうことにしておきます♪」

張飛と似た笑みを浮かべた。

「……」

「素直じゃないんですね、鳳仙さん」

「何を言っているかさっぱりだな。あと敬語はいらん」

突っぱねて鳳仙はお冷やで唇を濡らした。珍しく喋り過ぎて渇きを訴える喉に潤いが満ちる。

ふぅ、と一息着いてお冷やを置くと中央に置かれた握り飯が張飛に食われる前に月詠の元へ持って行く。

「とりあえず、黙ったまま食え」

「……」

黙殺されるのが目に見えたのか言われるがまま、月詠は握り飯を手に取って小さく食べ始める。

「鳳仙くんは食べないの？」

「昨夜食べたからいらん。それより劉備、すまないが衝立を立ててくれないか？」

「？　どうかしたの？」

唐突な申し出に劉備は小首を傾げる。

「先の出来事のせいで他の客からの視線が突き刺さるんだ。客も増え始めて来たから、出来るだけ騒動は起こしたくない」

「あ、そうだね。ちょっと待ってて」

劉備は身内から出た騒動に苦笑しつつ席を立ってくれた。

朝食のことに触れられると月詠も含め一同が気を遣うのは目に見えていた。どれも資金元は鳳仙の稼いだものだから、その本人が朝食を取らず自分達が和気藹々と朝食を取っていれば、それは居心地悪いだろう。

丁度衝立が欲しいと思っていた時に聞いてくれたので話を逸らすには絶好だった。

劉備が衝立を立てたおかげで他の席から視線を遮れた。これで誰かの目を気にすることもない。

鳳仙が溜め息を着くと、戻って来た劉備がキュッと細長い眉根を寄せた。

「駄目だよ鳳仙くん。溜め息なんて着いたら幸せが逃げちゃうんだよ」

果たして怒っているのか、ただ注意をしているだけなのか、まるで迫力の無い声と表情に鳳仙はクッと笑った。

「そうだな。気を付けよう」

「笑いながら言っても説得力ないよ～」

むーっと膨れる劉備は成熟した身体と反比例して子供らしい。だがなぜか鳳仙は出会って間も無いというのに、らしい、そう思った。

自分をまるで飾っていない。ありのままを常にさらけ出している様が人徳を買い、関羽や張飛と言った強者を惚れさせたのだ。

人を見る目はある。

自分でそう言った通り、鳳仙はこの三人の眼差しから強い決意を見た。自分には無い、世を憂いる気持ちだ。

世の為、人の為。平和な国に住む恵まれた者が聞けば鼻で笑われたり、狂っているのではないか、と一蹴されるようなこと。

この三人は成し遂げようと――いや、成し遂げるつもりでいた。

予感でしかないのだが、鳳仙にはこの三人が表舞台で活躍するのでないかと考えていた。

ならば隣にいる月詠――天の御遣いは彼女達こそが傍にいるに相応しい。女神の恩恵を授かりし劉備達なら、その恩恵に驕ることなく正しい方向に世界を導き――太平の世を築いてくれるのではないのか。

（いかんな。干渉しすぎている）

鳳仙は首を横に振って予感を振り払った。所詮自分は金で動く傭兵であって世捨て人なのだ。

劉備達と接点を持つべきではない。

月詠は傍にいることを選んだ。

ならば暫く月詠は自分の傍に置き、劉備達の想いだけを聞くのではなく、世界を見て、知り、その上で決断をさせるべきなのだ。

この世界に来たばかりの赤子に等しい天の御遣いを太平の世の為とはいえ、自分達の想いだけを押し付けて利用するなんて許せない。それは赤子に利用価値を見出だすのと何も変わりないのだから。

天の御遣いになるかどうか、それを決めるのは他ならぬ月詠自身だ。確固たる思いを持たない人間を、純粋な想いだからと流されるような情けない人間を奉るなんて許せなかった。

その想いが月詠だけならず世も憂いて辿り着いた結論であることに鳳仙は気付かない。

そんな時に――運命の輪は回り出した。

「盗賊だ！　盗賊が来たぞぉおおーーーーッ！！」

第八話　獣と餓狼（前書き）

すいません、今回はかなり短いです。

後書きに、なんとなくキャラ紹介（鳳仙）を書きました。

第八話　獣と餓狼

宿の外から絶叫。絶望と焦燥に溢れた若者の声が耳朶を打った。

既に聞き慣れた類と言っていい叫び声に鳳仙は眉根を寄せるだけであったが、周囲の者の反応は当然違った。

津波のように恐怖の波動が瞬時に広がり、戦慄を帯びた声や悲鳴、席を立って我先にと逃げ出す足音が喧騒を増していく。またこれも聞き慣れた類でしか無かった鳳仙は突き放した心持ちでお冷やを飲む

（さて、どうする？　逃げるか？）

少数なら槍を振るっても良いのだが、大群なら馬止めの柵に繋いでいる神那に跨がってさっさと逃走するつもりでいた。はっきり言ってどうでもいい人間の為に力を振るうつもりなんて皆無である。

月詠に目をやると状況を飲み込めていないのか握り飯を食べながら小首を傾げていた。騒がしい程度にしか認識していないか。だがこれは僥倖でもある。何も知らないのなら迅速に街から離れれば無意味な罪悪感に囚われる必要もないのだから。

そんな他人事の態度を崩さない鳳仙の横では、眉根を寄せた劉備が関羽と張飛に視線を向けていた。

「愛紗ちゃん、鈴々ちゃん」

「お任せを。桃香様は安全な場所に退避しておいてください。行くぞ鈴々！」

「了解！　食前の運動なのだ！」

血相を変えた関羽と無邪気な笑みを変えない張飛は壁に立て掛けていた自身の獲物を掴み、衝立を跳ね退けて颯爽と店を出て行った。

食堂――おそらく宿は既にもぬけの殻だ。閑散とした宿とは打って変わり外は恐怖に満ちた喚声や泣き声、更に遠くからは馬蹄の響きが空気を震わせていた。民からすればあの音は死神の誘いにしか聞こえないだろう。

鳳仙は衝立が跳ね退けられて開けた食堂を見渡す。恐怖に駆られるあまり卓は蹴散らされて出来立ての料理と皿が無残な形となって散乱していた。

（無様な光景だな）

理性の欠片も無い所業に鳳仙はやはり弱者だな、と嘲った。力を駆使する盗賊の方がよっぽど理知的に見えてしまう。

やはりさっさと逃走するべきか？

席を立つと鳳仙は視線を向けられているのを感じた。悪意や殺意、そう言った負を孕んだ眼差しではない。

視線を辿ると鳳仙が高評価した亭主が食堂の入口にいた。

壁に凭れて腕を組み、試すような瞳でこちらを見続けている。

「ちっ」

案外自分も稚拙な誇りを持っていることに毒突き、忌ま忌ましげに顔を顰めて鳳仙は槍を握り、劉備と月詠を交互に見る。

「劉備、退避するならコイツも一緒に頼む」

「え――――」

卓に手を着いて乗り越え、鳳仙は颯爽と駆け出す。背後から聞こえる声を一切無視して亭主とすれ違う刹那に呟いた。

「報酬は肉料理、たらふく一杯だ」

「あいよ。頼んだぜ、傭兵さん」

二人は口角を吊り上げて別れる。宿から飛び出した鳳仙は馬止めの柵にいる神那に飛び乗る。

「よく盗まれなかったもんだ」

手綱を握り、足で軽く愛馬を蹴ると神那は猛々しい雄叫びを上げて駆け出した。

地鳴りのする方角から戦闘地点を割り出すのは簡単だった。鳳仙と月詠が通り抜けた西門へ民は逃げており、鳳仙は逆方向に駆け出

した。

「退け！」

そう叫びを上げたが進路上を走る民は聞く耳を持たない。何度も後ろを振り返り、距離を詰めて来る馬蹄の音に悲鳴を上げている。連中が進行方向なんてまるで見ていないことに鳳仙は舌打ちして障害物を避けていく。

おかげで時間を無駄に消費する。五分にも満たない損失だがその差は大きい。その間に何人もの民が醜い歯牙に掛かって儚い生涯を終えていくのだ。

（正直、どうでもいい話なんだが）

口答でもない視線だけによる契約。

依頼は賊の討伐。

依頼主は亭主。

報酬は肉料理。

非常に不安定でいい加減な約束であるが自身がたった一日の数回の会話で、男と認めた存在。そんな彼を無視することは出来なかった。

受けた依頼は放り出さない。命を賭して完遂に勤める。

これが鳳仙の持つ傭兵としての職業倫理だ。

死神の鎌を振るう音が徐々に近付いて来る。民が恐怖し逃げ惑う畏怖なる激戦の鼓動。身体中の血液が沸騰するような高揚感に握った槍に力が入る。刈り取られるのは自分か敵か。

逃げ惑う人々の群れを抜けて西門を颯爽と駆け抜け、砂塵の舞う荒野に立つ。そこは乾燥した死の匂いが空気に紛れて充満していた。

己を、他者を鼓舞する叫び声と馬蹄の鳴動に紛れて粘着とした下卑た声が耳朶を打つ。砂塵にまみれてよくは見えないが黄色い布を頭に巻いた連中がソレだろう。連中に対抗する衛兵達の必死の表情と共に戦う関羽と張飛の姿が敵味方を区別させた。

（数は黄色が圧倒的だな）

お世辞にも大きいと言えない街に駐在する衛兵の数は少ない。抽象的に見て敵側の数はざっと四倍は上回っている。戦況など火を見るよりも明らか――というほどでもなかった。

「なるほど。連中は農民だったのか」

兵士として訓練を積んでない盗賊の動きは洗練されておらず策も弄していない。騎兵による突撃の一辺倒を繰り返すばかりで統制なんてあったものではなかった。まさに烏合の衆。弱者を虐げ、快楽に身を堕とし、力に酔いしれた者の辿り着いた情けない姿。

大地に転がる温かな死体は盗賊の方が僅かに勝っていた。

先陣を務める関羽達の活躍もあって状況はこちらに傾きつつあるが……

「数に押し切られるのも時間の問題か」

やはり戦場を制するのは優れた策以上に数量である。今は優勢にあったとしても関羽と張飛の体力に限界が訪れれば敗北するのは目に見えている。

「俺一人加わっても、短期決戦に乗り出せなければ全滅だが……」

仕方ない、なるようになるか、と楽観視して鳳仙は神那から降りる。

一対多数の戦闘を繰り広げ、特化した鳳仙に策略などあったものではない。ただ野生の勘と称するに最も値する何かを頼りに戦い抜いて来た彼にそんな知識などあるわけもない。

目の前の敵を、自分を狩りに来る敵を、間合いに入り次第討ち滅ぼしていく。

ただ、それだけ。

防衛任務でもない限り、戦いの最中に（鳳仙にとっては戦況を見る行為すら）余計な思考は持たない。斬って、斬って、斬り捨てる。それが全てである。

まるで獣。

血を求め、血に飢えた獣の本能の象徴とばかりに君臨する鳳仙は、炯眼に捉えし流血を求める餓狼に、更なる流血を求めて駆けていく。

第八話　獣と餓狼（後書き）

【名前】
鳳仙　奏明

真名　？？？

【年齢】
１９歳

【容姿】
第二話（多分）の前書きにあるＵＲＬに画像あり
描写するなら猫っ毛の黒髪に紅い瞳。彫りの深い顔をしており筋肉質な身体付き。

【性格】
無愛想、無表情、無頓着。とにかく無に綴られし男。意外と、本当に意外と義理堅いところがある。

【職業】
傭兵

【武器】
本来は剣だが折れてしまっている為、現在は槍を使用。なかなか剣に巡り合えない不運を持っている。

【詳細】

世捨て人を自称して依頼で無い限り、事勿れ主義を貫く。

傭兵稼業で生計を行いつつ各地を適当に放浪していたが月詠と出会ったことにより運命が変わる。

１９年という人生の中、一度も他人に真名を授けたことはない。

第九話　武

（なんてお粗末な戦いなんだ……！）

関羽は内心に苛立ちを募らせつつ散弾銃の如く速度で刺突を披露する。二、三、四……まだまだ続く。十を越えた頃、その連撃はもはや白刃の壁として重々と君臨していた。

賊風情に防げる閃光ではない。

白刃が煌めく度に血飛沫と断末魔が空気と大地を汚す。醜い痴態が何処までも繰り広げているというのに空は意に介さず、寧ろ地上を嘲るかのように晴天に澄み渡って見下ろしている。この時代には救いなど存在しないと天に訴えられている気がして関羽の苛立ちは更に強まった。

（これの何処が戦いと言えるのだ）

関羽は先陣より一旦距離を取って周辺を見渡す。巻き上がる砂塵と赤黒い血の隙間に見える戦闘。大気を揺るがす咆哮と剣声と馬蹄は更に入り乱れて昇華する。大地を見下ろせば鮮血に彩られて倒れる衛兵と盗賊がそこかしこに見受けられ、友を殺された生者は更に怒りと憎しみを力に変換して武器を振るう。

そんな悪循環が途切れることなく続き、当初の統制が嘘のように乱れていた。

（まるで獣ではないか）

派遣されていた衛兵達はぬるま湯に浸った未熟者の集まりだったのだ。軍師の（と言っても関羽からしてみればいまいち頼りにならない）策略を怒りのあまり忘却し、思うままに武器を振るうその姿はまさに獣でしかない。飢餓に瀕する狼の群れが生存争いをするように、黄ばんだ歯牙をちらつかせて共食いを始めている。

（このままではあと数時間の内に押し切られてしまう）

関羽は口にしない。口にしたところで戦の狂気に充てられ、怒りに我を忘れ、発狂した連中が相手な以上何を言っても無駄だからだ。そんな暇があれば今のように乱れた呼吸を費やすことを専念するだろう。

適当としか形容しがたい敵味方が乱雑した戦場で華々しい戦果を上げているのは張飛だ。

小柄な身体を匠に利用して白刃を煌めかせる度に盗賊が平伏せていく。関羽と違って仲間を激励しているのだが、やはり効果は望み薄だ。

その表情にまだまだ余裕が見えて関羽は唇を噛み締めた表情を緩和させた。

「全く……。無尽蔵な体力だな」

餓狼共の雄叫びに紛れて「とおぉおりゃあーー！」とその場に似合わないたどたどしい気合いが涼風のように耳朶を打つ。

大地を削るが如く。力強い躍動で、溢れ返る狂気に満ちた盗賊の生を狩り取る張飛は、疲労を浮かべるどころか時を経るごとに全身の筋肉が燃えるような熱を帯びてますます加速している。その様は無邪気な小鬼であった。

あんな姿を見せられれば喜怒哀楽を通り越して呆れてしまう。

しかし苦笑する関羽の頭は空気を入れ換えたように冷静さを取り戻していた。肩で呼吸しつつもその瞳には衰えることのない輝きを宿している。

呆れた――だが、同時に触発もした。

再び槍を持つ手に力を込めて炯眼で戦場を見極める。

「さて……行くか！」

◇◆◇◆◇◆◇

敵として対峙する者に容赦しない。

月詠に述べた通り、鳳仙の武には一欠片の容赦も無かった。

「……」

前方から群れとなって襲い掛かる賊を、呼吸をゆっくり吐いて肺

を空にしたと同時に斬り伏せる動作に入った。

足、腰、手の順番に身体を半回転させて運動エネルギーに逆らわず一気に爆発させた。

リーチの長い槍から放たれた袈裟斬りは円を描く間に三人を絶命させた。一人目は首を跳ね、二人目は鎖骨から脇腹に掛けて骨ごと斬り砕き、三人目は横腹から腰骨に掛けて斬り裂いた。

血を吸って鈍くなった刃を、それでも一呼吸の間に振るい続ける。

振り切った直後、引き戻すことは無く流れのままに身体をもう一度半回転させながら斬り上げる。

流れに沿ったままの連撃は操作性に欠けていた。気配のするままに振り抜いた為に頸動脈を斬り裂けず、賊の肩に深く突き刺さってしまった。

「……！」

苦痛に沸き上がる悲鳴を全く聞き入れず、鳳仙は歯を食いしばり、力を更に込める。突き刺さって停止した槍を引き抜かず、そのまま肉と骨をザクザクと斬り、賊の身体を斜めに掛けて真っ二つにする。

背後から近付く不快な気配と声に鳳仙は槍を使わずに対処した。下から上に振り抜いた為、身体が伸び上がる直前に片足を軸に回し蹴りを繰り出して不意打ちを狙った賊の首をへし折った。

確実に敵の生を終わらせていく。

足元に転がる賊は誰一人として生き残っていない。気絶でも重傷でもなく、既に肉塊として地を舐めていた。

恐怖すら戦場の狂気に呑み込まれた連中は退くことをしない。

無駄な行為と理解出来ず襲い掛かり、結果呆気なく頸動脈を斬られて死を実感出来ないまま倒れる愚者ばかりが鳳仙の足元と鳳仙の槍を振るった軌跡に転がっていた。

また、懲りず鳳仙を狙い地を蹴る獲物が二匹。

視界の両端からほとばしる刺突は風切り音をなびかせて鳳仙に迫った。

「――っと」

拍子抜けな言葉を出しつつも鳳仙はそれを後ろに跳んで回避する。刺突は一撃必殺に長けた技だが命中率に欠けているので回避するのは思うよりも簡単。しかも腕が伸び切るから側面に回り込まれると隙が生じてしまう。

回避と同時に鳳仙は槍を振りかぶり、足を広げて姿勢を落とす。着地した瞬間に前に出している右足を強く蹴って刹那の間に二人を攻撃範囲内に入れた。

「う、うわぁ！」

獲物の顔が引き攣る。咄嗟に攻撃を繰り出そうとするが予備動作を終えている鳳仙より早く攻撃を出せるはずもなく、

シュン……

風切り音だけが空間を掌握すると獲物の首から鮮血の噴水が上がった。口をパクパクと動かしつつ身体を倒し、数秒後には絶命した。

鳳仙は渋面を険しくすることも緩めることもせず、淡々と穂に付着した血を振り払う。

「あの二人……やはり戦ってみたいな」

直立して遠目で戦場を眺める。

挟み撃ちをする為に賊の背後（と言っても敵味方入り乱れて背後と呼んでいいか分からないが）から駆逐に入った鳳仙の視界にはしっかりと関羽と張飛の姿がある。

双方共、これ以上ないくらい華々しい戦果を上げており、らしい戦い方をしていた。

関羽は厳戒で実直な隙を見せない鉄壁の型。

張飛は天衣無縫で突貫性に長けた型。

戦果を舞う姿は潔癖で清廉なる戦乙女を思わせる。圧倒的な力を持ってして賊を蹴散らす高い力量に鳳仙は震えた。

関羽が張飛の武勇を見て触発されたように、鳳仙もまた二人の武芸に熱いものが触発されたのだ。

恐怖ではない。

強敵を前に心が躍っているのだ。

ただ残念なのはお互い味方同士であり、敵に己を高揚させる相手がいないこと。

しかし不満を抱く前に歓喜していた。

これは武芸者ならば誰もが逆らえない性というものだろう。

常に強者との戦いの中で己の技量を知り、更なる高みへと押し上げる欲望が全身を支配する。

もっと、もっと、もっと――と張り裂ける心音が強者を求める。

死の匂いが近付く度に身体中の血が沸き上がる。

これこそが生き甲斐。

これこそが全て。

これこそが我。

試合ではない。

稽古ではない。

生と死と狭間にだけ存在する極限の命のやりとり。

これこそが快楽の境地。

武を極めること、そのものが己の天命。

（今は不可能だろう。だがいつか、剣を直した暁には――）

彼女達と死合いたい。

鳳仙の瞳に既に賊は映ってなかった。

◇◆◇◆◇◆◇

夜天に煌めく星の懸け橋を、鳳仙は悠々と眺めていた。

天高く聳え立つ日輪の輪は既に姿を隠し、深い闇と冷たい風が地上を覆い尽くしている。

不気味なまでの静寂と、風に乗って舞い込んで来る血の匂いが戦いの終わりを主張していた。

数刻前は血と狂気に覆われて鳴動している大地も今は静まりかえって、馬蹄が地を削るのではなく、コツコツと軽く蹴っている程度で、それが心地好い。

結果的に言うと賊は死に絶えた。

取り憑かれたように狂気に身を堕とした両者は最後の最後まで武

力行使を止めることなく戦い続け、量を凌駕する質を持った鳳仙達の勝利で幕は閉じたのだ。

鳳仙、関羽、張飛。

この三人の内、一人でも欠けていれば、大敗――そう言ってもいいほどの惨敗帰して街は賊の欲望に潰れていたところだろう。

三人はそれほどの実力者であった。

軍属すれば将兵にまで上り詰めること間違い無しと誰にでも太鼓判を押されるくらいに目覚ましい活躍を見せてくれた。数は開戦当初の二割にも満たないほど削り取られてしまったが生き残った衛兵達は若き強者（つわもの）を賞賛した。

「鳳仙殿」

「ん？」

勝利の余韻に浸るにはあまりにお粗末な戦いだった為、行き場の無くなった感情を夜空に溶かそうとしていた鳳仙は反応に遅れてしまった。

素直に声の聞こえた方に顔を向けると、神那の歩幅と自身の騎馬の歩幅を合わせた関羽と視線があった。数刻前の、険しくともなお絢爛と輝いていた表情はなりを潜め、今は微笑を浮かべて全身の力を抜いてようだった。後ろに乗った張飛が関羽に身体を預け、爆睡していることも相まってか柔らかい表情が強調されて印象的である。

「先の戦の助太刀、感謝する。お主が参入してくれたおかげで賊を

退治のすることが出来た」

「気にする必要はない。こっちも街を護る理由があったからな」

亭主の出した依頼の報酬――肉料理腹一杯を護る理由にする辺り、この男の薄情さと外道さが伺える。しかも「そういえば盗賊討伐の報酬も貰って無かったな」と人命よりも貰い損ねた報酬のことを思い浮かべているのだ。

しかし関羽は鳳仙にとっての街を護る理由を思索すると思い浮かんだのはまるで別のことだった。

「鳳仙殿と共に卓を囲んでいた女子のことであろう？」

外套ですっぽり身を隠した月詠に結論を辿り着かれて鳳仙は眉根を寄せる。

（なぜ月詠が出て来る）

月詠を護る為ならば鳳仙は月詠を連れてとっとと街から去っていた。冗談ではなく、亭主との取引さえ無ければ行使するつもりであったのだ。

関羽の予想は、武のある常人が行う術であり、常人から掛け離れた鳳仙の本音は的外れなところにあった。

だが、わざわざ本音を話して評価を下げる必要はあるまい。傭兵という職業に信頼関係は必要なのだ。

「そう、だな」

曖昧に返して、鳳仙は暗い夜道の警戒を理由に関羽から視線を外す。そこには二割ほどしか残っていない衛兵が勝利の余韻に浸って、鳳仙達三人には及ばないものの、自身の武勇を自慢げに語っていた。

「あの者達がもう少し統制が取れていれば犠牲者は格段に減らせたのだが」

一言申しておくべきか、と片眉を上げた関羽にやめておけ、と鳳仙は御する。

「犠牲の数はともかくこの戦いは俺達の勝利に終わったんだ。見てみろ、あの勝利に酔いしれた面を。自分の歩いた道が正しかったと主張せんばかりの阿保面だ。武だけしか威張れるものの無い俺達が何を言ったところでどうにもならん」

敗北を帰していれば責め立てることは出来た。連中を修正することは出来た。

だが勝利として戦いの事象は終えている。

後から何を言っても遅いどころか無駄だった。

「こんな時に隊を率いる者が叱咤激励をせねばならないと言うのに」

憤怒の眼差しが生き残った衛兵の中で最も階級が高い者へと向けられたのだが、その者は気付いた様子なく賊を薙ぎ倒す自分の勇ましい（と思い込んでいる）姿を語っている。

「ここの太守は何をやっているのだ」

「現、太守というか、元、太守だな。つい最近変わったばかりだから、辺境にまで手を加える余裕は無いんだろ」

意外と情報を握っている鳳仙に関羽は感嘆の息を漏らした。

「なるほど。では賊もそこを狙ったのかもしれぬな」

「つまりそれなりには優秀な太守が赴任したってことだな。確か、公孫賛だったか」

残念ながら鳳仙の情報はここまでだ。街の住人や前を歩く衛兵に聞けばより多くの情報を集められるのだが、関羽の心中を察するなら自身が批判した衛兵には聞きたくないと言ったところか。

鳳仙にとってもどうでもいい話だし、興味も無い。ならばもう少し有意義な会話をしたかった。

「ところで関羽、いつか俺と死合いしてくれないか？」

と、なればもちろんこれしかない。人を楽しませる話題を何一つ持たない――それが鳳仙という男だ。何の自慢にもならない。

「唐突だな。どうしたというのだ？」

虚を突かれた表情の関羽から拒絶の感情は見受けられない。どうやら単純に疑問を抱いただけのようだ。

「唐突じゃないさ。戦場で獲物を振るうアンタの姿に血が騒いだ。『我こそが武』と主張する俺達に戦う理由は必要か？」

武に生涯を捧げ、
武に存在意義を見出だし、
生と死の狭間の中に極限の快楽を感じる武に酔いしれた者。
身体は器。
血は燃料。
魂は無限の動力炉。
手に持ちし獲物は稼動し続ける限り百花繚乱の如く輝きを放つ。
言葉など不要。
要するのは武。
己そのもの。
「良いだろう。この関雲長、その誘い――受けて立つ」
二人の視線が深く絡み合う。
その熱は炎の如く燃え盛り、強き闘志に溢れていた。
沸き上がる興奮は雷に放たれたような刺激を齎せて身体から震えが止まらない。

思いを馳せるだけで全身が麻痺をした感覚に囚われる。

戦闘狂と思われてもいい。

自分にはそれしか無いのだから。

「では、まず剣を直してからだな」

ああ、やはり……と鳳仙は笑みを深くした。

「気付いていたか」

「鳳仙殿が私を見ていたように、私も鳳仙殿の戦いを見ていたのだぞ。貴方が本来、剣の使い手であることくらい分かる。腰に剣を差していることだしな」

関羽は闘志の余韻ある視線を折れた剣へと向けた。鳳仙が本来扱う獲物。これを手にしてこそ戦場で猛々しい雄姿の元に舞うことが出来る。

槍は多少かじった程度でし無い。剣を扱って関羽と互角の戦いを繰り広げられるのであって、槍で死合いしようものなら十の槍閃を交える前に呆気なく殺られることだろう。

確かに鳳仙も目覚ましい戦果を上げた。討った数も後から参入したにしても関羽達と遜色劣らないと言える。衛兵達には関羽や張飛に匹敵する武勇と思われているかもしれないが、実際は大差で関羽が勝っていた。

それもそのはず。

同等の力量を持っている、しかし鳳仙は得意武器を扱っていないのだから。

「なら、剣を手にしたのちに死合いしよう」

「もちろんだ」

『我こそが武』と称する者にしか分からない歓喜を交わして、二人はいつか合い見える戦いの日を日々の糧とした。

第十話　帰還（前書き）

最近買った『戦場のヴァルキュリア３』にハマってしまい更新を怠ってしまいました。本当にすみません。

第十話　帰還

「……なんだ？」

街に戻って来た鳳仙は、異様な雰囲気に眉根を寄せる。

戦場から衛兵が帰還すると民は勝利を知り、街は歓声の嵐に支配されるのが通例であるが、そんな様子は微塵も見られなかった。

鳳仙や衛兵達の視界には人っ子一人見当たらず、幽州の冷たい風が南西から吹き込み、冷気だけが衛兵を出迎える。

まるで無人。濃い闇に呑まれてしまったように、街がただそこにあるだけの空虚なものにか思えない。人気なく、不気味なまでに静まり返っていた。

「一体どうしたというのだ？」

隣から関羽の緊張した声が耳朶を打った。それを皮切りに衛兵達にもざわめきが走る。

鳳仙も気持ちは同じである。

しかし思考を働かすより行動派な彼は一人神那を走らせる。こういった行為を平然と出来る辺り、結局鳳仙も猪突猛進型だ。関羽のことを猪と罵ったことを謝るべきである。

行く先は二つ。

月詠の安否。そして亭主ではなく（ここ重要）肉料理の安否。

後者は亭主の生存が必須なのだが、鳳仙の脳裏に成立している不等式は、月詠＞肉＞越えられない壁＞亭主、て本能に忠実なものだ。ぶっちゃけた話、亭主はおまけでしかないのである。

「月詠……肉……何処にいる……！」

肉がもはや人名として数えられている。亭主が聞こうものなら、ブチ切れても不思議じゃない勝手な独白を漏らしつつ、鳳仙は探しものを見つける為に視線を右往左往させていた。

「あれは――」

まず一つ目は探すまでもなく、すぐに見つかった。見つけて当然とばかりに篝火が燦然と輝いていたのだ。

鳳仙は手綱を引いて神那を停止させると馬止めの柵に繋ぐ。

言わずもがな、そこは宿屋だった。赤い支柱が四方を支える年季の入った宿。月詠と共に一夜を過ごし、関羽たち強者と縁を齎せた場所。

関羽たちが後を追って来たのを一瞥しつつ柵を抜けると、西門近くの閑散とした雰囲気を証明するように宿には人だかりが出来ていた。

このままでは中に入れない。

鳳仙は前髪を手櫛で乱暴にかいて朱色の目を隠してから群衆の中で一番近くにいた青年の手を引いて問い質した。

「何なんだこれは」

突然強い力に引っ張られた青年は驚く。「あ、ああ」と頷きつつ身体を向き合わせて、質問に答えた。

「この宿の亭主が妖を引き入れたんだよ！」

「妖――だと？」

戦慄した声を真に受けて声を発したのはいつの間にか背後にいた関羽である。鳳仙は少しの驚愕を見せたが一つの結論に辿り着いて口を閉ざした。

どうせ口にしても群衆は信じないだろう。

篝火を見つけ、ぞくぞくと姿を見せた衛兵の姿に群衆は感極まった声を各々勝手に上げた。

「おい、衛兵の皆が帰って来たぞ！」

「盗賊は無事退治されたのね！」

「流石だぜ！」

「帰って来たばかりで悪いが衛兵の皆、この宿に入った妖を退治してくれ！　人の形をしていたが、あれは間違いなく妖の類だ！」

賞賛に混じって届いた言葉に衛兵たちは未だ事態が飲み込めず佇んでいるばかりだった。

「鳳仙殿」

振り向くと関羽の表情が戦いのソレと同じく凛とした強者のものへ変貌していた。その後ろには張飛が眠たげに目を擦っている。

やる気を見せる関羽に溜め息を着いて、関羽にだけ聞こえる声で呟いた。

「この馬鹿共が言っているのは俺と同類だ」

「同類？」

「――朱目」

思い当たる節があったのだろう。関羽はハッとして気まずげに目を逸らした。

「すまぬ、無神経だった」

「いっそ嫌悪してくれた方が楽なんだがな……」

関羽や亭主（憶測）のように、鳳仙やその同類を人として扱う者がいるから一縷の希望を捨て去ることが出来ず、半、世捨て人を自称する。

不意に彼の脳裏に蘇った光景は農民というヒエラルキーの最下層

の存在に慰み者とされた幼き自分。殴られ、蹴られ、斬られ、焼かれ、飢餓に苦しむ脆弱な自分。

幼少期と分類されるを過去にいい思い出など何処にも無かった。誰もが彼を蔑み、もしくは存在そのものを許容出来ない異物と無視をした。笑顔なんて浮かべたことなかったし、垣間見た他者の笑顔すらも悪意に満ち溢れていたのだ。

罵られた通り、その『存在』になり切ろうとも思ったが、彼は外見がその『存在』に似ているだけで所詮はただの人間である。彼を罵った農民と何も変わらないただの人間。

愛されたい。人として当然の感情を切り捨てることは初めから不可能なのだ。深い絶望が襲い掛かったとしても、恋い焦がれた切望が身体から離れることはない。自ずと知らず他人を求めてしまう。

だが希望は捨てることは出来る。現実だけを見て、自分の殻に篭ってしまえばいい。

彼もそうした――つもりだった。最初は。

しかし結局のところ、そうではないと今なら理解している。

彼に好意を持って接してくれる者がこの世界に存在していることを知ったからだ。

その事実だけが今の彼を結び付けている。

（全く、何を感傷に浸っている）

一縷の希望を抱くのはいい。捨て去ったはずの弱さを未だ引きずっていることも認めたが、それは非常に不愉快なことだった。

（誰が居るのか知らんが不愉快な思い出を蘇られた諸悪の根源は一発殴らんと気がすまん）

彼と同じく不遇な過去を送ったであろう同類を諸悪の根源と見なして、鳳仙は乱暴に門戸を開け放った。

通路を粗暴に歩く鳳仙の意識は、同類、敵、殴る、と短絡的思考に支配されていた。煮え繰り返った腸を消し去りたい、ただそれだけを考えていた。どうやら思い出が蘇ったと同時にストレスまで蘇ってしまったらしい。

諸悪の根源と定めたのも気晴らしを得る他に理由はなかった。

部屋を一つずつ開け放つつもりで階段に足を掛けたのだが、同時に香ばしい匂いが食堂から漂って来た。

鳳仙の心境など知ったことではないとばかりに食欲をそそる肉（重要）の香りに足が止まる。

朝食を取らず、まる一日戦い詰めた彼の胃袋に何かが入っているはずもなく、グゥ、と空腹を訴える音が大きく鳴った。

（肉）

不愉快とストレスのマッチングすらも肉には負けた。一瞬で思考が肉に支配される。

階段に掛けた片足を引き戻して鳳仙は食堂に至る道を歩いた。

香ばしい匂いが充満する食堂は昨日とは違い、灯が四方に付けられて明るい。そこで朝別れたばかりの意外な人物に遭遇した。

「月詠……」

咎めるような声で、卓を囲む椅子に腰を下ろし、背を向けてお冷やをちまちまと飲んでいる天の御遣いを呼んだ。

その怒気を孕んだ低い声に月詠は一瞬硬直してゆっくりと振り向く。

「……鳳仙様」

朱と蒼の瞳が絡み合う。神聖さを醸す蒼を宿したその瞳は少し泳いでいた。

庶民的行動がとことん似合わないと見えるのは、やはり彼女が天の御遣いだからだろう。

だが鳳仙にはそんなことどうでもよかった。それ以上に気になることがあったのだ。

「外套はどうした？」

朝は外套で隠されていた神秘的な容貌が、今は全面的にさらけ出されていた。

純白のカーテンが風に靡いた時のような清廉とした水色の長い髪。

透き通るように白い肌。

細い眉の下にある大きな二重の瞳、ちょこんと乗った小さな鼻、桜色のぷっくりした唇。芸術品さえ届かない整った容姿に追い撃ちをかけて煌びやかな羽衣は近寄ることさえ躊躇ってしまう――まさに高嶺の花の存在であった。

――それがなぜ、今さらけ出されている？

外套は取るな、と強く聞かせておいたにも関わらず、その言い付けはたった一日で破られてしまった。

月詠は鳳仙の声音に顔を若干強張らせつつ、彼女にとっていたたまれなくなるような沈黙を破る。

「――……劉備さんが」

「ご、ごめんなさ～い！」

泣きわめくような声が外野から聞こえて、ようやく月詠の隣に劉備がいることに気が付いた。

険しい視線をスライドさせる。すると劉備は許しを請うように、目尻に涙を浮かべて鳳仙を見上げた。

無意識の内の技だろうが、楽々と美少女に分類される劉備の上目遣いというものは草食、肉食問わず男を惑わす強力な魔力を放っている。

大抵の男は色欲に屈服するに違いない。毒気を抜かれ、窘める声音で事情を聞き出すだろう。これは男の真っ当な性と言えよう。

だが残念ながら鳳仙は、その『大抵』には属していない、極めて稀な存在だった。

「……」

劉備を見る瞳は周囲の温度を下げるんじゃないかと思う程、いっそ絶対零度と称した方が楽なくらいの冷たさを持っていた。

ピッ！　とひよこが驚いたような声を上げて劉備はガタガタと震え出す。

とりあえず事情を話せ、と問い質す視線に、劉備は顔面蒼白にしつつ答える。

「お冷やを運んでいたら、椅子に足を引っ掛けちゃって」

「その拍子に持っていたお冷やを月詠にぶっかけた、と」

「……はいぃ」

グスグスと嗚咽を漏らす劉備に短く一言。

「遺言だけは聞いといてやろう」

「斬首決定！？」

「冗談だ」

不慮の事故だったのだ。劉備に釘を打っていればともかく、今回は仕方ない。済んでしまったことを愚痴るつもりもなかった。

溜め息一つ着いて鳳仙は同じ卓の席に座る。

「亭主。約束通り賊は討伐した。ありったけの肉料理を持って来い」

月詠の安全が確認された時点で肉が最優先事項に移行する。

遠慮など欠片も無い。宿を潰す勢いで残酷な注文を亭主に叩き付けた。

「い、いや、ありったけというのは流石にな」

懐の広い亭主ですら口を引き攣らせる。

どもる亭主を意に介さず、鳳仙は何処までも残酷だった。

「ほう、酒まで飲み放題とは、亭主の懐の広さには感服する」

「いや、一言も言ってな――」

「――何？　甘味まで出してくれるだと。やはり亭主は他の連中とは格が違うな。是非とも頂かせてもらう」

「……ハイ。ワカリマシタ」

大粒の涙をダラダラ流して作業に取り掛かる亭主に「早くしろよ」と追い撃ちを掛ける。

「鬼畜だ……」

「……鬼畜ですね」

「遠慮する必要が何処にある。こっちは死線をくぐり抜けたんだ。――それで、あれが馬鹿共の騒いでいる『妖』か？」

対角線上の一番奥の卓に一人座る、黒い外套で全身を覆った人がこちらを見ていた。

劉備が頷き、口を開こうとしたと同時に外套を羽織る者は席を立ち、こちらへと歩いて来た。

僅かに覗く白い肌の奥に朱い眼が魔性の輝きを放っている。

鳳仙はその見覚えのある輝きに目を見開いた。

『俺がお前を必要としてやる』

過去に一度だけ邂逅したガリガリに痩せこけた同類の少年に向けて放った言葉が蘇る。

思わず立ち上がり、驚愕を孕んだ声で鳳仙は言った。

「お前……除庶か？」

除庶。そう呼ばれた者は唇に柔らかい笑みを浮かべた。

第十話　帰還（後書き）

除庶というオリキャラが登場。

おそらくこれ以降オリキャラは敵（一人もしくは二人くらい）しか出て来ません。

第十一話　徐庶（前書き）

徐庶の名前が間違っていたので修正しました。

第十一話　徐庶

徐庶。字は元直。

そう名乗って少年は外套の帽子だけを後ろに流して素顔をさらけ出す。

反抗期を象徴するような吊り気味の大きな瞳。引き締まった顔立ちは、しかし幼さの方が目立っている為、精悍と評価されるには後数年は必要だ。身長も鳳仙の胸元を越えるか越えないかの境界線にあり、全体的に見て小生意気な雰囲気だった。長い髪を肩甲骨辺りで一つに纏め、前髪は鳳仙と同じく瞳を隠せる程度に長い。

白い肌と中性的な顔立ちが相俟って、それらしい服装をすれば女の子にも見えなくはない。

こう言ったタイプの少年は大抵の女性の母性本能を擽り、突き回してからかわずにはいられない、

無性に可愛がってあげたくなるものだが、関羽はそんな気にはさらさらなれなかった。

元々、生粋の武人にそのような行いは羞恥と沸き上がる欲求を抑圧している凛々しい彼女が徐庶を見て最初に抱いた感情は『畏怖』である。

一瞬――本当に妖ではないかと疑ってしまった。

鳳仙と同じ、黒髪に朱目。

それはいいのだ。関羽は鳳仙とそれなりの仲を築き上げているから彼と同じ黒髪と朱目を差別的な眼差しで見るつもりはなかった。

問題は徐庶の瞳の奥にあるもの。

一先ず、鳳仙、月詠、徐庶、劉備、関羽、張飛の六人で卓を囲み、食べ放題となった次々運ばれて来る料理に舌鼓を打っているのだが、関羽はいまいち食欲が沸かなかった。

関羽の視線の先にある徐庶の朱目。

それは絶対零度の冷酷さを秘めて、鳳仙以外の存在を許容していなかった。今、彼の瞳には鳳仙以外の者など毛ほども入ってないに違いない。確信させるほどの冷たさを持っているのだ。

分かる気がする。

この乱れた時代、人の心が蝕まれていく無情な時代で民は心の憂さを更に弱い者へと向けた。

それが『妖』と蔑まれる朱目持ちの人種。生まれて来た瞬間から忌み子と呼ばれ、覚えのない罰を浴びせられているのだ。

同類――それも過去に邂逅したことのある鳳仙以外に温情の眼差しを向けるなんて不可能だろう。

絶対零度の瞳以外にも徐庶からは並々ならぬ異端な力を素肌で感じたのだが、関羽は言葉を飲み込んで、食事に気を向けようとした。

そんな時に肉を遠慮なく頬張る鳳仙が口の中を空にして、酒杯で唇を濡らしながら徐庶に話し掛けた。

「よく俺の居所が分かったな」

「はい。水鏡塾を出てから一度師の元に訪れて貴方の行方を聞きました」

年の割に落ち着いたアルトの声。そこには僅かな温かさが垣間見えた。

その温かさを見せるのは鳳仙だけだろう、関羽は直感的にそう思った。

「水鏡塾？」

「私塾ですよ。師は仙術しか教えてくれなかったので、ここ一年は水鏡塾で兵法や軍法、経済から民営、さらに地理を学んでいました」

「一年で学び切れるものなのか？」

「優秀ですから」

徐庶はサラッと平然と言ってのけた。確かに彼の澄ました態度からは高い知性を感じられる。高慢というより自信に溢れているのだ。

鳳仙はそんな徐庶を横目で見つつ喉の奥で短く笑った。

「あの時の子供が――ただの気まぐれで手を差し延べたに過ぎなかった子供が、随分と成長したもんだな」

「全ては貴方の傍に立つためです」

ハッキリと強い意思を込めた一点の濁りもない瞳を身体ごと鳳仙に向けた。言葉通り、己の人生、努力、命、力、知識、何もかもを鳳仙に捧げた誓いに似た言葉。

それは関羽が劉備に向けたものと同じだった。

鳳仙は酒杯を卓に置いて、そうか、と小さく頷く。

「なら、俺と一緒に行くか？」

「はい……！」

その言葉を何度も噛み締めるように徐庶は頷いた。表情の変化はあまりにも乏しくてはっきりと分からないが、そのたった一言が彼にとってどれだけの救いになったかは徐庶にしか分からない。

一区切り入れて、鳳仙は除庶に問う。

「徐庶――」

「吉良です。私の真名、吉良とお呼びください」

その前に鳳仙の言葉を遮った。

真名。信頼する者しかその名を呼ぶことを許されない神聖なる名前。例え真名を知っていようとも、本人から許される前にそれを呼んでしまえば斬られても仕方ない、そんな伝統がこの大陸にはあった。

「吉良だな。実践経験はあるか？」

（……鳳仙殿は真名を預けないのか？）

出会って間もないとは言え、二人の間には結束なる強い主従関係が生まれていることは目に見えて分かる。しかも敬語はいらん、と自分に述べたように鳳仙は人の上に立つことを嫌がるきらいがある。だから徐庶のことも対等の目線で見ているのだろう――しかし、鳳仙は自分の真名を明かさず、平淡な声で話を再開したのだ。

関羽は少し疑問を抱いたが、それを掻き消す返答を徐庶がする。

「はい。今日の戦いはあまりに無様だったので街で時間が過ぎるのを待っていたら賊が五人ほど侵入して来たので」

「殺ったのか？」

「人質を取っていましたが、私には何の障害にもなりませんでしたので」

「まさか人質もろとも殺したのか！？」

声を張り上げて卓を叩き、立ち上がったのは関羽だ。

徐庶の平淡な声が関羽に最悪の結末を想像させた。

『人質』『何の障害もない』

この二つを連結させる理由が、鳳仙や徐庶のような類には腐るほどあった。

しかし、だからと言って飲み込める内容でもないが。

徐庶が鬱陶しそうに眉根を寄せて嫌悪感たっぷりの横目を寄越して来て、関羽は激昂のあまり自身の槍を握りかけた。

だが、まだ除庶は『殺した』とは言ってない。一縷の希望が関羽の怒りに水をかけた。

そんな不穏な空気を劉備が慌てて仲裁に入る。

「お、落ち着いて、愛紗ちゃん！　徐庶君は人質さんを殺してはいないから！」

「殺して……『は』？」

妙な言い回しに関羽は聞き返す。

劉備は苦笑いしつつ、曖昧に語る。

「街に侵入して来た賊の人達が無茶苦茶な要求をして来て、でも人質を取られていたから誰も身動き取れなくて困り果てていたところに徐庶君が私と月詠ちゃんの近くにひょこっと現れたんだ。黒い外套で全身を隠していたから妙に目立っていたよ。それで、徐庶君は直立したまま数秒が経つと突然片手をバッて払ったんだ。そしたらいきなり鎌鼬が発生して賊の人達の首だけを跳ね飛ばしたんだ」

「それは……」

同情的な声で関羽が呟くと、同じ声色で劉備は言った。

「人質の人は若い女の子で、羽交い締めにされていたから跳ね飛ば

された首から上がった血が思い切り……」

ここから先は流石に口に出来なかった。

唯一の打開策だろうが、それは人質からするとあまりに恐すぎる。殺して『は』いないが間違いなく人質の少女に根強いトラウマを刻み付けたであろう。

「妖術……いや、先の言葉から察すると仙術か」

「師匠が本物の仙人だからな」

肉を再び食べ始め、皿が空になると鳳仙は「亭主、肉追加だ！」と厨房に立つ亭主の精神と胃を削りにかかった。それに便乗して張飛までもが「鈴々も追加なのだ！」と亭主の白髪を増やしにかかる。一種の嫌がらせに等しい行いに関羽と劉備は苦笑する。

「鳳仙殿の師でもあるのか？」

「俺には仙骨がなかったから吉良のように仙術は学ばなかったが、剣術と戦いの基礎は叩き込んでもらったな。何百年も生きている爺だから教え方や経験から来る戦闘技術は流石と言うべきだったか」

「折れた剣を見る限り、十二分に活かし切れてなさそうですが」

「否定はせん。むしろ身体に叩き込まれた以外はほぼ全て忘れてしまったな」

徐庶の鋭いツッコミを、しかし恥もなく切り返した。ついでに「勉強は苦手なんだ」と追記する。

仙人について、仙術について興味が無いと言えば嘘になるが、この無表情、無愛想主従が腹を割って話してくれるとは毛ほども思っていない。そのまま話が終着すると関羽は今まで一言も喋らなかった人物に視線を向けた。

その穢れなき神々しい雰囲気と煌めく羽衣を身に纏う女性へと。

「月詠殿……貴女はいったい」

問い掛けた関羽はもちろん、劉備に、そして徐庶まで気になっていた問題だった。

「やっぱりそうなるか」

と呟いた鳳仙の声は誰にも届かなかった。

第十二話　現実と理想（前書き）

私はシリアスよりギャグオンリーの話が好きです。

本編では、ワッと盛り上がるような笑いの無いこの作品……辛い。早く外伝を作れるまで話を進めたい。私はそこで暴走する。読了時間１００分を超えているのに公孫賛のところまで行かないとか展開遅。

第十二話　現実と理想

「……鳳仙様」

月詠が指示を仰ぐように鳳仙をまじまじ見る。

（せめて羽衣くらいは隠しておくべきだったか）

額に手を当てて鳳仙は溜め息を着く。

「……ごまかせはしないだろうな」

僅かな躊躇いの後に切り出した鳳仙は酒杯を一口してアルコールを取り込む。

箍を外せれば気は楽になるだろう、と淡い希望であったが意識はハッキリとしている。こんな時に限って酔いに強い自分が忌ま忌ましい。

「月詠は異界から来たらしい。外見や雰囲気から察すると、今、大陸で噂になっている『天の御遣い』だろうな。確定ではないが」

鳳仙が切り出したのは話の主導権を握るためだ。月詠に任せておくと何となく不安だった。

案の定、『天の御遣い』という単語に関羽と劉備が反応を見せる。

特に劉備は、もしかすると、という予想が確信に変わって目を輝かせている。

「まさか本当にいたとは……」

「やっぱり管輅ちゃんの言うことは当たっていたんだ！」

「……確かに別の世界から来ましたけど、私が『天の御遣い』だなんて理由にはなっていませんよ？」

劉備のテンションの高さにも動じず、平坦な声で別の可能性を示す。

「……私以外にも私のような存在がいるかもしれませんし」

「それでも、月詠ちゃんはこの国の人間じゃないんだよね？」

「……そうですが」

「だったら月詠ちゃんが『天の御遣い』ってことで確定だよ！　まだ『天の御遣い』が現れたって噂は何処にもないんだから、先にこっちが名乗っておけば、もう絶対！」

興奮して鼻を鳴らす劉備に月詠は曖昧な呻き声で目線ごと逸らした。

劉備の必死な様に鳳仙は胸中の不安を取り除くことが出来なかった。彼女の口にしそうな言葉があまりにも用意に想像出来てしまったのだ。

話を切り出した本人がずっと口を閉ざし、都合がよくなれば横槍を入れるのはあまりにも不躾である。気が気でないが、仕方なしと鳳仙は話を進める。

「劉備、アンタは何をそんなに興奮しているんだ？」

「だって『天の御遣い』だよ！　この乱世の大陸を平和にするために舞い降りた、愛の天使様なんだよ！」

「本気で信じているのか？」

異世界から来たからと言って『天の御遣い』と結び付けるのは早計だ。だが月詠の雰囲気や煌めく羽衣を見れば、否が応にも『天の御遣い』を思わせてしまう。口ではそう言いつつ鳳仙もそう確信めいているのだから。

呆れた声で問い掛けつつ目線をスライドさせる。関羽は半信半疑と言ったところだ。張飛もひたすら食事を続けていることを鑑みるといまいち信用してないように見える。吉良は既に興味を無くして我関せずの態勢に入っていた。

「信じているよ。月詠ちゃんが何よりの証拠だもん！」

何の根拠も無い、実に浮いた発言だが、その通りである以上、鳳仙は反論出来なかった。

「で、月詠の正体も分かったところでもういいだろ」

「ううん、お願いがあるの！　私達に月詠ちゃんの力を貸して欲しいの！」

予期し、避けたかった一言を劉備が発した。

劉備の視線が月詠に向いているのをいいことに深い溜め息を着く。

止めようとも思ったが、劉備の強い意思を宿した横顔を前に断念する。あくまで判断するのは月詠である。

劉備は月詠の手を握り、真っ直ぐと蒼穹の如く澄み渡る瞳を見据える。

「私達は弱い人達が傷付き、無念を抱いて倒れることに我慢出来なくて、少しでも力になれるのならって、そう思って今まで旅を続けていたの」

でも……と劉備は目を伏せて悲しげにかぶりを振る。

「三人だけじゃもう、何の力にもなれない。そんな時代になってきてる……」

「官匪の横行、太守の暴政……そして弱い人間が群れをなし、更に弱い人間を叩く。そういった負の連鎖が強大なうねりを帯びて、この大陸を覆っている」

「三人じゃ、もう何も出来なくなってるのだ……」

劉備の言葉に続いて関羽と張飛が悔しげに語る。

「……」

月詠は無言のまま、大した感情を見せない瞳で三人を見据えている。何を思っているのか、鳳仙にだって分からない。

鳳仙はやはり冷静だった。既に月詠に語ったことを繰り返しているだけの劉備達を突き放した気持ちで見ていた。

世界を憂いている。

ただそれだけ。

ただそれだけだが、それこそが彼女達と自分の間に決して分かり合えない確執を築き上げていた。

鳳仙にとって、おそらく吉良にとっても。

世界も民も正直どうでもいいのだ。

「でも、そんなことでくじけたくない。無力な私達にだって、何か出来ることはあるはず」

眩しくないと言えば嘘になるが、だからといって、なりたいとか協力したいなんて思わない。

他人事の事勿れ主義といった気持ちで、呆然と眺めていたその時に、

「――ありませんよ」

「……だから！」と顔を上げた劉備の懇願を遮る冷たい声が空間を支配した。水を打ったように静まり返った場の空気の温度は極限

まで冷たくなる。

吉良だ。

我関せずを決め込んでいた吉良が何もかもをぶち壊すように横槍を入れた。その絶対零度の声色の中には苛立ちが垣間見える。

一同の視線が集中すると、一拍置いて吉良は吐き捨てるように言う。

「たかだか三人で世界をどうにかするなんて不可能に決まっているじゃないですか。夢を見ているのですか？　それとも酔っているのですか？」

「だから『天の御遣い』である月詠ちゃんの力を借りて」

「『天の御遣い』。そんなものに頼らなければ救えないような世界なんてつくづく末期ですね。しかもこの世界に来たばかりの、人づてでしか世界の情勢を知らない赤子同然の者に縋り付く、利用するなんて。それとも、そう思っている貴女自身が末期なのでしょうか？」

空間が軋む。

吉良の中傷が到底許せるレベルでないのは目に見えて分かる。

関羽と張飛が各々の獲物を握り締めて吉良へ突き付けていた。仕えるべき主を侮辱されたのだから当然である。

しかし、吉良は冷めきっていた空気が怒りによって再燃しようと

も、槍を首元に突き付けられようが表情を変えることは無かった。

「これ以上桃香様を侮辱すれば……」

「許さないのだ」

腹の底から響く低い声は我慢の限界に近いことを示していた。あれだけ言われて限界を超えないのは賞賛に値する。

それでも吉良は続けた。

「思うだけで変われば苦労はしません。貴女は何をしましたか？人を助けたいのなら、太守や都尉になって治めればいい。しかし貴女はそれになるどころか各地をぶらぶら旅をしているだけ。何様ですか？」

「貴様！　黙れと言っている！」

「やめて、愛紗ちゃん！」

今にでも吉良の首を跳ね兼ねない関羽を劉備が叫び声を上げて制止させた。

「槍を降ろしてあげて、愛紗ちゃん。鈴々ちゃんも」

「しかし……」

「降ろして」

強く、しかし静かに劉備は言う。

ならば従う他ない。関羽は忌ま忌ましげに吉良を一睨みして槍を降ろし、座り直す。張飛もそれと似た行動をした。

数秒時間を置いて、静まり返った空気を改めて劉備が息吹を吹き込む。

「私達は力があるからって理不尽に弱い人達を苦しめる人が許せなくて、各地でいろんな人を助けていたの。県に所属しなかったのは、その周辺の人達しか助けることが出来ないから。

――私はこの大陸で苦しんでいる全ての人を助けたい！」

しかし、そんな強い願いでさえ、吉良は無情に切り捨てる。

「傲慢ですね。県に所属したとしても周辺の民全てを救うなんて不可能なのに、この大陸全土と大きく出るなんて……。貴女のような人間を、現実を見ない夢想家とか神になろうと思い上がった愚か者と言うのですよ」

「そんなことない！　きっと、きっと皆分かってくれる！」

「理解はしても内心誰もが現実を見ない夢想家と嘲っていますよ。言葉や思いだけで伝われば乱世なんて訪れません。伝わらないからこんな時代になっているのでしょう？　いい加減、現実を見ればいいかがですか？　貴女は目的を達したいのであれば、まず何処かの県に所属して地道に力を築き上げておくべきでした。そこで圧倒的な力を蓄えたのちに武力で反乱分子を排除して大陸を統一すれば良かったのですよ」

「そんな犠牲の上に成り立った平和は、きっと本当の平和なんかじゃない！　思いを伝え合って、譲り合って、分かり合う道だってあ

るはずだよ！」

吉良はきつく眉根を寄せた。

「それですよ。その別の道があるって現実を見ない考え方。それこそが争いを生む原因なんだって理解してはいかがですか？　一つの主張が新たな主義を生み、勢力を作り、元々いた勢力たちとの間に余計な対立関係を発生させる。融和を望めば、望まない勢力との間に強い確執を生んで混沌とさせる。どれだけの年月が経とうとも、それは変わらない。貴女のような無責任な理想主義が世を狂わせるのです」

「……っ」

劉備は言葉に詰まる。

悔しげに下唇を噛み締め、顔を俯かせる。膝元で握り締めた拳の振動が身体を震わせた。

何処までも現実を見る吉良と何処までも理想を掲げる劉備は何処までも平行線を辿るばかりである。

だが、現実とは地に足がしっかり着いたものであり、理想とは実現を目指す最高目標であってその言葉はふよふよと浮いて定まらない。

しかも今回は。

あまりに。あまりに、心ない、しかし正論でもあった吉良を説き伏せることは出来なかった。

正論にも、暴力にも見える無情な叩き付け方である。

だからこそ、言い返せない。

もしここで武力を持ち出せば吉良は嘲笑の元「結局、自分に不都合な相手は斬り捨てますか。やはり貴女に分かり合うなんて無理だったのですよ」とまさに劉備を完封させる。

それが分かっているからこそ、誰ももはや獲物を持ち出すことは不可能だった。

重く、長い沈黙が続く中、そんな空気を作り出した張本人は喋り過ぎた喉を潤すためにぬるま湯をのうのうと飲んでいた。

そんな時に、月詠が静かに、平坦な声で言った。

「……本当にそうでしょうか？」

それは劉備の途切れた言葉の続きを意味していた。

閉じていた吉良の瞳が開かれる。とことん舌戦に付き合いきると言わんばかりの炯眼である。

「……現実を見るのも確かに大事です。でも、現実を現実と認めるだけの存在なら、人はあらゆるものを諦めて、退廃的な生を続けた末に滅んでいます。現実も理想も見て、かつ理不尽と戦って、少しでも未来を掴み取ろうと前に進んで来たのが人間という生物でしょう。除庶さん。貴方は貴方だけの現実しか見ていないのではないですか？　現実なんて見る角度を変えるだけで変化しますよ」

「詭弁ですね。叶いもしない願いに縋り付くように、都合の良い解釈です。僅かな理想一つを含めばそれは現実とは言いません。どんな角度から見ても変わらないものを現実と言うのですよ。
確固たる現実を見ていれば的確な判断の元に、的確な道標を歩くことが出来ます。夢や理想なんて不確定要素の塊なんかを抱くから人は無駄に失って、無駄に生を終わらせていく。そんなものはいりません。初めから現実だけを見ていれば絶望を抱く必要なく生きていけるし、死んでいけるのですから」

「……楽しいですか？　そんな生き方をして」

「知りません。貴女たちのような生き方をしたことがなければ興味もありませんから」

「……では、なぜ劉備さんの理想にあそこまで反発したのですか？
興味がなければ聞き流していたはずです」

「甘やかされて育って来たような人が言う言葉に苛立っただけです。……劉備さん、でしたっけ？」　吉良は視線だけを劉備に向けた。

「貴女には分からない。貴女のような夢想家には、”現実を受け入れるしか無かった存在”の気持ちなんて分からない。分かっていれば、理想だけを見続ける人間になんてならない。
貴女には――最下層の人間……いえ、人間とさえ認めてもらえなかった『モノ』の心の痛みなんて分からない」

強く、強く、恨み辛みを孕んだ瞳で、劉備を睨み付ける。

「――貴女には、絶対に分からない……！」

第十二話　現実と理想（後書き）

この物語（第一部）は鳳仙と劉備の”人としての成長”をメインにしています。

原作の劉備軍は「勇気では負けない」とあまりに根性論やご都合主義に護られている気がしますから、そこを何とかしたい。と、なるとキーキャラは徐庶以外にいないのですが、難しいですね……。

第十三話　劉備（前書き）

崩壊する前座　Ｐａｒｔ１

月詠「……鳳仙様。本編でこの台詞を使ってください（紙を渡す）」

鳳仙「何だ唐突に。何……『認めたくないものだな。若さ故の過ちというものは』『月詠は強いな……。そういう月詠は好きだ』『月詠……俺を導いてくれ』『まだだ！　まだやられんよ！』

――――……」

月詠「……そして敵には『通常の三倍』『朱い彗星』が欲しいです」

ビリビリビリ！

月詠「……ナンテコッタイ」

鳳仙「壊れすぎだアンタ」

†

月詠「……私にはまだ三つの変身が残っています。この意味が分かりますね？」

鳳仙「馬鹿、冷静、天然だろう。分かったからとりあえず黙れ」

月詠「……（´Д`）」

※本編とは何の関係もありません。

第十三話　劉備

いつの間にか劉備は街を出ていた。

西門を超えてすぐ近くにある平らな岩に腰を降ろし、数時間前まで鳴り響く馬蹄の響きと兵士たちの雄叫びが蔓延する戦場があった方角をぼんやりと眺めている。

特に意味はない。

ただの気分転換のために夜風にあたるつもりだった。すぐ傍とはいえ街を出ていることに本人すらも驚いた。もし関羽に見付かろうものならお叱りを受けてしまうかもしれない。

だが、今の劉備にそれはどうでもよかった。

幽州の乾燥した冷たい風が、潤いを取り戻した髪を撫でる。厳寒を超えた春風のように優しく撫でてはくれない。それはまるで現実のように劉備を打ち付ける。

「――はぁ」

もう何度目になるか分からない溜め息を天に向かって吐いた。憂い帯びた瞳とは対照的に夜空は満天の星の輝きを大地に向けて降り注いでいる。

頭に反響するのは徐庶の辛辣な言葉。

最初から最後まで、何もかもが耳を塞ぎたくなるくらい遠慮の無い言葉の暴力。

暴力と言う名の――正論と現実。

それは劉備の胸を深くえぐった。

関羽や張飛は「気にしなくていい」と言ったが、果たしてそれは本当だろうか？

劉備とてかつては盧植という学者の門下で文を修め、将来を嘱望された大いなる可能性を秘めている。その情に流されやすい性格が災いとなって大抵の人間からはただの乳臭い小娘と思われがちだが、文官や官吏になれるくらい有能な力を確かに持っているのだ。

その力を使って考える。

理想と現実。

決して交わることの無い平行線。

しかし、それは平等に見た場合であって人一人の価値観から来る理想と現実の線は平行ではない。

傾いていたり、長さが違っていたり。

主観的に見ても客観的に見てもそれは当然なのだ。

実は劉備と徐庶は確かに全く違うのだが、しかし似てもいる。

劉備にとっての理想と徐庶にとっての現実の『線』その長さは全く言っていいほどに同じである。

理想史上主義の劉備。

現実史上主義の徐庶。

まさに対極と呼べる存在だ。

ならば、その対極からの言葉はゆっくりでもいいから咀嚼して取り込んでおくべきではないだろうか？

徐庶は否定したが、月詠の「現実なんて見る角度を変えるだけで変化する」という言葉は事実だと劉備は思う。

劉備だって理想だけを見続けたわけではない。理想史上主義と言われても仕方ないが、理想一つで生きて来たならば思いを馳せるだけで人は満足するものだ。彼女は理想が勝ち過ぎているが、現実を見てこそ組み上げた理想である。

誰しもが笑顔で過ごせる平和な国にしたい。

彼女の知る現実から組み上げた、もはや彼女の存在意義と言っても過言ではないまでに成長した理想。

それが劉備の、劉備だけの理想。

だがやはり徐庶は巧みな舌戦にて彼女の理想を完封して見せるだろう。徐庶にはそれだけの過酷な現実を知っている。

彼女の目指す理想には当然、徐庶だって含まれている。心がえぐられるくらい罵られたとしても――だからといって理想を曲げたり、優しくしたりなんて出来るわけがない。

そのていどの弱い理想なら関羽や張飛が付いて来るわけがない。

二人のように武の才を持たない彼女。

そんな彼女が出来る役割。

彼女にしか出来ない役割。

考えて、考えて、考え抜いて出した結論は――

「俺達のことを教えてほしい？」

鳳仙は虚を突かれた表情で、部屋に入って来るなりそんなことを口走った劉備を見詰めた。食堂から拝借した酒を口に運ぼうとした矢先のこと。

酒杯に入れられた酒が波打つ。

同室の月詠も、連れを携えず一人現れた劉備にキョトン顔を見せ

た。

が、その言葉を聞いて目の色が変わった。

劉備の指し示す言葉の意味は――すなわち鳳仙の過去を知りたいとのこと。朱目ゆえに『妖』と呼ばれ、蔑まれた弱き日のことを語れということ。

劉備は出会ってたった一日しか経っていない男の過去に触れようと言うのだ。何と図々しく馴れ馴れしいのだろうか。

軽はずみの言動で許されるレベルではない。

だが――劉備の瞳が軽薄な要素を鱗片も見せない強い意思を宿していた。

嫌悪されるかもしれない。

嘲笑されるかもしれない。

罵られるかもしれない。

暴言を吐かれるかもしれない。

殴られたり、斬られたりするかもしれない。

実際、それだけの言動をしたし、鳳仙も敵として認識した者なら老若男女遠慮なく斬り捨てる冷酷さを持っている。

壁に立て掛けてある槍で首を跳ね飛ばされる可能性も充分視野に

入れて、それでも劉備は答えを求めて、訪れたのだ。

コクリと頷いた劉備は理想を語った時と同じ瞳で述べる。

「自分がどれだけ浅ましいことを口走っているのかは分かってる。鳳仙くんや徐庶くんに斬られたって文句言えない酷いことを言ったって思ってる。

私ね、徐庶くんに自分の理想をキッパリと否定されて考えたんだ。

――私には愛紗ちゃんや鈴々ちゃんのように戦う力なんて持っていない。それでも私に出来ることはないかって。やっぱり出た答えは私の理想――誰しもが笑顔で暮らせるような平和な国を作ること、それだった。

そして、どうすればいいのかも考えた。思うだけじゃない。どうすれば、この理想を現実に出来るかどうかを考えた」

理想と現実の間にある深い狭間。

どうすればこの紆余曲折した境界線を取り除けるのだろう。

果たしてそんなことが可能性なのだろうか。

鳳仙は強面の男すら尻尾を巻いて逃げ出しそうなくらいの朱き炯眼を劉備に向ける。

まるで本物の『妖』の如く炯眼を。

劉備は思わず目を見開いて言葉を失った。全身が粟立ち、今にも崩れ落ちそうに足を震わせている。

――これは試練なのだと劉備は即座に気付く。

『もし本気で聞き出したいのであればこれくらい耐え抜いてみせろ』と鳳仙の瞳が語っているように見えた。

目を逸らせば終わりだ。

逃げ出してしまえば理想は幻想へと変わり果てる。

それはもう劉備にとって死と同じである。

震える身体に鞭を打って立て直した劉備は一つ呼吸をして荒立つ心を静めた。

そして続ける。

自分の理想。

そのための現実を。

「まずは知ることだと思うの。徐庶くんは言ったよね。『人として認めてもらえなかったモノの心の痛みなんて貴女には分からない』って。

確かに私は理解出来ないかもしれない。痛みを想像だけで決して理解出来ないものなのかもしれない。

――でも、だからって歩み寄ろうとする努力を諦めるのは、理想だけじゃない、現実さえも投げ捨てて逃げるってことだと思う。

私は、そんなことはしたくない。だから知りたい。色んな人の現実と傷を。皆と歩み寄るための糧として支えとして、不安定な未来を掴むために。

――だから私に、希望をください」

劉備は深く頭を下げた。

身体を押し潰さんばかりに降り懸かっていた重圧が――消えた。

（意外……だったな）

瞳に宿る鋭利な光を引っ込めて、鳳仙は劉備を精神的重圧から解き放つ。

手にしていた酒杯を空にして気持ちを切り替えてから、改めて、深々と頭を下げる劉備を見据える。

徐庶の暴力的な発言に怒りを返さず、むしろ取り込んで前に進もうとしている彼女の言葉は心がこもっており、その瞳は強い意志を持って澄み切っていた。

これが彼女の――劉備の元々持つ気質だろうか。

柔和な思考は徐庶の言葉をスポンジのように吸い取り、無駄なく自身の力に変換していた。

そして今は鳳仙から、朱目を持つ人間が蔑まれる歴史を取り込もうとしている。

彼女は自分が良いと思えることをやっている。

理想を現実という紐で結び付けた。

そうしなければ前に進めないことを知ったのだ。

理想という、手元から離れた風船のようにふよふよ浮かぶ不確かなものを結び付けるための紐を手に入れようとしている。

その理想という名の風船はあまりにも大きすぎて紐一本では支えられないだろう。なら紐を増やせばいい。

自分の持つ紐だけではなく、他者の持つ紐もその風船に繋げてもらえばいい。

他者と願いを共有し、その輪を広げて皆の紐で風船を繋ぎ止めればいい。

歩み寄ろうとする努力とは、このことだろう。

強い。

鳳仙は単純にそう思った。

世捨て人を自称する自分には一生手に入れることの出来ない心の強さだ。

（あの二人が慕うのも納得だ。徐庶との出会いは――まさに良薬口に苦しと言ったところか）

急激な成長を見せた劉備は確固たる自分を築き上げつつある。

だが、徐庶との出会いはまだまだ序の口だ。

これから彼女はたくさんの出会いを重ねて、試行錯誤を幾重にもして成長し続けるだろう。

ふむ、と鳳仙は髪をかき上げて朱目を赤裸々にする。横目でチラッと月詠を一瞥すると彼女も興味があるようだった。

(別に過去を引きずってるわけでもないし語ったっていいんだが……。と言うか語るほど長いものでもないだろ。大体は吉良が言ってくれたんだしな)

ま、なるようになるか。と決断より投げやり的に鳳仙は思考を放棄した。

第十四話　劉備　2（前書き）

今回は特に短いです。そのまま前回の続きを引き継いでるし、結合するべきだったかな。

第十四話　劉備　2

「過去を語るというか、一般的に朱目の者がどんな扱いを受けているか、それで構わんか？」

「――うん！　ありがと、鳳仙くん！」

劉備は喜色満面の表情を浮かべた。

まずは一歩。

そう言ったところか。

鳳仙は空の酒杯に新たに酒を注ぎ込み、酒杯を弄びながら他人事のような声色で語る。

「まず――実の親に捨てられる」

初っ端から重い言動を飛ばした鳳仙は二人の反応を楽しみながら、視線を踊らせる。

驚愕――しかし鳳仙たちにとってそれが当たり前だと幼き頃に認識しているため、むしろ親子が共にいることに首を傾げたものだった。

「中には禁忌の存在を生み出した元凶として親を殺されたやつもいるらしい。まあ、いたとしても実の親なんて子供に向ける愛情が無

ければどうでもいい存在だから俺たちは気にしないんだがな」

事実だ。物心着いた頃、既に親という存在がいなかった鳳仙は実の親なんてこれっぽっちも興味が沸かなかった。

「気にする余裕が無かった――とも言うがな」

嘲笑するように喉の奥でクッと笑い、歪な笑みを浮かべた。

その時の表情は盗賊すら逃げ出しそうなほど凶悪な顔付きをしていたと月詠と劉備は後に語る。

「物心が着いて二、三年もすれば、俺たちは既に奴隷のように働かされていた。一日一食。乾パンと水一杯だけ。足りないなら自給自足って言われ山菜採りに赴く。

あの時は何の疑問にも抱かなかったが、今思い返せば腸が煮え繰り返るな。山菜採りから帰ると『何処行ってやがった化け物』と殴られ、蹴られ、唾を吐かれ、おまけに採った山菜を踏み潰されたり目の前で食われたりした。それからは夜、寝静まった後に山菜採りに行っていた」

その男の顔は覚えていない。だがあの歪に吊り上がった唇だけはハッキリと覚えている。

「夜だけが救いだったな。朝昼は駄目だ。村のあらゆる人間が仕事の邪魔をして暴力行為に及んで来る。子供だろうが関係無い。あいつらにとって俺たちは同じ人間じゃない、災いを齎すだけの『妖』なんだからな」

ちなみに、と鳳仙は補足を入れる。

「男だったのも救いだった。女だったら凌辱や輪姦なんて当たり前だし、助けを求める権利すらないからな」

助けてくれる者なんて何処にもいない。

救いを求める声でさえ許してくれない。

朱目同士だからといって仲間意識があるわけでもなく、仕方ないことだと諦観して素通りする。

鳳仙もそうである。一度だけ犯されていた朱目の少女を見付けたが、他人事のようにあっさりと見捨てた。その時は力が無かったこともあるし、何より『朱目のモノに人権は無い』という洗脳に近い刷り込みを受けていたからどうしようもなかった。

吉良が鳳仙と行動を共にすることを願ったのは、鳳仙が朱目だったからではない。彼が初めて吉良に手を差し延べたからだ。

「そんな生活を続けていれば希望や理想なんて抱けなくなる。どうして期待出来る？　国の基盤である『民』から謂われない迫害を受けているこの現実の中で、一体どうすれば夢を抱ける？俺たちにとって賊も民も何も変わらない。自身より弱いモノに力を振りかざす、どっちも自制心の利かない我欲を満たすためだけに行動するケダモノだよ」

そう吐き捨てる。

この言葉がどれだけ劉備を揺らしたのか、鳳仙には分からないし分かるつもりもなかった。

劉備がどれだけ素晴らしい決意をしても、鳳仙はそれに共感することも希望を抱くことも無いのだから。

やはり――所詮は他人事。

自分たちを蔑み続ける国や民の行方なんてどうでもいい。

憎しみさえも超越してそれはもう無関心であった。

「これがアンタの護ろうとしているものの本性だ、劉備。連中は賊と何も変わらない」

卓に肘を置いて頬杖を着いて劉備を見据える。

「それでもアンタはその大層な理想を掲げられるか？」

真剣に聴き入っていた劉備の感情を探るように、鳳仙は泰然とした視線を向けた。

「吉良のあれは、もはや意地みたいなもんだが、アンタか吉良、どっちを支持すると問われれば俺は吉良を支持するぞ」

理想と現実。

朱目の人間が支持するものなんて現実意外に何もない。それを見る権利すらも幼少時代に奪われたのだから。

劉備が国の王となり、朱目への偏見と差別を徹底的に許さない体制を取ったとしても、大人となった鳳仙たちにはどうでもいいこと

だった。

不意に劉備はソッと目を閉じた。

目を逸らしたのではなく、自分の頭で整理して答えを模索しているのだとすぐに分かった鳳仙は酒を飲む。

数分後、劉備は目を開けた。

「徐庶くんに現実っていう意地があるように、私にだって理想っていう意地がある。

だから私は、私の役割を果たしたい――ううん、果たす。果たしてみせる。

誰しもが笑顔でいられる平和な国を作りたい。

これは私という存在であり続けられるたった一つの真実だから。

誰になんて言われようと曲げてはいけない――無くしてはいけないもの」

劉備は目を閉じて、愛おしく自身の胸に手を当てた。

「徐庶くんの話も聞いた。鳳仙くんの話も聞いた。私がどれだけ甘い考えを持っているのかも知った」

それでも――と劉備は初めて絶対の自信を宿した口調でハッキリと述べる。

「私は私の生き方を変えるつもりはない――そう、確信した」

第十五話　月詠の依頼（前書き）

付け足しました。

第十五話　月詠の依頼

早朝。宛がわれた部屋で早々に鳳仙は窮地に立たされていた。

「どういうことだ、鳳仙殿」

関羽の非難を孕んだ視線を真っ直ぐに受けて鳳仙は肩を竦めた。

予想通りの反応だなと言わんばかりの笑みを浮かべて溜め息を着く。

「どう――とは？」

「聞かずとも分かるでしょう！？」

感情のまま関羽は卓を強く叩いて立ち上がる。

よほど納得のいかないことがあったのか怒り狂った彼女は怪獣のようにガーッと口から火を吐かん勢いだ。

その恐ろしい剣幕を歯牙にもかけず鳳仙は平然と述べる。

「依頼だから仕方ないだろ」

「依頼とは誰からだ！？」

「ん」

顎で麻布の敷かれた寝所を指す。

関羽の怒りを鳳仙と同じくまるで意に介さずにすやすやと眠る月詠の姿があった。

関羽の眉間に新たに皺が刻まれる。

自分が憤然としているにも関わらずその空間にいる人物全てが素知らぬ顔でいられるのは確かに腹立たしい光景だろう。しかも生真面目かつ武人の誇りを持つ彼女なら堪忍袋の緒が切れても仕方ない。

「まあ落ち着け。胃に穴が空いて、髪が抜け落ちるぞ」

「誰のせいだ！」

「張飛だろ？」

「どうして鈴々が出て来た！？」

「常日頃から『しょ～く！　しょ～く！　しょ～く！　しょ～く！　食なのだー！！』って叫んでいそうだからな。アンタに鬱憤が堪っていそうなんだが……」

「確かにそうだとも！　だが今は鈴々は関係ない！」

「だとさ、月詠。何か心当たりでもあるか？」

「……いえ、まるでありませんね」

「いつの間に起きた！？」

気が付けば、先程まで麻布で寝ていた月詠が身体を起こしていた。

二人して頭に疑問符を浮かべて顔を見合わせる。

アイコンタクトだった。

一瞬で視線の会話をこなした馬鹿二人は神妙な顔付きになる。

「……冤罪事件ですね、これは」

「まさか関羽が俺たちを罠に嵌めようなどとは」

悲しげにかぶりを振って二人は俯いた。あの誇り高き関雲長がまさかこんな卑劣な罠を仕掛けようとは――と。

「……」

「……鳳仙様。関羽さんの顔がとても表現出来ないくらいに歪んでいます」

「ああ。それはおそらく原因が俺たちにあるというのに素知らぬ顔でからかっているからだろう――」

な。で終わる直前に閃光が走った。

風を切って唸りを上げる白刃の光は音速に勝るとも劣らない速度で鳳仙を襲撃した。

――ガキィン！

龍の顎（アギト）が閉じられる。

部屋を揺るがす波動が走り、木造のあらゆる作り物が軋みを上げた。闘気と殺気が波動と共に細かい破片となって外へ散らばる。

間一髪のところで鳳仙が腰に差していた剣を引き抜いて関羽の槍を受け止めていた。一瞬でも遅れていれば五体満足ではいられないことは間違いなかった。

渾身の力で振り下ろし、渾身の力で受け止めた二人は鍔迫り合いとなった。拳一つ分まで顔が接近する。

「原因が自分たちにあったと気付いていたなら早々と申し出てほしかったものだな……！」

「いやなに。日常に感情の起伏が殆ど無く、人との係わり合いも皆無に近い俺たちにとってアンタみたいな存在は珍しくて遂――な」

「そうかそうか。では私もついつい貴殿を斬ってしまいそうだが仕方あるまいな……！」

関羽の槍が鳳仙に迫る。

体格的に鳳仙が圧倒的に恵まれているとは言え、体勢が悪い。椅子に腰掛けたまま剣を抜いたものだから足腰を使えないのだ。

対する関羽は元々立ち上がっていたことが功を奏して、渾身の一撃は全体重が乗っていた。しかも相手が不自由なこともあって体勢の変化は取りやすい。

じりじりと鍔迫り合いの膠着が終わりを見せようとしていると、関羽は目を丸くして力を僅かに緩めて槍の進行を止めた。

「その剣はどうしたのだ？　昨日まで折れていたではないか」

鳳仙が手にしていたのは賊から奪った槍ではなく、腰に差していた折れたはずの剣だった。それも刀身は生まれ変わったかのように純度の高い白銀の産声を上げている。

「それも含めて話すからとりあえず剣を引いてくれないか。さっきのはすまんかった」

「……」

逡巡して関羽はゆっくりと槍を引いた。

また数秒時間を置いて怒気を散らした後、本題に入った。

「では聞かせていただこう。あの徐庶まで加えて我らの戦列に加わろうと思った経緯を」

それは昨日の夜。劉備が部屋から去ってのことである。

寝る時間にはまだ早く、再び鳳仙は亭主から強盗のように掻っ攫った酒を飲んでいた。卓上には酔っ払いよろしく乱雑に空き瓶が放置されている。

ようやく酔いが回って来た鳳仙の勢いは更に増していく。物足りなければまた亭主から相伴（無理矢理）すればいい。普段の図々しさと酔いが混ざり合って何乗もの強引さを生み出していた。

顔にほんのりと赤みが差してきた頃に月詠が口を開いた。

「……鳳仙様。劉備さんたちと一緒に行きませんか？」

「――――……ん？」

唐突に口を開いたことも相まって酔った鳳仙の耳にはいまいち届かなかった。　ゆっくりと椅子ごと反転させて寝所に腰を掛けた月詠と視線を合わせる。

「すまん。聞き取れなかった。もう一度言ってくれ」

「……劉備さんたちと一緒に行きませんか？」

そう深刻な話ではないだろうと高を括って酒杯を口に運ぼうとした手が止まった。

鈍くなった頭で何度も咀嚼して数秒。

月詠の言ったことを理解すると鳳仙は訝しげに眉根を寄せた。

「――本気か？」

「……お嫌ですか？」

「嫌というか、理由がないな」

そう言って結局酒杯を唇へ持って行く。

「劉備の理想も考え方も大したものだとは思う。吉良だけじゃない、誰からも夢想家と嘲笑されても可笑しくないことを実現しようとしているんだからな」

先の語らいから彼女の決意が如何に強いかを知った。無益な負の連鎖が人を食い潰し、弱者に向かってはけ口を求める世の摂理を歎き、立ち上がった少女の想い。理想こそが我が存在意義と言い放った強靭で優しい願い。

鳳仙も確かに理解した。

彼女の求めるモノを。

理解”は”した。

だが――。

「『だからどうした？』と言うのが本音だな。理解はしたが共感してはいない。この世を憂いている時点で既に俺と共感するなんて不可能なんだ。世を変えたいなんて思わないし、まず興味がない」

鳳仙は朱目のことを話した。

しかしそれは既にどうでもいい過去として記憶に存在しているだけであって本音を言えば劉備を試す真似をせずとも彼は過去を話してもよかった。

劉備へ向けた炯眼は酒のツマミと言ってもいい。要するからかい半分だったのだ。

朝、月詠に零度の激昂を見せたのは、何もかもを見通したような真理の発言をしたからだ。あの時はただの知ったかぶりに思えて苛立ったのだが、よくよく考えてみれば月詠は本当に見通しているのかもしれない。冷静になって考えれば考えるほどに結論はそこに落ち着く。

劉備の決意を秘めた言葉を聞いている時、鳳仙は共感してないと言った通り、突き放した気持ちで見ていた。嘲笑って、ではない。単純に決して埋まることのない溝がお互いの間にあることを再認識したからだ。

「だから傭兵なんだ。仕えるべき主なんて求めない、金を間に挟んで初めて一時的な主従関係を生ませる傭兵を選んだんだ」

どうでもいいんだよ、世界も平和も人の命も、と呟いて新しい空き瓶を卓上に置いた。

「もう全部飲んだのか」

亭主からもらいに行こうか、と身体浮かしたが思うように身体が動かず止めた。お代わりを諦めて卓上に突っ伏す。

このまま寝てしまおうか。

疲労もある。睡魔もある。いつでも寝る準備は万端であり鳳仙は、月詠にもう一度顔を向ける。

「月詠。もう寝る――」

「……なら、私が鳳仙様を雇います」

「は？」

何がどうなればそんな結論に辿り着いたのか、頭を逆さにしたってそんな結論は出て来ない。

理解不能の発言に鳳仙は目を丸くした。

「……私が鳳仙様の依頼人となればよろしいのですよね？」

「確かにそうだが、そんな金が何処にある？　内容によっては破格の報酬が必要になるぞ」

「……では、これでどうでしょう」

月詠は寝所から立ち上がって静かに鳳仙へと歩み寄る。

そして腰に差してある折れた剣を引き抜いて、柄と刀身に手に乗せた。

「……」

そっと目を閉じて数秒後。

カッ――！

「！？」

突如、神聖なる光が月詠の身体から放出された。

白銀色にゆらめく霊気は透き通るように穏やかな舞いを見せるかの如く踊る。

鳳仙は酔いが一気に冷め、呆然と神聖な光を見つめていた。何度も唾を飲み込み、掠れた声で呟く。

「これが月詠の……。天の御遣いの力か……？」

まさに希望の象徴。人々が神を見出だすに相応しい能力を携えた天女。

誰しもが反論できない圧倒的な存在感が霊気となって溢れている。

光が剣へと集束する。

するとどうだろう。折れたはずの刀身は、蕾が開花するかのように元の形を取り戻した。

「……」

声など出るわけがなかった。

「……これが報酬です」

呆然とする鳳仙を現実に引き戻し、月詠は復元した剣を返す。

「……既に報酬は支払わせていただきました」

「アンタ――」

何と強引な依頼だ。正式な手続きを踏まず、一方的に、それも鳳仙がもっとも望んでいた報酬を提示し有無を言わさず先に支払ったのだから。

しかも破損物を修理されたのだから、頂いた物品や資金のように突き返すことは出来ない。再び刀身を折ってリセット――それも無効だ。

鳳仙は月詠という人間を侮っていた。

巫女として奉り上げられて、確固たる自身を築けていない無垢な少女、と認識していた。

月詠もそれを知っていた。しかし敢えて言わなかったのは、この世界の『天の御遣い』としての役割を考えていたからだ。

鳳仙たちが賊の討伐に赴いている際、鳳仙が願った通り自分なりに考えて何をすればいいかぼんやりとしながらも模索していた。

そして劉備の話を聞いて、惹かれた。

彼女の願いに巫女として生を受けた月詠が惹かれないはずがなか

った。

だが鳳仙は違う。それも薄々理解していた。

だから傭兵であることを逆手に取ったのだ。

切り札と呼べるカードを切って、鳳仙から選択肢を奪った。

「――面白いな」

鳳仙は口の端を吊り上げて不敵に笑った。

月詠がまさかこのような手段を用いてこようとは露にも思わず、俗世の人間らしい行動は寧ろ鳳仙に好印象を齎せた。

自惚れではなく事実として月詠には鳳仙しか頼れる相手がいない。しかし彼女の意思は鳳仙とは真逆の位置にあり、突き通すつもりなら袂を分かつしかない。だが、それを良しとしなかった月詠が起こした行動はまさに人間らしさが現れていた。

例えるなら、好いた男を何かと理由を付けて傍に置いておく不安げな女のよう。

まだ鱗片――しかし確実に変化を見せつつある月詠の姿が内心嬉しかった鳳仙が選択肢を奪われた程度で怒りを上げるわけがなかった。

「依頼内容は何だ？　まあ、これだけの報酬を貰ったんだから大抵のもんは引き受けないといかんのだが」

柄を握る。久しぶりに手にしっくりと来る剣の感覚に酔いしれる

ように鳳仙は感動した。

槍より重い、鳳仙にとって丁度心地好い重量感。

リーチや連撃、刺突力に特化したこの大陸で主体となっている槍より、特筆すべき点が無ければ弱点も無いバランスの取れた、人を斬る為だけに生まれた剣。

窓から降り注ぐ日輪の輝きを受けて神々しい光を反射する刀身は以前より切れ味が増しているように思えて仕方ない。

闘争心が身体中を駆け巡り、沸き上がる高揚感に瞳が怪しげな色に染まった。

端から見れば、剣をうっとり眺めているただの怪しい奴でしかない。

ひとしきり堪能したところで満足げな息を吐くと、ただ無表情で眺めていた月詠が口を開いた。

「……もう、よろしいでしょうか？」

「お、ああ。すまん」

恥態を曝してしまった鳳仙は若干頬を赤くして剣を腰に差して、咳一つして改めて月詠と向き合う。

「依頼内容だったな。だが俺と吉良だけで出来ることなど数える程度しかないぞ」

無口、無愛想、無表情、不器用、皮肉屋。

二人とも揃いもそろって社会の歯車では生きていけないポンコツ野郎である。

鳳仙は多少の処世術を持っているものの戦う以外のことは人並み以下。徐庶は知能は高くとも鳳仙以外の為に生かすつもりはない。

大陸に平和が訪れるとこの二人は職を失って飢餓で倒れてしまいそうだ。だとすればこの乱世は鳳仙たちにとって永らくあってほしい時代である可能性は拭えない。

「そんな俺たちに何を望む」

「……鳳仙様たちには私と一緒に戦ってほしいのです。私には貴方が必要ですから」

「そういうことだとは思っていたが……。アンタはいいのか？　天の御遣いであることを露見して都合の良い道具として扱われても」

「……鳳仙様はどうですか？」

顔を顰め、煮詰まった鳳仙は顔を伏せて言う。

「――俺としては、そうなってほしくない」

だから外套を着せて姿を隠していた。

ただの一人の人間として人間らしい生き方と感情を知り、芽生えさせてあげたかった。

「だが俺は傭兵で今のアンタは依頼人だ。口契約だが契約は契約だ。主従関係が結ばれた以上、俺はアンタの進む方向に口出しはしない」

お互い何か思うことがあって強く結ばれていた関係が、一時的な主従関係という薄っぺらいものへ書き換えられてしまった。

そうなった以上、鳳仙は彼女の方針に一切の口出しはしない。

雇われた。

ゆえに一切の私情は消して彼女の命に従う。

敬語は使わないが。

第十六話　無関心（前書き）

次回からようやく公孫賛のところへ向かう話に突入出来る。長かった……。

第十六話　無関心

「――こんな感じだったか？」

簡易な説明を終えた鳳仙は自身の本音を暴露したこともあって関羽の反応を伺う。

『だからどうした？』

劉備たちの理想を理解しても共感はしなかった、出来なかった鳳仙の切り捨て方は当人から見れば馬鹿にされているようで、到底許されるものではない。

案の定、関羽は眉間に皺を寄せて鳳仙を睨み付けている。噴火まで後二、三分といった面持ちだ。

「貴方は我らの理想には共感出来ず、徐庶と同じく内心愚弄していた――ということか？」

返答次第では今度こそ斬り伏せる。憤怒を宿した瞳が雄弁に語っていた。

「愚弄してはいない。ただ無関心なだけだ」

「ならば貴方は何だったら惹かれると言う？　金か！？　権力か！？　名誉か！？　――いいや、違う。そんな私欲に塗れた男が戦場に飛び込んで来たりはしない！　ならば貴方は一体何を望んでいる

というのだ！？」

怒りの中に冷静さが残っていた関羽は自らの言葉を否定し、その答えを問い掛けた。

思い返すのは昨夜の誓い。

戦いの中でしか生きられない愚者とも呼べる不器用な存在が、たった一度の戦場で築き上げた絆。それは端から見れば間違いなく歪みから生じた縁と言えるが、あの時の鳳仙と関羽は確かに共感していた。

武人として生きる生粋の戦士二人が約束した――いつか戦おう、と。

その日の為にお互い切磋琢磨しようと決意した昨夜の誓いを一縷の希望に関羽は叫んだ。

その共感すらも偽りだったのか、とばかりに。

「……」

鳳仙は、肩で息をする関羽から視線を外して答えを模索するように数秒の間を置いた。

「望みなどないさ」

「え？」

「こんな世界に望みなんて抱いていない。関羽。アンタは自分が朱

目だったとしても劉備に着いて行ける自信はあるか？」

「あるに決まっているではないか！」

自信たっぷりに胸まで張って深く頷いた。

関羽の劉備に向ける忠誠心は本物だ。

例え立場や身分が変わることになろうとも失われない繋がりこそが真の忠誠心と言えよう。鳳仙の問い掛けに詰まる程度では『所詮』で片付けられる安っぽい忠誠心だ。

仕えるべき主に永遠の忠誠を誓う彼女は誰もが敬う誉れ高い武人として名を馳せるだろう。

関羽の迷い無き発言をこれでもか、と言うほどに間近で聞いた鳳仙は僅かに口角を吊り上げて薄く笑った。

「そうか。そうだったな。すまん、愚考だった」

だが――と鳳仙は続ける。

「俺にはそれがない。忠誠心も望みも、抱いていない。だから知能の理解は出来ても本能の共感は無理なんだよ」

薄い笑みは自嘲だった。この世に生を受けた瞬間から運命とばかりに、決め付けられた定めに希望を奪われ、未来を閉ざされた――自ら閉ざした、とも言う――自分があまりにも無様で仕方なかった。

「生きる意味や目的は無い。いや、あるか？　武人唯一の存在意義

である戦いというものが」

だがそれ以外は何もない。ただ漠然と、何と無く生きている。意味も無く、することも無く、成すべきことも無く、使命も無く、希望も無く、未来という翼も妖の証と罵られる『朱目』がもぎ取ってしまった。

僻んでいるつもりはない。

そんな人間なんてこの世にそれなりに生息しているし、『輝かしい未来』なんてお綺麗なものはこれからの未来に訪れることのない事実だし、鳳仙も既にそれを知っている。劉備のように理想を掲げて自ら掴もうとすることもしない。

唯一の娯楽であり矜持でもある戦いを生かせる傭兵はまさに天職と言えよう。

「納得出来なければ月詠からの申し出を断ればいい。そうしたらアンタたちは『天の御遣い』を手放すことになるが俺も吉良とも共に行動しなくて済むぞ」

それがどういう意味か分かっている関羽は悔しげに呻いた。

『天の御遣い』は革命の切り札だ。

人を集めて彼女の力を見せようものなら奇跡を齎す神の遣いとして呆気なく人心掌握が可能だ。そこから国を築き上げるなんて造作もないくらいに。月詠はそれほどのカードなのだ。

手放す理由が何処にある？

思想はどうであれ、意見の食い違いがどうであれ、鳳仙と徐庶の力も魅力的だ。

関羽に匹敵する武を持つ鳳仙と、仙術を媒体に己が意志をこの世界に風として具象化することの出来る徐庶。

『天の御遣い』の他のおまけ的なセットですら喉から手が出るくらい豪華な品と言えよう。

加えて関羽たちには現在、何もない。

地位も名誉も実績も戦力も兵士も拠点も民も信頼もしっかり見据える道さえも具体化出来ていない。

えり好みしている余裕などあるはずがない。

関羽が本当に、理想を現実にしたいと願うのなら彼女に選択権は存在していない。

居心地の悪い空気が蔓延しつつ、会話は終わりを迎えたのだった。

第十七話　酒場大騒動（前書き）

メンマに反応する女が一人。

ええ、彼女しかいません。そしてタイトルから察するように……。

第十七話　酒場大騒動

月詠は、神殿で幽閉されるように生きて来た以上、必然的に人との接し合いを育むことが出来ずコミュニケーション能力はほぼ壊滅的にある。受け答えすることはできても自分から話し掛ける芸当（誇張）なんてまるで思い付かないし、とにかく会話が長続きしない。

最初は意気揚々と話し掛けて来た流暢な人間ですらも徐々に勢いを殺し、削ぎ落とし、最終的にはいたたまれない雰囲気で場を閉めてしまう。

確かに絶世の美少女だろう。しかしそれだけで判断して俗世で言う『恋人』という間柄になってしまうと百パーセント数日の内に破綻してしまう。炊事、洗濯、掃除、コミュニケーションを何一つできない彼女は酷く言ってしまえば容姿しか誇れるものはない。

新雪のように白い肌を生地に、形の良い細い眉。穏やかな曲線を描いた二重の瞳。筋の通った小さな鼻。その下にあるふっくらとした桜色の唇。それら全体を包み込む神聖な色合いな水色の髪。

男の求める基準値は軽々しく越えている。絶世の美少女という言葉が誰よりも相応しい女性である。

だが――やはりそれだけなのだ。

性格は好き嫌いの基準に達する以前にからっぽなのだ。

言葉を交えた際に『――それでも』と言って、言葉と言葉、人と人を繋げることができない。そういう人間の根っこと呼べる部分が彼女にはなかった。

しかし徐庶の言葉に反論した。

根っこのなかった月詠――以前の彼女ではありえなかった行動だ。

ずっと他者の話には介入せず、何も映さない眼で見ているふりをする。感情の起伏が薄い以前に無に等しかった。

そんな彼女が変わった。たった一日、二日程度の出会いが彼女に小さな根っこを形成させた。

それは待遇は真逆になりながら同族のように思えてならない存在との出会い。

鳳奏明。

彼は月詠と似ている。

彼は月詠と同じく確固たる自身を幼少期にて築けず、根っこと呼べる部分を持っていない。

武人だが――信念を持っていない。

それでも彼は処世術を身につけて一応程度の自分くらいは持っていた。彼なりの努力か、それとも言葉通りの諦観か、真実はおそらく鳳仙さえも知らないだろう。

そんな彼だが、しかしそんな彼だからこそ、お互い不安定な存在だからこそ少なからず分かりあえたのだ。

彼との邂逅を果たして月詠は少しずつ変わろうとしている。彼の願った通り『人として』根っこを築き上げようと努力をしている。

実に良い傾向だった。

だが彼女にはまだ早かった。

変わり始めたばかりの月詠にはまだ早かった。

――情報収集なんて。

それは当たり前と言えよう。

心変わりを始めただけでコミュニケーション自体は何の進化もしてないのだ。人に話し掛ける『勇気』がなく、人の話を聞く『寛容さ』がなく、人に話を伝える『伝達力』もない。残念ながら幼稚園児とタメを張れるかどうかすらも分からないレベルなのだ。

公孫賛の治める町に到着し、まずは彼女を引き付ける有力なものを提供する。それが劉備一行の基本方針なのだが、鳳仙は「依頼に受けてない」と抜けて徐庶も同じ理由で抜けて、月詠は鳳仙に「アンタにはまだ早い」とばっさり切り捨てられて引きずられるように劉備達と別行動をした。

しかし納得のいかなかった月詠は行き先である酒場にて奮闘し――

「惨敗だったな」

一通りの状況を眺めていた鳳仙は、ほら見ろと言わんばかりの表情で言った。

「あれならまだ僕の方が有益な情報を引き出せますね」

徐庶も、同情や思いやりの一切なく容赦無しに言う。彼らしい物言いだが鳳仙は密かに思った。

『五十歩百歩ではないか』と。

「ほら、酒を飲んで少しでも気を紛らせろ」

目に見えて分かるものではないが、ずーんと落ち込んでいることを感じ取った鳳仙は空になった酒盃に酒を注ぐ。

「……私には何の才能もありませんね」

酒盃を両手で包むように触れて月詠はポツリと呟く。

「当然です。食って寝て、食って寝ての繰り返しの日々で何かが開花するわけありません」

「追記するなら食って寝て祈って、か？」

食っちゃ寝、食っちゃ寝を否定しなかった以上、それは追い撃ちに等しいものだった。

グサリと矢が突き刺さったかのように月詠の肩が更に下がる。

鳳仙は酒盃に唇を濡らして苦笑した。

「仕方ないだろ？　アンタはそれ以外しかやらせてもらえなかったんだ。できなくて雀ろ当然の立場だったんだ。だが、これからは違うんだから少しずつやりたいことを探していけばいいじゃないか」

「……やりたいこと」

「漠然とでもいいから何か思い浮かばんか？」

月詠は視線を落として逡巡する素振りを見せる。やりたいこと……やりたいこと……やりたいこと……。頭の中でそれを繰り返して見るものの結局、数秒の硬直後にかぶりを振った。

「……分かりません」

「無理もないでしょう。彼女がこの世界に来たという非現実的なことを本当に成し遂げたのなら――それも成し遂げたばかりなら右も左も分かってない状態です。まだ状況もこの世界のことも理解できてないのに見解の幅を広めるなんて不可能ですよ。それに文化の違いもおそらく関係するでしょうね」

徐庶の的を射た発言に鳳仙は「なるほど」と納得する。参謀という立ち位置が早くも定着しつつある頭脳派の徐庶の言葉一つ一つは誰よりも地に足が着いており、核心と事実を冷静に見通していた。

この世界と月詠のいた世界はおそらく全くといっていいほど文化に違いが生じているだろう。そうなると職業や生活など様々なものに相違点が発生する。いっそ種族で区別した方が分かりやすいかもしれない。他種族の文化圏に自分がたった一人突然置いていかれた状態で何ができようか。理解者が現れたと言ってもすぐに考えが纏まるはずがない。

ならば参考くらいあってもいいのではないか。

月詠は顔を上げて二人を見た。

「……鳳仙様と徐庶くんのやりたいことはなんですか？」

「答える義務はありませんね」

徐庶はキッパリと断ってそっぽを向いた。本人が答えるつもりのないことは丸分かりだが、それと同じくらい答えは丸分かりだった。

――鳳仙の側に立ち、彼を支えたい。

そんなところだろうと月詠は胸中で『……彼はきっと書物で読んだツンデレです』と呟いた。

「俺は戦って酒飲んで肉食ってれば満足だな」

「……やりたいこと、現在進行形ですね」

鳳仙は本能に忠実だった。普段は無口や無愛想、無表情な面があまりにも多いので、冷静と思われがちだがそれは普段の日常に無関

心なだけだ。実際、戦闘が起こった時の彼は実に生き生きしている。

徐庶とのコンビは案外良いのかもしれない。

「そんなものだろう、やりたいことなんて」

「……そういうものですか」

なんともいえない表情で相槌を打った月詠はまた考え込む。

（当初の話にあった通り大陸を放浪するんだったら、まだ考えやすいんだろうが）

その様子を無表情で見守る鳳仙は愚痴るように胸中で『もしも話』を展開させる。だが、ハッと正気に戻ったかのようにかぶりを振った。

「お待たせいたしました」

給士が注文していたラーメンを三人分置いて去っていく。

腹具合的にも、タイミングには丁度良かった。

鳳仙は箸を握ってまず始めにメンマを摘む。そして、それを徐庶と月詠の器に放り込んだ。

「――何を？」

「メンマ嫌いなんだよ。あの食感はありえん」

微妙としか表現し難いあの感触。所詮引き立て役にしかなれない脇役のような味わい――と鳳仙は語る。自身が如何にメンマが嫌いなのか。

ぶっちゃけ徐庶と月詠にとってどうでもいい語らいだったので我関せずと言った様子で各々箸を進める。

すると、

「――聞き捨てならんな」

怒気を孕んだ低く冷たい声が背中を打ち付けた。

第十八話　酒場大騒動２

昔の話である。

今でこそ様々な事象に落ち着いている鳳仙だが、昔は食に関しては好奇心旺盛な部分があった。

その頃の彼はまだメンマに激しい嫌悪感を抱いてなかった。むしろ酒のツマミとして友好な関係を築いていたといえよう。

そんな彼はある日奇行に走った。

メンマは酒のツマミに案外合うものだ。だからこそ。

だからこその発想だった。

酒の中にメンマをｉｎ　ｔｏ。

名付けて『メンマ酒』。そのまま『メンマ酒』。

メンマを漬けた酒を彼は意気揚々と口に含み――

――死んだ。

振り向くと、カウンターに座る一人の女が凛とした表情をこちらに見せていた。突き刺すような炯眼は一般人なら泡吹いて倒れそうなくらい威圧感たっぷりの敵意や殺意に溢れていた。

しかし鳳仙はまるで意に介さず、遠慮なく女を観察する。

年の頃は二十歳前。その割には落ち着いた佇まいをしていた。まだ未成年でありながら、既に少女ではなく『女』として扱われるに相応しい品格を身に備えている。その証拠に女は眼光だけを鋭利にさせただけで他は冷静さを保っていた。関羽とはまた違った、理性と知性を織り込ませたようなタイプである。

顔立ちは、コケティッシュという言葉は彼女の為にあるのではないか、と彷彿させる色と艶っぽさがあった。

「メンマを嫌悪する人間が、まさかこの世に存在していようとは。これも廃れた時代の弊害か」

『ゆとり教育の弊害』と似たフレーズを持ち出して女は悲しげにかぶりを振る。

開かれた目は怒りを通り越して、哀れみに満ちていた。

「何だ、その先入観は」

呆れた面で鳳仙は溜め息と共に吐き出す。面倒臭い奴に掴まった――と。

「コリッと弾けるあの歯ごたえ――」

そんな鳳仙の前で、女は祈るように胸元で手を組み合わせ、陶酔した口調で語り始めた。

「噛むと広がる芳醇な味わい……。孤軍奮闘さえも可能な実力を持ちながら――しかし、敢えて引き立て役に徹して余所に華を持たせる謙虚さと寛容さ……。ああ、メンマ。何と甘美な響きであろうか。その言葉が耳朶を打つたびに私の心は溶け込んでしまう。ああ、メンマ。何と素晴らしき妖艶な雰囲気を漂わすのだ。私は彼から生きるということの大切さを教わった。彼の魅力にさえ気付けば、人々は争うことをやめ、泰平の世が築かれるというのに」

「……」

常識を語るように、女は迷いなく言い切った。明らかにイッてしまった口調、薔薇色に染まった頬、僅かに乱れた吐息。それはもう恋に魅せられた小娘特有の症状であり、初見で感じた艶っぽい雰囲気は、一欠けらも残っていなかった。天の川を見上げるように天を仰いだその潤んだ瞳に映るのは皿に盛られたメンマであろう。

（これも廃れた時代の弊害か）

たった今放たれた言葉の意味を鳳仙は理解した。

当然ながら、女の言葉は酔っ払いの言葉と同等の妄言だ。たった一つの食材ごときで泰平の世が訪れれば誰も苦労はないし、しかも、メンマでは力足らずも甚だしい。

カウンターには酒の瓶が無数にあった。アルコールが元々のメンマ好きを加速させたのだろう。

「そんなメンマ様に向かって侮辱の数々……。とても許されたものではないぞ！」

「好き嫌いは人好みだろ」

「メンマがそんな括りに入ると思っているのか！？」

「普通に入るだろ」

鳳仙の言っていることは普通に当然のことだ。神を崇拝する宗教にすら好き嫌いは存在しているというのに、食材で好みが別れないはずがない。

しかし、酔っ払いに正論が通じるはずもなく、鳳仙の言葉は女の怒りを煽る一方であった。

「――このままではいつまで経っても平行線を辿るだけだな」

「いや、その結論付けはおかしくないか？　まあ、分かった。俺が折れよう。悪かった。これで満足か？」

口下手の鳳仙が送る最大限の気遣いだった。

彼は舌戦にあまりにも不向きすぎる。落ち着いているとはいえ、鳳仙は徐庶と違って考えるのは苦手なのだ。もし軍隊を任されることになれば鳳仙は逡巡して「面倒臭い！　突っ込むぞ！」とひたすら突撃を繰り返すだろう。

処世術。心得ていてもしょせんは口下手。

結果は言うまでもなく、火に油を――と言うより、酔っ払いに酒を注ぐことになり、

「満足か？　だと……。そのような言葉でこの趙子龍が納得できるものか！」

自らを趙子龍と名乗った女は立て掛けていた槍を掴んだ。

「――――」

「いい」

鳳仙は目付きが鋭くなった徐庶を手で制する。

徐庶の髪が、風もないのに僅かに靡いている。その身に纏う特殊な力を、朧気に流している。それは徐庶の仙術がいつでも起動出来ることを証明していた。

この趙子龍と呼ぶ女がいくら武芸に通じていようと、アルコールを取り込んで鈍くなった感覚や知能で鎌鼬を回避することは不可能だ。

徐庶の操る風は、鎌鼬は弦を思い切り絞って放たれた矢の比ではない。その分、攻撃に重さがなく決定打を中々放てないのがデメリットだが、頸動脈を狙えば一撃だ。

徐庶は、女が鳳仙に絡んだ来た瞬間から大気を練り込んでいた。

召喚速度の速さが売りである疾風の基本は『手数で攻める』こと

だ。軽い攻撃を手札の多さで補う。

しかし今回は稀な事態。敵意は自分に向いてない。ならばと徐庶は仙術で風を集束し、ギロチンの如く鋭利で野太い一撃をいつでも射出可能にしていた。

鳳仙が『敵対する者に容赦しない』を掲げるなら徐庶は『鳳仙に敵対する者に容赦しない』を掲げている。

徐庶は槍ごと女の首を跳ね飛ばそうと、まさに行動に起こさんとする直前だったのだ。

不服そうな顔を見せる徐庶に一瞥くれて鳳仙は立ち上がる。

「すぐに終わらせれば文句ないだろ」

ここで刃傷沙汰を起こせば月詠にまで被害を被る。依頼人に泥を被せるのは傭兵の恥だ。

（それにサッサとせんとラーメンが伸びてしまう）

首筋に手刀を降ろせば幕はあっという間に引かれる。

軽い気持ちで鳳仙は柄に手を掛けることすらせずに一歩踏み出した。

「……それが過ちであることも知らずに」

「おい」

不吉なナレーションを届けた月詠に一睨みくれてやろうとすると

――

月詠の予感（ナレーション）は実現することとなった。

第十九話　真意（前書き）

大騒動と口走りながら、結局、呆気なく執着。うん、戦闘に持って行けなかった技量不足が原因。

第十九話　真意

「――――！」

月詠に文句垂れようと振り返った途端、背中を叩き付けるような殺気が襲い、全身が粟立った。

こういう時ほど、野生的な直感に優れていることに感謝する。思考よりも遥かに早く全身の毛が逆立ち、当たり前のように帯に括り付けていた刀を抜き取った。

襲い掛かる殺気の矛先、その軌跡は読めぬまま反射的に操った剣が実体を捉える。

貴金属の弾ける音が酒場一帯を掌握した。男どもの馬鹿笑いで喧騒としていた雰囲気が水を打ったように静まり返る。

それを一切無視して鳳仙は前を見る。

やはりというか、それは女の槍。そして女が繰り出した奇襲だった。

ここに来て鳳仙は自分が騙されていたことを悟った。

淀みの無い透き通った紅花色の瞳。

迷い無く、それでいて充分に体重の乗った申し分のない斬撃。

どれほど腕の立つ武芸者でも、酔った状態でこれほど正確な攻撃は不可能だ。

「女狐め」

彼女は初めから酔っていなかった。

敢えて酔ったふりをして、絡み、誘い、自らの求める状況に上手く運んだ女は喜悦を浮かべている。

「いやはや、軍務を抜け出して一時の憩いに身を浸していると、屈強な武人が現れたものだから、つい」

メンマの一悶着すらも、この舞台を整える材料として取り込んだのだろう。

「だからといって背後から斬り掛かるのは頂けんな。止めれなかったら死んでいたぞ」

「お主ならなんとかすると思っていたよ」

「その観察力には賞賛を贈る――な！」

力を込めて切り返す。

槍の軌道を逸らすと同時に、その表面に剣を滑らせる。槍をガイドにして目的地――女の胸元を切り裂かんと正確無比に突き進んでいく。

滑らせる。それは槍を押さえ付けているとも言える。相手の攻撃手段を奪いつつも自らは攻撃を繰り出す高等技術はまさに攻防一体の一撃である。

女からすればこの茶番は気まぐれのほんのお遊びに過ぎなかった。相手の力量を確実に計り切った上での行動である。

だが、武器を用いた以上、鳳仙に冗談は通じない。

手加減も出来ない。

ここが酒場とかまるで関係ない。躊躇いなく仕留めるつもりだった。

が、咄嗟に女は槍を手放して距離を取った。他の客が座る卓上（それも料理の並ぶ）に着地する。

鳳仙の力量を見抜いた観察眼もさることながら、女は危機的察知力も兼ね備えていたようだ。それでも回避しきれず右腕には鮮やかな赤が広がっている。

「……」

鳳仙は内心で感嘆した。首を跳ねるつもりだったが……と。

「やれやれ、このくらいの戯言、真剣に受け取らずともよいだろうに」

斬られたこと事態に文句は垂れず、女は相変わらず飄々とした笑みを浮かべていた。

「武器を持ち出した以上、俺は手加減はせん」
「堅い御仁よ。もう少し砕けてみてはどうだ？　そう目角を上げてばかりでは疲れるだろうに」
「残念ながらそう感じたことは一度もない。それに戦い以外では、それなりの洒落は通じるように心掛けているつもりだ」
「そうであったか？」
女は思い返すように天を仰ぐ。自分に対する態度はそうだっただろうか？
「――初対面の奴は例外だ」
「ほう、意外にも人見知りな御仁だったか」
「そういうアンタは実に飄々としている。男好きな軽い女のように、付け入る隙があると錯覚させるようでありながら、そのくせ瞳には安易に男を寄せ付けない強い光がある」
「ふむふむ。他人からはそんな風に思われていたのか私は」
頷き、納得するような表情を見せる。
「分かっててやっているだろ。アンタは客観的な自己評価が出来る性格だ」
あの飄々とした態度はポーズだ。上っ面だけの見せ掛けにすぎな

い。

あの瞳の奥で煌めく慧眼は他者の一挙手一投足さえも見逃さない――そんな知性が溢れていた。

「お主はそういうのを不得手にしていそうだな。どちらかと言うと直感など本能的なモノを武器にしている」

「そうだな」

鳳仙は素直に頷いた。

今までは一人旅をしていた事情柄、不得手と言えど無い知能を搾りに搾って生きて来た。その過程で少しずつ改善されていくのではないか、と淡い期待をしていたが、いつまで経っても目立った進歩は見えなかった。

鳳仙の辞書に『学』系統の単語は存在しない。記載される情報もお粗末だ。量は少ない、内容は大雑把。とても余所様に覗かせていいものじゃない。

すっからかん。

だが、そんなところに足りないおつむをポイ捨てして代わりを補ってくれる（それもかなり有能な）人材が現れた。

徐庶。字は元直。

鳳仙と同じ『朱目』を持ち、ゆえに虐げられる幼少期を送って来た存在。

彼は鳳仙に救われ、鳳仙と同じ師の元で学問と仙術を修めた。

風を操る――風術師。

仙術は人外の力。人の理を超越したその力は『妖』と勘違いされてもおかしくない。元々の劣悪な待遇を更に悪化させる拍車を掛けているようなものだ。

しかし、それすらも『どうでもいい』と切り捨てて、徐庶は選択した。

存在する価値すら無かった自分に初めて温もりを与えてくれた、ただ一人の役に立つために。

全ては――ただ一人のために。

自らに全身全霊を掛けて信頼してくれる男がいる。

ならばこちらも同等の信頼を返すべきだ。

鳳仙は今後、知識面を必要とされる時は徐庶に頼ることに決めていた。

それを知らず、女は続ける。

「しかしそれだけでは生きていけまい。これからの時代、ますます乱れていくことは目に見えている」

女の表情から、雰囲気から、佇まいから飄々とした不真面目な濁

りが消え失せる。

入れ代わるように姿を見せたのは瞳の鱗片に宿っていた凛々しい一面。

まさしく、武人としての姿だった。

「大陸各地で盗賊だ夜盗だ何だと匪賊共が跋扈する。それはおそらく、これからも増えていくに違いない」

「……」

鳳仙は感情の消えた表情で、見据える。

「多くの罪なき者がそれらに狩られ、血と涙を流しながら消えていく。それが当たり前だと言わんばかりに。だが、民のため、庶人のため……そんな間違った方向にこの大陸の情勢は傾かせやしない」

強く、誇りに満ちた輝かしい言葉と瞳だ。水を打ったように静まり返った酒場に残った大勢の民が、まるで救いを見出だしたかのような感嘆の吐息と共に女を見上げた。

「お主はどうだ？　この混沌に満ちた情勢――どうみる？」

鳳仙は即答した。

「興味無いな」

無感情の眼差しを注ぎ続ける。

それは嘘偽りではなく、誠に、この大陸の情勢なんてこれっぽっちも興味が無いことを示していた。

彼女は関羽たちと同じだった。

この大陸の未来を真剣に憂い、どうにかしたいと武器を取り、腕を磨き、波乱に満ちた獣道を軌跡に刻み――それでも尚、初志貫徹を続ける強者。

やはり――共感出来なかった。どうでもよかった。興味無かった。

罪もなき者？　あれが？

朱目という理由だけで自分達を嘲り、虐げ続ける民や庶人が？

なら、生を受けたその時点で罪の烙印を押された俺たちは一体何だ？　アンタの護るべき対象の中にいるか？

沸々と、無感情の瞳に憤怒の色が染め上げていく。

大陸の情勢なんて興味無い。だが連中のことになると話は違って来る。

連中がどうなろうと確かに知ったことではない。

今更、復讐なんてものをするつもりもない。かつて自分を蔑んだ連中を斬るだけの力は手に入れたが、だからとやり返すほど落ちぶれる気もない。

だが――忘れたわけではないのだ。

連中がしたきた数々の所業。それによって刻まれた傷の痛みを。

順序を履き違えてはいけない。

鳳仙が大陸の情勢や民を突き放すよりも先に、それらが鳳仙を突き放したのだ。

「……」

鳳仙は浮かび上がった感情を自制心で押さえ込み、女に背を向けて椅子に座る。

ラーメンはすっかり伸び、スープも冷めてしまった。

様々な意を込めて溜め息を漏らし、箸を握った。過去の愚かな所業より生理的に受け付けられなくなったメンマはともかく、それ以外の食べ物は基本何でも食べられる。たかが麺が伸び、スープが冷めた程度はどうってことなかった。

女はそれ以降口を開くことはなかったが、引き換えにいたたまれない雰囲気が蔓延してしまった。

お知らせ

４月の下旬に就職し、更新する暇を見付られずほったらかしにしてしまい、大変申し訳ございません。

もう一度、本当に申し訳ございません。

数週間前、ようやく仕事にも慣れて来たので執筆しようと思ったのですが、ＰＳＰには別のディスクが装填されており、恋姫のディスクは散らかった部屋の一部と化していまして……踏ん付けてしまい、壊してしまいました。

なので更新が不能になってしまったのです。本当に申し訳ございません！

代わりに裏でちまちま執筆していた作品の一つを連載します。恋姫のゲームを再入手するまで暫しこちらの作品でお待ちいただければ幸いです。

大変自分勝手な言い分ばかりで皆様にご迷惑ばかりをおかけします。早急に手配できるよう心掛けますので、どうかよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6279r/

聖魔の軌跡

2011年10月8日13時36分発行